

# 創造農村への挑戦

## 報 告 集

2012年度



文化庁

文化芸術創造都市モデル事業

仙北実行委員会

## 文化芸術創造都市モデル事業仙北実行委員会について

今回のモデル事業は、文化庁の委託事業として実施したものです。公募条件に添って、自治体・企業・市民団体・大学・マスコミにより構成された実行委員会です。

**会長** 門脇光浩・仙北市市長

**副会長** 安藤大輔・角館町観光協会会長

**委員** 野田敏明・秋田県立大学副理事長

小島克昭・株式会社わらび座代表取締役

佐川博之・秋田魁新報社取締役編集局長

森 義之・AKT秋田テレビ報道制作局長

坂本 洋・「かくのだてフィルムコミッション」会長

佐藤 強・仙北市企画政策課長

草薨博美・仙北市観光課長

成田祐子・仙北市教育委員会生涯学習課長

富岡 明・仙北市教育委員会文化財課長

大和田しずえ・「アート夢ネットあきた」事務局長

是永幹夫・劇団わらび座顧問（事務局長兼務）

**事務局** 是永幹夫（事務局長）

武藤寛幸（仙北市企画政策課）・大和田しずえ・小澤 威（わらび劇場支配人）

### 事務局

〒014-1192 秋田県仙北市田沢湖卒田字早稲田 430

たざわこ芸術村・わらび座

電話 090-3363-5529（是永）

e-mail korenaga@warabi.or.jp

- 「文化芸術創造都市モデル事業」仙北実行委員会のこの間の取り組みは、仙北地域のさまざまな文化・観光・まちづくりの取り組みの情報の還流と、新たなつながりを創る仙北地域のプラットフォームづくりの役割を果たしている。
- 圏域内の推進事業の成果のみならず、大都市圏偏重型だった「創造都市論」の展開のこれからに、「創造農村」というベクトルを導入し、2011年、第一回「創造農村ワークショップ」を成功させ、今年度は「クリエイティブタウン・フォーラムin北東北」を開催し、大都市・政令指定都市と小都市・中都市間のネットワーク化の一助となった。「国民文化祭・あきた2014」のテーマは「発見x創造 もう一つの秋田」で、創造性のある国民文化祭へ改革していく役割も、この事業推進のなかで出来たことの成果は大きい。
- 「文化芸術創造都市モデル事業」継続都市としてのこの3カ年は、県都・秋田市との「都市間連携」や「創造広域圏」にも取り組み、このことも「創造農村」提言とともに、数年前から行政単位を越えての広域的な「創造圏域」を提言してきた私たちとしては、その具体化に一步踏み出した。

#### 文化芸術創造都市モデル事業 2010年～



#### 創造都市・田園ネットワーク始動への推進エンジン 2011年～



#### 仙北市独自の「せんぼくアートプロジェクト」新年度スタート 2011年～

#### 第一回「創造農村ワークショップ」開催と成功 2012年～

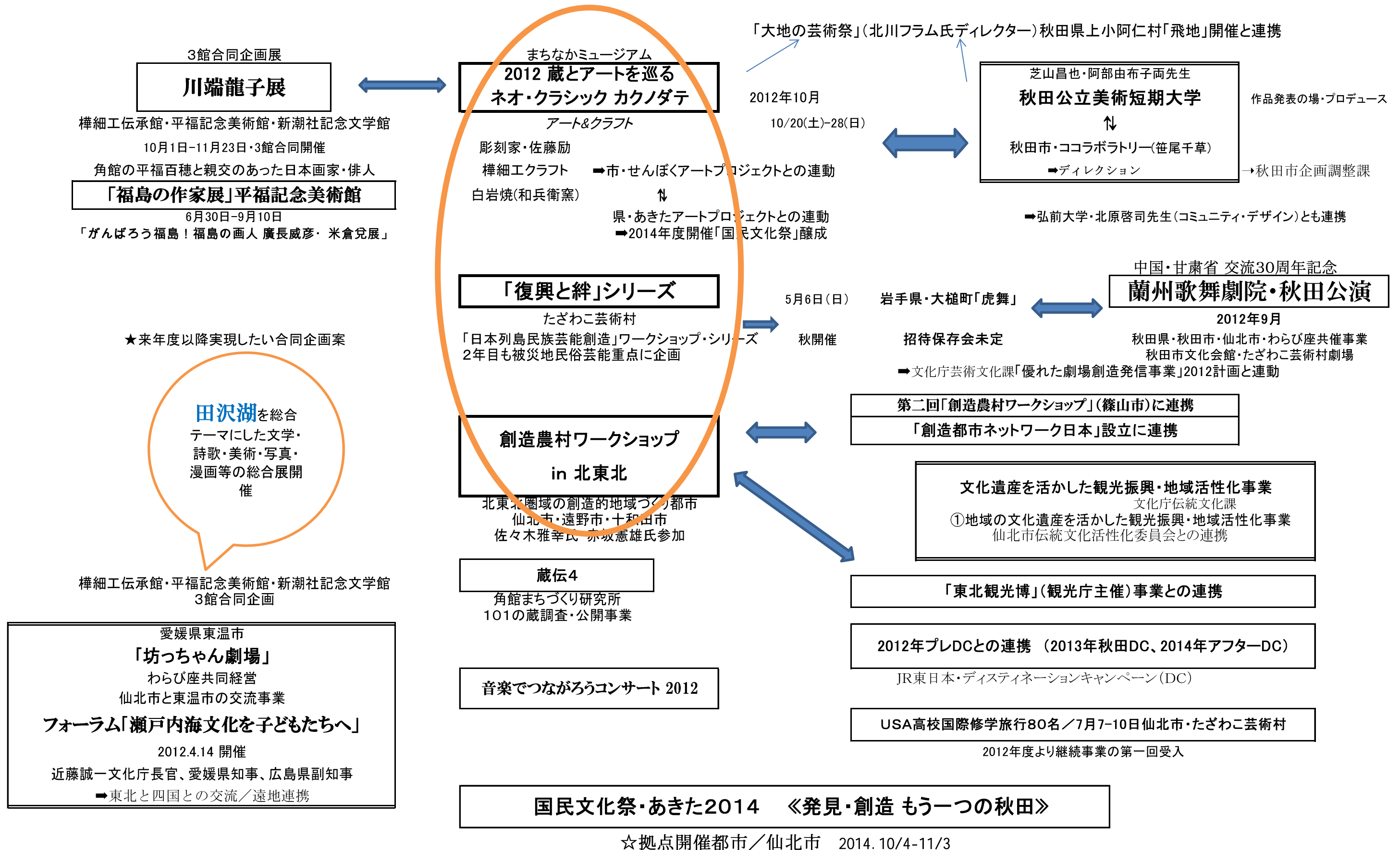


#### 「クリエイティブタウン・フォーラムin北東北」開催と成功



#### 「国民文化祭・あきた2014」開催準備と創造性ある国民文化祭改革への側面支援

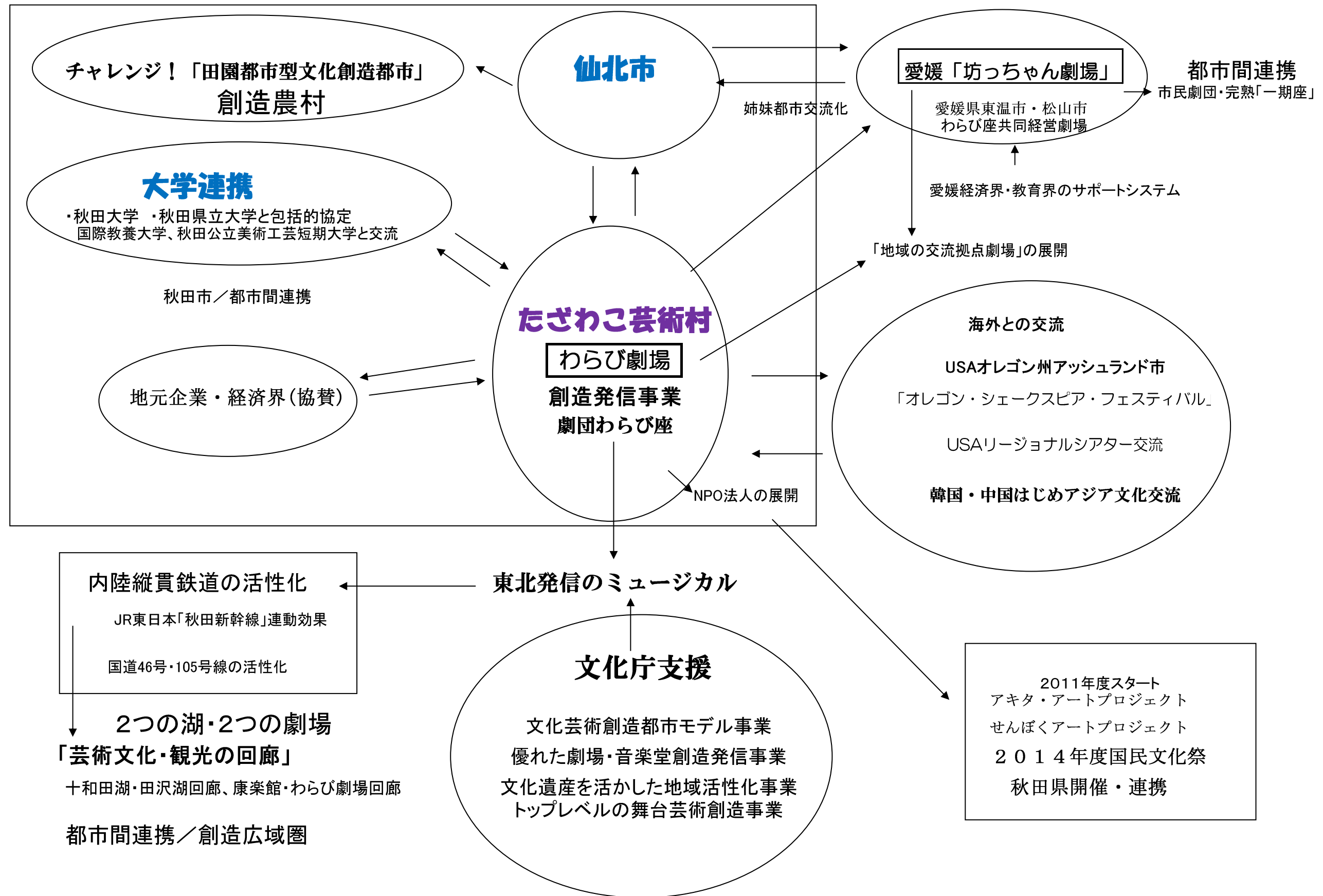
# 文化芸術創造都市モデル事業2012年度企画





# たざわこ芸術村・わらび座と地域の関係

文化・観光を活かした北東北の交流拠点都市をめざして



事業結果説明書

事業の実施日程

事業項目	実 施 日 程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①「蔵とアートを巡るネオ・クラシック」							→					
②「復興と絆ー民族芸能と地域」シリーズ		→			→				→		→	
③「クリエイティブタウン・フォーラムin北東北」							→					
④ 特別展「川端龍子展」（3館合同企画）							→					
⑤ 福島支援特別展「福島の作家たち展」			→			→						
⑥ フォーラム「瀬戸内海文化を子どもたちへ」	→											
⑦ 「音楽でつながろう」コンサート									→			
⑧「小玉暁村没後70年記念シンポジウム」							→	→	→			
⑨ 中国甘肅省「蘭州歌舞劇院」秋田公演						→						
⑩ U S A 高校生国際修学旅行				→								

事業の実績の説明

「モデル事業」として主催する①②③と、協力・関連する④～⑩の10つの事業のシナジーを活かし、秋田県独自の新規事業「あきたアートプロジェクト」や仙北市の新規事業「せんぼくアートプロジェクト」とも連動させ実施した。自治体・企業・市民団体・大学・マスコミで構成した実行委員会を回転軸に、今年度事業で提携する大学、市民団体、観光協会等の広がりなかで、前年度にスタートした「蔵とアートをめぐる」新企画の2年目や、前年度に全国初の開催となった「創造農村ワークショップ」を引き継ぎ、「クリエイティブタウン・フォーラムin北東北」を開催した。今後の継続性のための課題も浮上したが、「発見・創造 もう一つの秋田」をテーマに創造性を喚起する秋田県での国民文化祭のひとつの推進エンジンとして、仙北市の「モデル事業」の取り組みが牽引していることの評価は高い。「3.11東日本大震災」はこの国の在り方、かたちを変えるほどの出来ごとだが、大震災から3年後に東北・秋田で開催される国民文化祭の最大のテーマ「東北復興」に寄与する文化芸術創造都市モデル事業推進をさらに展開したい。

①「蔵とアートを巡るネオ・クラシック カクノダテ」 10月20日(土)ー28日(日) 会場:角館町内  
モデル事業のメイン事業。都市間連携として県都・秋田市との連携を推進。秋田市が運営母体の秋田公立美術工芸短期大学との全面的提携、秋田市のココラボトリーの笹尾千草氏との連携で、仙北市の作家たちとのコラボレーション企画。重要伝統的建造物群保存地区や蔵のまちの風土を活かした「アートdeまちあるき」を昨年に引き続き開催。一回目の予想以上の成功のうえに参加作家を増やし、展示の蔵も増やし今回開催したが、展示の場と作品とのミスマッチや、作品の質の課題も浮上した。地元と作家たちとのコミュニケーション不足を解消し、より強力な地元サイドの動きを創ることが喫緊の課題となった。2014年秋開催の国民文化祭へのつながりも含めて、継続性と発展性を今後検討したい。

②「復興と絆ー民族芸能と地域ー」シリーズ 5月・8月・2月の3回 会場:たざわこ芸術村  
前年度に引き続いての評判のシリーズの2年目。61年にわたり日本列島の民俗芸能を舞台に取り上げてきたわらび座ならではの被災地の民俗芸能支援の取り組み。今年度は、①岩手県大槌町・大槌虎舞協議会をお招きして「瓦礫の中からの復興ーコミュニティと芸能」、②東北文化財映像研究所企画制作映画「岩手県沿岸部の民俗芸能ー復興と現状」鑑賞会、③宮城県石巻市雄勝町・雄勝法印神楽保存会をお招きして「六百年の鼓動を受け継ぎ、未来に向けて舞う」を開催した。それぞれ会場いっぱいの皆様とともに、演舞に感動し、体験コーナーを楽しんだ。2014年秋開催の「国民文化祭」でも「民俗芸能の祭典」をたざわこ芸術村で開催するので、この2年間の被災地の民俗芸能の皆様との出逢いを引き継ぎたい。

③「クリエイティブタウン・フォーラムin北東北」開催 10月21日(日) 会場:たざわこ芸術村  
前年度開催の「創造農村ワークショップ」第一回大会に引き続き、北東北3県の3都市ー十和田市・遠野市・仙北市の共通の課題を、文化芸術によるまちづくりの面から語り合う場として企画されたが、開催2日前に、基調講演と遠野市を代表して参加することになっていた赤坂憲雄氏のドクターストップによる不参加等の大きな企画変更となった。幸い、コメンテーターとして参加した弘前大学の北原啓司氏が全体の推進役となり、各地の具体的事例との比較検証もおこなわれ、有意義な成果を得た。

④特別展「川端龍子展」 10月1日(月)ー11月23日(金) 角館・3館合同  
角館樺細工伝承館・平福記念美術館・新潮社記念文学館／3館合同開催に協力。  
川端龍子(りゅうし)は、1885年(明治18年)和歌山市生まれ。1966年(昭和41年)に亡くなるまで、大正・昭和の日本画家として活躍した。弟は俳句で有名な川端茅舎であり、龍子自身も「ホトギス」同人の俳人でもあり、同じ同人である角館の平福百穂と親交があった。角館の作家との縁で開催。美術館では絵画を、伝承館では図案化した工芸品を、文学館ではジャーナリストとしての面や四国巡礼した際の作品を展示。各館とも個性あふれる展示だった。

⑤福島支援特別展「福島の作家たち展」 6月30日(土)－9月10日(月) 角館町・平福記念美術館  
例年の「3館合同展」とは別に大震災後の福島支援活動の一環として、福島在住の画家たちの特別支援展を開催した。大震災後、福島県内から秋田県・仙北市地域に避難された方々も多く、被災者支援とともに、福島県内の作家たちの支援を今後も継続して実施したい。

⑥フォーラム「瀬戸内海文化を子どもたちへ」協力 4月14日(土) 会場:愛媛県「坊っちゃん劇場」  
仙北市と愛媛県東温市は「わらび劇場」と「坊っちゃん劇場」の劇場の縁で交流が進み、まず防災相互支援協定を締結した。2012年度「坊っちゃん劇場」新作初日を記念してのフォーラム開催を支援し、文化庁の近藤誠一長官の初日観劇とパネリスト参加もいただき、「坊っちゃん劇場」7年目のスタートを飾った。

⑦東日本大震災復興支援「音楽でつながろう」コンサート 協賛 12月9日(日) 角館交流センター  
毎年の「文化芸術創造都市モデル事業」と連携。仙北市在住と出身者による東日本大震災復興支援のコンサート。今回は第一部「みんなの校歌コンテスト」、第二部「音楽でつながろうコンサート」。主催は音楽でつながろうプロジェクト。コンサートに関わっている仙北市出身のHa-J氏は、国民文化祭あきたのテーマソングと若い世代のとともに作曲。

⑧「秋田民謡の父・小玉暁村没後70年記念シンポジウム」 12月2日(日) たざわこ芸術村  
秋田民謡の父・小玉暁村没後70年を記念して開催されたシンポジウム。文化庁「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」支援。小玉暁村は角館出身。「仙北歌舞団」を組織し、仙北地域の民謡を全国に広めた人物。今回の記念シンポジウムは小玉暁村の全容を解明し、仙北市圏域の豊かな文化遺産を顕彰、2013年夏に出版も予定されている。

⑨中国甘肅省「蘭州歌舞劇院」仙北市公演 9月6日(木) たざわこ芸術村・わらび劇場  
秋田県と中国甘肅省、秋田市と州都・蘭州市の交流30周年を記念して「蘭州歌舞劇院」招待公演を開催。秋田市文化会館での公演とともに「たざわこ芸術村」わらび劇場での2回公演(午後、市内の子どもたち招待、夜、市内のおとなたち招待)も開催。本事業に先立ち、7月にはわらび座ミュージカル「アトム」の甘肅省・蘭州市公演も開催された。

⑩USA高校生国際修学旅行／仙北市伝統文化・農村文化体験交流  
7月7日(土)－11日(火) たざわこ芸術村  
USAの「ピープル・トゥー・ピープル」(PTP)はアイゼンハワー大統領時代にスタートしたUSAの高校生たちの国際修学旅行。主催団体より「たざわこ芸術村」と周辺農家体験、被災地支援の体験ツアーの依頼で実施。大好評で次年度以降の実施も決まった。USAの高校生たちが「もうひとつの日本」を知る絶好の機会となった。

# 主催事業

1. 蔵とアートを巡るネオ・クラシック カクノダテ
2. 復興と絆ー民族芸能と地域ーシリーズ
3. クリエイティブタウン・フォーラム in 北東北



公式アカウントつぶやいてます  
#ネオクラシックカクノダテ  
<http://kakunodate.org>  
角館町観光協会 ☎ 0187-54-2700





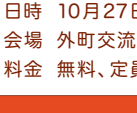
## 展示会場入場無料・会期中無休

※一部、開催日時を指定するイベント、参加有料のイベントがございます

- 【主催】文化庁「文化芸術創造都市モデル事業」仙北実行委員会
- 【共催】仙北市、仙北市教育委員会、一般社団法人角館町観光協会
- 【協力】秋田公立美術工芸短期大学、ココラボラトリー、株式会社わらび座

ギャラリートーク
出展作家が、展示された作品を前に制作の背景などをお話いたします。
講師 山本太郎（ニッポン画家）、他 日時 10月28日（日）11:00-12:00 会場 安藤家（安藤醸造元本店）蔵座敷 料金 無料、定員20名（先着順）

八柳家	安藤家	太田家
荒川家	西宮家	駅前蔵
外町交流広場	<b>蔵とアートをめぐって集める ネオ・クラシック!スタンプ</b> 各会場に設置された特製スタンプを本紙に全種類押印のうえで会期中に「駅前蔵」までお持ちいただくと、オリジナルグッズなどが当たる抽選会にお1人様1回ずつご参加いただけます！	



文化庁

蔵とアートをめぐる。

# ネオ・クラシック! カクノダテ

2012年10月20日(土) - 10月28日(日) 10:00-17:00

角館の歴史を象徴する「蔵」で 現代の「アート」に出会う旅

「創造の最先端」と「かわらずそこにあるもの」

トークショー「アートと〈崩れる〉こと」
3.11以後の世界について、被災地と関わりながら精力的に発言を続けている3名の賢者が、これからのアートをテーマに語りあいます。
出演 室井尚（横浜国立大学大学院教授／哲学者）、山内宏泰（リ阿斯・アーク美術館学芸員）、吉岡洋（京都大学大学院教授／美学者） 日時 10月20日（土）17:00-18:30 会場 外町交流広場 料金 無料、定員40名（先着順）

百杯会特別編 蔵とアートを肴に盃を酌み交わす楽しいひととき。
百杯会とは 語り伝えること 耳を傾けること 対話すること これをキーワードに 日々の生活の中で ふとわき上がる疑問 抱いている思いについて 世代や立場をこえて 語らう場です
出演 室井尚（横浜国立大学大学院教授／哲学者）、山内宏泰（リ阿斯・アーク美術館学芸員）、吉岡洋（京都大学大学院教授／美学者） 司会 笹尾千草（ココラボラトリー代表） 日時 10月20日（土）18:50-20:30 会場 外町交流広場 料金 参加費500円、定員40名（先着順）

※未成年者ならびにお車で  
ご来場の方のご飲酒は、  
固くお断りいたします。

ワークショップ「モザイクハウスを作ろう」
被災した食器の破片や古い端材からミニハウスを作ります。仙台で被災された方々の作りかけのハウスなどを引き続き制作完成させて展示します！
講師 森敏美（東北生活文化大学教授／画家、壁画作家） 北折整（東北生活文化大学教授／画家） 日時 10月22日（月）10:00-16:00 会場 外町交流広場 料金 無料、定員10名程度

※入退場は自由です  
※好きな時間帯においてください  
※欠けた茶碗や皿があれば御持参ください

土方巽の最高傑作「庖瘡譚〈完全版〉」屋外上映会
今や世界のダンスの一潮流となった「舞踏」の創始者で、秋田県出身の舞踏家である土方巽の最高傑作「庖瘡譚〈完全版〉」を上映いたします。
日時 10月27日（土）17:00-18:30 ※雨天時は同施設屋内で上映いたします 会場 外町交流広場 料金 無料、事前予約不要

特別講演「秋田の人・土方巽の創造の原点～世界の舞踏の転回」
土方巽と舞踏なくして20世紀の世界のダンス史は語れません。舞踏とは何でしょう。土方巽の人となりや思想、舞台の実際をお話いたします。
講師 森下隆（慶應義塾大学アート・センター） 日時 10月27日（土）18:45-20:00 会場 外町交流広場 料金 無料、定員40名（先着順）





【タイトル】 蔵とアートをめぐる



【コピー】 「創造の最先端」と「かわらずそこにあるもの」  
角館の歴史を象徴する「蔵」で現代の「アート」に出会う旅

【主催】 文化庁「文化芸術創造都市モデル事業」仙北実行委員会

【共催】 仙北市、仙北市教育委員会、一般社団法人角館町観光協会

【協力】 秋田公立美術工芸短期大学、ココラボトリー、株式会社わらび座

【問い合わせ先】 〒014-0369 秋田県仙北市角館町上菅沢394-2 角館町観光協会 TEL:0187-54-2700

【特設サイト】 PC用 <http://kakunodate.org> 携帯電話用 <http://kakunodate.org/m>

【日時】 2012年10月20日(土)～10月28日(日) 10:00 - 17:00  
会期中無休 入場無料 ※一部イベントは参加有料

【会場】 荒川家、安藤家、駅前蔵、太田家、外町交流広場、西宮家、八柳家

【参加者】 秋田公立美術工芸短期大学専攻科生、阿部由布子、北折整、空気ひとし、笹尾千草、佐藤家とチームほっこり、佐藤励、芝山昌也、長沢桂一、萩原健一、早川貴泰、皆川嘉博、村山留里子、室井尚、森下隆、森敏美、山内宏泰、山本太郎、吉岡洋、土方巽

【期間中イベント】 10月20日(土)17:00-18:30外町交流広場 トークショー「3・11以後—芸術の運命(仮)」  
リアス・アーク美術館学芸員・山内宏泰さん  
横浜国立大学大学院教授・室井尚さん  
京都大学大学院教授・吉岡洋さん

10月20日(土)18:50-20:30外町交流広場 「百杯会」  
ココラボトリー代表・笹尾千草さん  
リアスアーク美術館学芸員・山内さん  
横浜国立大学大学院教授・室井尚さん  
京都大学大学院教授・吉岡洋さん

10月27日(土)17:00-18:30外町交流広場 土方巽の最高傑作「疱瘡譚」屋外上映会

10月27日(土)18:45-20:00外町交流広場 特別講演「秋田の人・土方巽の創造の原点」  
慶応義塾大学アートセンター・森下隆さん

【協賛企画】 2012年10月20日(土)～10月28日(日) 角館外町商店街「ネオ・クラシック！ランチ」  
協賛各店舗にて会期中特別ランチを提供

2012年10月20日(土)～10月28日(日) スタンプラリー「ネオ・クラシック！カクノダテ」  
完成者には粗品を進呈(予定)

【搬入日時】 10月18日(木)～19日(金) 10:00-17:00

【搬出日時】 10月29日(月)10:00-17:00

## 蔵とアートをめぐるネオ・クラシック！カクノダテ連携

### 秋田公立美術工芸短期大学

(2013年4月より秋田公立美術大学に改編)

◆「文化芸術創造都市モデル事業」メイン事業の「蔵とアートをめぐるネオ・クラシック！カクノダテ」は、秋田公立美術工芸短期大学の全面協力・連携のもとで、この2年間開催され、2014年開催の「国民文化祭あきた」での開催企画にも予定されています。仙北市と県都・秋田市との都市間連携促進のうえでも一定の役割を担っています。

秋田公立美術大学の、4つの基本理念

#### 新しい芸術領域を創造し、挑戦する大学

近代日本の芸術教育において、「日本画」「油画」「彫刻」「工芸」「デザイン」「建築」等の区分が固定され、西洋近代的なものと日本古来のものが並行的に同居している状態を見直し、現代日本に合った価値観に再構成するとともに、新しい芸術的価値を生み出し、発信することに積極的に挑戦します。

#### 秋田の伝統・文化をいかし発展させる大学

「地方都市のアイデンティティを再発見し、新たな価値観を創出する」というビジョンと、「地域の多元化そして深化こそ豊かなグローバル文化を形成する」という理念に基づき、秋田における芸術創造と人材養成を実現することを通して、芸術の「地方分権」を魁けます。

また、秋田が歴史的に培ってきた伝統的な文化、生活様式、技術などを掘り起こし、その芸術的価値を再評価し、現代の秋田にいかすとともに、芸術・デザイン分野における新たな展開をもたらす、いわば地域のルネッサンスを目指します。

#### 秋田から世界へ発信する グローバル人材を育成する大学

再構成された芸術領域と地域の芸術・文化に対する深い理解や、「世界」に触れる機会・交流を持つことを基盤として、変化しつづける芸術表現の中で、アーティストあるいはデザイナーとしてその潮流をリードするために必要な、多様なルーツと出会い、価値の多様性を認め、共有できる柔軟な思考を持ち、新しい表現を模索しながらグローバルに活躍できる人材を育てます。

また、大学自体も、豊かなグローバル文化の形成を目指して、秋田に残る文化・芸術を再評価し、現代に通じるものとして復興しながら、先鋭的な芸術表現により世界に向けて新たな価値観を発信していきます。

#### まちづくりに貢献し、地域社会とともに歩む大学

公立大学の責務として、教員全員が自らの専門領域に由来する社会貢献事業を進めるとともに、県内外の大学、民間企業、小・中・高の各学校、美術館等の社会教育機関との連携を積極的に図りながら、地域ブランドの開発や地場産業の振興、芸術活動の展開などに力を発揮し、地域の活性化に貢献できる人材を育てます。



## 蔵とアートをめぐる ネオ・クラシック！カクノダテ 2012

### 【タイトル】

蔵とアートをめぐる ネオ・クラシック！カクノダテ 2012

### 【サブタイトル】

「創造の最先端」と「かわらずそこにあるもの」

角館の歴史を象徴する「蔵」で現代の「アート」に出会う旅

【主催】文化庁「文化芸術創造都市モデル事業」仙北実行委員会

【共催】仙北市、仙北市教育委員会、一般社団法人角館町観光協会

【協力】秋田公立美術工芸短期大学、ココラボラトリー、(株)わらび座

【問合せ先】角館町観光協会

【日時】2012年10月20日（土）－10月28日（日） 10:00－17:00

会期中無休 観覧料無料

### 【会場】

1 荒川家 2 外町交流広場 3 西宮家米蔵土間 4 西宮家前蔵

5 安藤家蔵／座敷 6 太田家米蔵 7 八柳家

\* 武家屋敷ゾーンに案内所を兼ねた小展示＋駅前蔵（観光案内所）小展示

### 【参加作家】

秋田公立美術工芸短期大学教諭及び学生 佐藤励 ほっこり日和 村山留里子

\* 以下新しい出展作家

山本太郎（美術家） <http://www.h7.dion.ne.jp/~nipponga/>

1974年熊本県に生まれ、京都府在住。独自の絵画表現―「ニッポン画」を提唱する。

屏風など、古来の絵画形式で、伝統的な様式と技法を用い、現代の日本の状況を端的に表現。多層的で混沌とした現代社会を、笑いと諧謔によって描く作品は、一見明快にして忘れ難い、特別な魅力を持つ。2007年日本画家としてはじめてVOCA賞を受賞

室井尚（哲学者／美術作家／評論家） <http://www.bekkoame.ne.jp/~hmuroi/>

山形県出身。横浜国立大学教授。クシシュツフ・ヴォディチコ、椿昇といったアーティストと組んで大規模なプロジェクト型アート作品を制作することで有名。現代アートや、サブカルチャーに関する鋭い評論で知られる。唐十郎を横浜国立大学教授として招聘した人物でもある。現代アート分野での代表作に「インセクト・ワールド」「アートと戦争」等。

萩原健一（写真家／映像作家）

[http://www.iamas.ac.jp/researcher/2009/10/post\\_25.html](http://www.iamas.ac.jp/researcher/2009/10/post_25.html)

山形県出身。元・岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー助授。

ビデオや写真によるドキュメンタリー映像を制作する。文化庁新進芸術家国内研修員選出、アートアワード東京 2007 特別賞受賞等の経歴があり、アジアを中心に活動を行う。代表作に「文化庁メディア芸術祭 2007」審査員推薦作品「sight seeing spot」等。

早川貴泰（アーティスト / 映像ディレクター）<http://takahirohayakawa.com/>

1979 年山形県生まれ。九州大学 ADCDU 学術研究員。高精細環境でのアニメーション表現の可能性を探求している。

個展「Asian Animism and Animation」(Thailand / 主催：国際交流基金)

をはじめ、国内外での招待上映、受賞、コラボレーション、講演、ワークショップなど多数。CHEMISTRY 「Period」 music video 制作にディレクターとして参加。

#### 【期間中イベント】 夜のネオ・クラシック！カクノDATE

10 月 20 日(土)

18:00-19:20 トークショー「3. 1 1 以後－芸術の運命」

- ・ リアスアーク美術館学芸員 山内宏康氏
- ・ 横浜国立大学大学院教授 室井尚氏
- ・ 京都大学大学院教授 吉岡洋氏

19:30-21:30 「百杯会」

- ・ ココラボラトリ代表 笹尾千草さん
- ・ リアスアーク美術館学芸員 山内宏康氏
- ・ 横浜国立大学大学院教授 室井尚氏
- ・ 京都大学大学院教授 吉岡洋氏

10 月 27 日(土)

17:00-18:30 トークショー「秋田が生んだ奇跡の人 土方巽」

慶應義塾大学アートセンター 森下隆氏

19:00-20:30 野外映像上映「土方巽の軌跡－アーカイブ」

<http://www.art-c.keio.ac.jp/archive/hijikata/>

#### 【広 報】

・ ポスター・リーフレット・のぼり等のデザイン作成

⇨秋田公立美術工芸短期大学・阿部由布子さん先生指導で「デザイン表現演習」授業で学生が制作

・ twitter や facebook の活用

#### 【商店街とのコラボレーション】

・ 「ネオ・クラシック！カクノDATE・ランチ」提供飲食店には、特性はし袋とステッカーを配布し活用



# JAPAN MEDIA ARTS FESTIVAL

文化庁メディア芸術祭

国内巡回事業

<http://jmaf-promote.jp>

# AKITA

秋田会場 

新秋田県立美術館

平成24年10月6日(土)～25日(木)

フォンテAKITA国民文化祭サテライトセンター

平成24年10月6日(土)～18日(木)

角館会場 

仙北市角館町字下丁14太田家米蔵

平成24年10月20日(土)～28日(日)

問い合わせ先 NHK インターナショナル  
jmaf-info@nhkint.or.jp  
03-6415-8500

同地区同時開催 **ネオ・クラシック!  
カクンダデ** 

# 文化庁メディア芸術祭 国内巡回事業 in 秋田

文化庁メディア芸術祭はアート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において優れた作品を顕彰するとともに、受賞作品の鑑賞機会を提供するメディア芸術の総合フェスティバルです。文化庁メディア芸術祭 国内巡回事業では、受賞作品を中心にマンガ、アニメーション、ゲーム、インタラクティブアート、ウェブ作品などを国内各地のメディア芸術関連施設やフェスティバル等にて上映・展示しています。「文化庁メディア芸術祭 国内巡回事業 in 秋田」では、秋田市内で2カ所、さらに仙北市角館町で開催のアートイベント「ネオ・クラシック! カクノダテ」内の計3カ所で受賞映像作品の上映や、昨年度（第15回）の大賞作品を紹介します。

## 秋田会場 市内2会場で開催いたします

### 国民文化祭 サテライトセンター フォンテAKITA6F

平成24年10月6日(土)～18日(木)  
平日 13:00～19:00  
土・日曜日 10:00～19:00 入場無料

### 新秋田県立美術館 2F ギャラリー

平成24年10月6日(土)～25日(木)  
平日、日曜日 10:00～18:00  
金・土曜日 10:00～20:00 ※10/19、10/20を除く 入場無料

## 角館会場

### 太田家米蔵

仙北市角館町字下丁14

平成24年10月20日(土)～28日(日)  
10:00～17:00  
入場無料・ワークショップ参加無料



角館駅よりタクシー約6分、徒歩約18分

**映像上映** 過去の受賞映像作品のプログラム上映(120分)

**パネル紹介** 昨年度(第15回)大賞作品の紹介

このほか、マンガ閲覧コーナーでは第15回マンガ部門受賞8作品が閲覧できます。



### 特別展示

昨年度(第15回)アニメーション部門、マンガ部門の受賞作品を複製原画やパネルで紹介します。

第15回アニメーション部門大賞  
新房 昭之(監督)『魔法少女まどか☆マギカ』

第15回マンガ部門優秀賞 しりあがり寿『あの日からのマンガ』

年齢を問わず楽しむ事ができる「遊具・ガジェット」や、海外でも高い評価を得ている「ゲームソフト」の作品性を、会場でぜひ体感して下さい。

第13回エンターテインメント部門優秀賞[ゲーム]  
NARUTOーナルトーナルティメットストーム開発チーム 代表 松山洋  
『NARUTOーナルトーナルティメットストーム』

単にマンガがアニメーションになったというだけではないゲームソフトの新たな世界観を、実際にプレイする事で感じて下さい。

第14回エンターテインメント部門審査委員会推薦作品[ガジェット]  
クワクポリョウタ『ニコダマ』  
身の回りのもので、キャラクター化しづらいもの、たとえばカバンや、自分の腕などにつけてみましょう。たちまち、それらが感情移入できる存在になります。

### ワークショップ 10月21日(日) 外町交流広場 各定員20名

参加ご希望の方は、次の①～④についてご記入のうえ、メールまたはFAXで下記宛先までお申し込みください。

- ①ご希望のワークショップの記号(A、B、両方)
- ②お名前
- ③ご住所
- ④お電話・FAX番号(FAXの場合のみ)

NHKインターナショナル・メディア芸術祭国内巡回事業係  
メールアドレス: info@nhkint.or.jp  
FAX: 03-6415-8502

A.「コマ撮りアニメーション制作」10:00～13:30 小学4年生～中学生対象  
自分を被写体に、デジタルカメラによるコマ撮りアニメーションづくりに挑戦します。

講師: 早川 奏太 神奈川工科大学情報メディア学科特別研究員。第10回文化庁メディア芸術祭アニメーション部門審査委員会推薦作品『雲散霧消』他。山形県出身。

B.「2つの画面を同時に鑑賞する映像制作」14:00～17:00 中学生以上対象  
2つの画面で同時に鑑賞することで意味を生じる映像作品の制作に挑みます。

講師: 萩原健一 愛知淑徳大学現代社会学部講師。代表作は第11回文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員会推薦作品『sight seeing spot』他。山形県出身。





展示の蔵や民家をめぐる



百杯会



安藤家での作品展示

## スタンプ 設置場所



蔵とアートめぐる

ネオ・クラシック!  
カクノダテ



蔵とアートをめぐるスタンプ設置

和菓子と珈琲のユニット

佐藤家

今月のお題『てん』

今年も、歴史あるまち角館にやってきました。  
アートあふれる空間の中、  
和菓子とコーヒーでほっこりしてみませんか？

今回は、蔵とアートをめぐるアートイベント、  
「ネオ・クラシック!カクノダテ」内で開催  
します。会期中は角館町内の数数カ所で様々な  
作家さんによる作品展示も目まぐるしく見られます。

ほろり白和

神無月の章

平成 24年10月28日(日)

とき: Open10:00 ~ Close17:00  
作品展示は10月20日(土)からご覧いただけます/入場無料  
 \*28日(日)は入場チケットをお買い求めください(佐藤家セット付)

ところ: 八柳家 秋田県仙北市角館町下中町  
\*標鑑工のお店の奥で開催しています。

---

和菓子とコーヒーの1日限りのカフェと作品展

出展作家: イデハワシ/sanemi/まっはしまりこ/Shun/ゴト

限定  
60  
セット

佐藤家セット(和菓子と珈琲のセット) 600円(税込)

\*10月28日のみの販売です\*売り切れの場合はご了承ください  
 \*佐藤家セットはご予約できます  
 \*ご予約の際は名前と数量をお教えください

☞ご予約/お問い合わせ先: 佐藤家 satoke.since2006@gmail.com

カフェと作品展

## 「蔵とアートをめぐるネオ・クラシック！カクノダテ 2012」の総括

◆1年目の「蔵とアートをめぐるネオ・クラシック！カクノダテ 2011」は、初回にしてはおもいのほかスムーズに準備され、内容的にも一定成功したが、2年目の本年の活動は反省点が多々あった。事業の継続にあたっては、運営体制の見直しが必須だとの意見が多く出された。2年目で少しずつ周知されるようになったことや、初回より入場者数が増えたこと、展示会場が増えたこと等の前進面もあったが、今回の反省点をもとに、抜本的検討が求められる。

### 1.理念と開催の意義について

- (1)個々のディレクター、イベントの協力者、イベントの参加者が「ネオ・クラシック！カクノダテ」について抱く理念や開催の意義がバラバラで、目標が共有されなかったことから、プロセスや達成度に関する不満が多く聞かれた。
- (2)達成目標が設定されなかったことから、イベント全体としての一体感や統一感を欠く結果となった。誰のためのイベントなのかの再確認や、出品作家と地元開催者とのコミュニケーションがもっと必要。1回目よりも、展示作品と展示の「場」とのミスマッチへの不満の声が寄せられた。

### 2.運営組織と業務内容について

- (1)ディレクターの他に、イベントに参加し、また運営にあたってくれる人材がいるのか、誰が協力者なのかといった情報が集約されず、人員の配置計画をたてられなかった。
- (2)案件ごとの決定権者が不明確だったため、細かい案件までディレクター全員の了解をとることになり、手続きが煩雑になるとともに処理に時間がかかった。
- (3)役割分担が決定されなかったため、一部の者に仕事が集中し、業務が滞る、準備不足から現場が混乱するといった不具合が生じた。
- (4)全ての企画の目的・実施条件・作業量・予算を把握し全体を管理する役をおこななかったため、個々の企画についての実施可能性を判断する作業が難航した。
- (5)併催企画の文化庁メディア芸術祭・角館の内容がなかなか決定されず、結果的に告知の足をひっぱってしまった。PR不足。

### 本事業の継続のための提案

- ・イベント全体としての理念と実施の意義の再確認
- ・イベント達成目標の設定

⇒展示コンセプトの「特化」も今後必要

県内での同種の展示が増えていくなかでの独自性の確保

どこから創客するのか。地元のポテンシャルをより活かす形での集客

「観光」とより連動していく企画の工夫

・地元の組織を確立する

①事務局の設立と専任の職員の確保

②角館町観光協会の「乗り出し」が必要

③仙北市としての位置づけを明確にし、人手も提供し、地元で動けるスタッフが必要

④ボランティア・スタッフを増やしていく

・秋田公立美術大学との連携の強化

・Twitter、facebookなどのソーシャル・ネットワークの活用

ホームページの充実化 スマートフォン対応の工夫

---

昨年度や今年度のような内容、運営体制では、次回開催は難しい。抜本的な見直しが必要。長く継続されるイベントに育てていくためにも、メンバーが入れ替わっても成り立つような枠組みを整備することが課題。2014年秋開催の「国民文化祭あきた」とその後まで見すえた戦略をどう組み立てていくのか。今回の反省点をもとに地元主導で検討していきたい。

(2013/01/15 まとめの会の意見要約)



角館・安藤家の2013年正月飾り



# 遠野物語

東日本大震災  
復興支援公演

上演記念イベント

## 映画上映会

3.11東日本大震災を乗り越えて

# 岩手県沿岸部の民俗芸能 復興と現状



上記は釜石市「虎舞フェスティバル」の様子

岩手県編54分／宮城県雄勝法印神楽編16分  
企画制作：東北文化財映像研究所

被災地の郷土芸能は  
この一年をどう過ごしたのか？  
震災後の三陸沿岸の「民俗芸能」を追った  
ドキュメンタリー映画

要  
予約

入場  
無料

日 時

2012年 8月 22日（水）

【1回目】 14:30～15:40 【2回目】 16:30～17:40

会 場

(財)民族芸術研究所 視聴覚室

※たざわこ芸術村内(仙北市田沢湖卒田字早稲田430 ☎0187-44-3903)

申 込

☎0187-44-3915

「文化芸術創造都市モデル事業」仙北実行委員会 事務局(小澤)





文化庁「文化芸術創造都市モデル事業(民族芸能創造発信事業)」

シリーズ

大震災の直後、東北の伝統芸能は傷ついた大地から<sup>ほうはい</sup>澎湃と立ち上り、多くの人々の鎮魂と再生への祈りをつないでいきました。昨年11月に始まったシリーズ「復興と絆」の2年目は、伝統芸能の生命力とコミュニティをテーマに開催します。

# 復興と絆 伝統芸能と地域

## 第4回講座「瓦礫の中からの再興—コミュニティと芸能」

講師 ▶ 岩手県大槌町・大槌虎舞協議会  
踊りとお話、ワークショップ

日  
時

2012年

5月6日 日

12:00—15:00

場  
所

秋田県仙北市  
たざわこ芸術村

大槌虎舞協議会は平成2年、大槌町郷土芸能保存団体連合会の「虎舞部門」の部会としてスタート。現在、安渡虎舞、向川原虎舞、陸中弁天虎舞、城山虎舞の4団体が連合体「大槌虎舞」として、互いの技術の向上、社会貢献等を目的とし、多岐に渡った活動をしています。

大震災の津波により一緒に活動してきた仲間を失うという悲しい出来事もありましたが、各地から「大槌虎舞」としての公演依頼が相次ぎ、その結束はますます強くなっています。

今、虎舞にこめる思い、コミュニティにとって芸能とは何か、勇壮な踊りの披露とともに、お話を伺います。虎舞を体験していただくコーナーもあります。ぜひご参加下さい。

5月6日、12時10分より、  
わらび劇場前で虎舞を披露します。  
どうぞお出かけ下さい。

入場  
無料

主催 ▶ 文化庁「文化芸術創造都市モデル事業」仙北実行委員会

お問合せ・お申込み

「文化芸術創造都市モデル事業」仙北実行委員会事務局  
「復興と絆」講座担当(管野) TEL.0187-44-3975

e-mail korenaga@warabi.or.jp  
e-mail kanno@warabi.or.jp

文化庁「文化芸術創造都市モデル事業（民族芸能創造発信事業）」  
「復興と絆 伝統芸能と地域」

## 第4回「瓦礫の中からの再興—コミュニティと芸能」

講師：岩手県大槌町・大槌虎舞協議会  
2012年5月6日（日）

司会：（雨天により「虎舞」披露の場所が変更）

まずはわらび劇場の前だと思って、踊りを見ていただきたいと思います。

では、最初に虎舞協議会会長の阿部富二男会長よろしく願いいたします。

（会場拍手）

阿部：どうも、皆さんこんにちは。大槌町から参りました大槌虎舞の阿部といいます。よろしく願います。今日はですね、本来であれば、わらび劇場の前の広いところでやるというつもりでしたが、あいにく雷も鳴って、管野さんのご配慮で、外は危ないということで、まあちょっと狭いですがけれども、ここで我々の虎舞を見ていただくことになりました。



大槌町・虎舞協議会 阿部富二男会長

我われ虎舞協議会というのは、大槌町には20数団体の芸能団体がありまして、その



中の部会、虎舞の部会として立ち上げたのが 4 団体あります。今日はその 4 団体の中から、「陸中弁天虎舞」「城山虎舞」と、この 2 団体で編成してまいりました。人数もご覧の通り、10 数人おりますので、皆さんには存分に楽しんでいただけるんじゃないかなと思いますので、どうか最後まで、岩手県の沿岸地方に伝わる伝統芸能であります「虎舞」をぜひご堪能していただきたいと思います。最後までご声援のほうよろしく願いいたします。

(会場拍手)

---「虎舞」披露 (14 分ほど)



阿部：どうもありがとうございます。それでは最後になりますけど、皆さんよくご存じの民謡の「南部俵積み唄」をお祭り風にアレンジしたものをご観いただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

---「南部俵積み唄」披露 (2 分ほど)

(会場大拍手)

司会：ありがとうございました。嵐を吹き飛ばしてくれるような虎舞でした。

このあとの会場で、阿部会長さんと副会長の菊池さんに、この芸能にかけている思いなどいろんな形でお話を伺う時間にしたいと思います。そしてまた虎舞を見せていただきます。そのあと虎舞体験コーナーということで、直に教えていただくという時間も取っておりますので、皆さんお忙しいとは思いますが、ぜひまたこちらのほうにおいで下さい。よろしくお願いします。

=====

司会：それでは、文化庁「文化芸術創造都市モデル事業」の企画に移らせていただきます。

昨年の 3.11 以降、民族芸能の生命力について考える講座をシリーズとして始めました。昨年 3 回、福島県の「じゃんがら」をはじめとしていろんな方に来ていただきました。2 年目の今年はそれをさらに深めて、コミュニティにとって芸能というのはどんな役割を果たしていくものなのか、それを皆さんと一緒に考える、そして被災地の芸能の皆さんと直にお話や踊りで触れていく、そういう場を作りたいということで企画しております。

大槌町は皆さんもご存じのように大変大きな被害を残しました。今年の 4 月 22 日に打合せを兼ねて行かせていただきましたが、やはり、「いくら映像で見てもわからないもの」をたくさん感じてまいりました。でもその中で、本当に前に向かって生きてらっしゃる方がたくさんいらして、そのなかの一人お一人が「虎舞」の皆さんだったなあと、打合せのなかでも改めて感じてきました。今日はとてもざっくばらんな形でお話を伺いたいと思っております。それでは、阿部会長と菊池副会長のお二人、前のほうに来ていただけますでしょうか。

(会場拍手)

司会：それでは、インタビュー形式、というわけではないですが、お聞きしながら進めていきたいなと思っております。阿部さん、菊池さんよろしくお願いいたします。

(会場拍手)

司会：まず先ほど、多くの方が踊りをご覧になりましたけど、この大槌の虎舞の特徴と由来、大事にされているところを少しお話していただければと思います。

阿部：皆さん、こんにちは。

我々は実は新興団体であって、300 年以上続く虎舞の団体があるんですね。大槌町とか釜石、それから山田町とか。我々の虎舞というのは虎の生態といいますか、簡単に

いえば、春夏秋冬を通して虎の動きを踊りで表そうという虎舞なんですよ。200 年も 300 年も続いている虎舞というのは昔の国姓爺合戦（近松門左衛門の浄瑠璃）の中に和唐内の虎退治という物語があるんですけども、それをモチーフにしたという言い伝えがあるんですね。まあ、我々、後発ですから、要は虎の生態をそのまま踊りで表そうという踊りでございます。

菊池：とにかく虎舞って踊りは勇壮なんですよ。その勇壮な踊りを三陸沿岸の言葉で、「浜どご」っていうんですけども、浜の気性の荒い人たちが勇壮な虎舞を表現するってことで・・・うまくこう表現できないんですけども、虎舞を演じるのが合っているというか。地域性がすごいあると思うんですね。私らの生活とすごく密着していて、「虎は一夜にして千里を歩き千里を帰る」という古い言葉があるんですけども、その言葉にあやかって、漁師さんたちが航海安全を願って、虎舞の踊りに託したっていう言い伝えがあります。そういう形で、三陸沿岸でなければ、この虎舞の踊りっていうのは表現できないと、やっている私らは思うんですね。

阿部：さっきご覧になった方々はよくわかると思うんですけど、虎の頭は張り子の虎なんですよ。要は止まったときの表情、動いたときの表情、転がったときの表情とか、それぞれ表情がたぶん違うと思うんですよ。いかにその喜怒哀楽を表わせるかというのが、踊っている人たちの個性っていいですかね、そういうのが虎舞にはよく表わされていると私は思っています。

司会：先ほど拝見していて、おっしゃる通りの魅力があるなと思いましたけど、それぞれ虎舞との出会いとか、ここが自分にとって魅力で踊っているというのは、どんなことですか。

阿部：ちょっと難しいですけども、要はですね、昔は今みたいにスポーツ少年団とかそういうのが盛んじゃなかったんですね。それで、小学生、中学生の悪ガキどもが、悪いことばかりしてるんで（笑い）、そいつらを集めて、ちょっと更生しようと（会場笑い）。まあそういうのが我々はそれが一番の始まりです（会場笑い）。みんなが集うところを作ってやろうというのがまず最初ですかね（会場笑い）。

菊池：そうですね。阿部会長は陸中弁天の所属なんですけど、私は城山虎舞の所属で、この 2 団体というのは大槌町内でも最も新しい郷土芸能の団体です。陸中弁天虎舞さんは昭和の団体、私ら城山虎舞は平成の団体なんですけども、他の 2 団体、安渡虎舞さんと向川原虎舞さんは 100 年以上の歴史がある団体さんです。私と虎舞の出会いは、子供の頃から気がついたら虎舞の真似をしていた、みたいな。それこそ夕食のときに、茶

碗を箸で叩いて太鼓の真似したりとか。そういう感じで気がついたら虎舞の真似をしていて、憧れて、虎舞をやりたいかったというのがあります。だいたい虎舞に関わっている人たちっていうのは、かっこよく踊りたいとか、そういう思いで携わってきている。それが月日重ねるうちに踊り手になったり、あるいは太鼓叩いたり、技を覚えていくわけですね。やっぱり、好きこそものの上手なれっていう言葉通りで、興味があるからみんな技をどんどん身に付けていく。自然にそういう流れになっていったという感じですかね。だからあんまり深く考えたことはないんですよ。皆さんそうだと思うんですけども、好きなものっていうのは自然に上達していくと思うし、興味があればそこにはまってしまう。自然に入ってしまったという感じですね。

司会：お若い方もいらっしゃいますね。今、何歳から何歳くらいの方で構成されているんですか。



阿部：そうですね。上は 80 いくつ、下は 3 歳くらいから（会場笑い）。ただし共通しているのは男前じゃなきゃダメ（会場笑い・拍手）。

司会：高いハードルがあるんですね。（会場笑い）

大槌虎舞協議会は連合体を作っているわけなんですけれども、連合体を作っていこうという経過、大事にしてらっしゃるということはどういうことなのでしょうか。

阿部：大槌町の連合会ができたのは、20年くらい前ですかね。

今年、確か二十歳を迎えると、私は記憶しているんですが。その前に、我々（陸中弁天虎舞）は立ち上げて38年経つんですけれども、菊池会長（城山虎舞会長）が言ったように、沿岸は気の荒い人ばかりいるんですよ。お祭りになればしょっちゅう喧嘩も絶えないし、そういう状態の中でやってきたわけなんです。で、これじゃあいかん、みんな一つになろうや、ということで20年前に、そういう目的もあって、連合会を立ち上げて、各部会を作って、我々は虎舞部会ですが、神楽部会とか鹿踊り部会とかいろいろあるんですけれども、要はその集まりが一つの連合会を作っているということです。

菊池：あと、これは大槌町に限らず、どこの町にしても今はそうだと思うんですけれども、少子化っていう問題あります。それに伴ってみんな、各団体さん助け合おうっていうことで。例えば、そっちの団体さんで人数足りないときはこっちの団体さんから人数貸してやろうやとか、そういう形でみんなお互い助け合っていこうっていうのが一番の趣旨です。まあそれが活動していくうちに、踊り技術の切磋琢磨っていうか、やりながらお互いがお互いを高めていくというようなそういう目的もあります。あとやっぱり親睦、みんなが寄りあってたまには酒でも飲もうやっていう親睦の会があったり、いろんな形で活動は多岐に渡っているっていう感じですね。

司会：今回の講座のタイトル「瓦礫の中からの再興」という言葉は、城山虎舞のホームページにあった言葉をそのまま使わせていただいているんですけれども、芸能の力というのを改めてこの震災以降、それぞれお考えになったことがあると思うんですが。

菊池：虎舞の道具とかお祭りで使った山車とか、すべて津波で流されまして、その場所とはほんとにもう更地になってしまって、人も住めない状態なんです、今。ここからもう1回始めようということで、そこから始めることに意味があると思うし、ほんと、ただそれだけなんです。全国の皆さんからほんとにいろんな支援を受けてきた中で、郷土芸能にこれだけの力があるっていうのは、この震災後に気がついたんです。みんなから「こんな時にやるの？」って言われるのかなと思ったら、意外に受け入れて下さって、「よかったよー」とか、家を流された人、家族を亡くした人たちがほんとに手を叩いて喜んでくれるんです。何で郷土芸能がこんな簡単に受け入れてもらえるのか。思ったのはやっぱり郷土芸能にはそういう力があるんだっていうことです。ほんとに震災後に思ったことだし、これから勉強ですよ。何でそれがそうなのかっていうことはこれから自分たちが探していかなきゃならないテーマというふうに思っています。





### 大槌町・小槌神社若宮跡で「虎舞」奉納

阿部：震災直後、今日使った太鼓、これ私が18年前に作った太鼓ですけどね、これだけ残ったんですよね。1つの太鼓でみんな集まって虎舞やって。実際我々のメンバーも結構流されています。私自身も愛する妻を亡くしていますんで、そういう中から始まっていますんでね、皆さんの力を借りて・・・。

司会：去年の4月17日に、お花見のところで、虎舞を始められたわけですよね。さっきおっしゃったように、あのなかで踊るっていうことに対する勇気がほんとに必要なだったと思うんですけど、「踊ろう！」と決断できたというのは、どうしてだったんでしょうね。

菊池：その場というのは、北上の芸能団体の方々、花巻の芸能団体の方々が来て、避難所でお花見をしようっていうことだったんです。そのなかで、地元から郷土芸能の団体さん出てくださいという依頼を受けたんですけども、やっぱり最初依頼を受けたときは、今言いました通り、受け入れてもらえるのかなっていうのがあったんですけども、自分たちもやっぱりどこかで集まらなきゃ、このまま終わっちゃうんじゃないかという思いがあったんです。このままみんなに連絡も取らないで、虎舞なんか出来る状態じゃないからって、みんなに集合かけなかったら、たぶんあのまま終わっていたと思います。あの時期にみんなに集まってもらって、虎舞をやるということが、私らが第一歩踏み出すための一番大事なことかなっていう思いもあったし、受け入れてもらえるかどうか分からないけれども、とりあえずみんな集まって、震災前の気持ちでもう一回やろうぜっていうことで集まってやったんです。それが結果的に受け入れてもらったのはすごい嬉しかったし、それがさっき言った、何でこういうときに郷土芸能が受け入れてもらったのかっていうことにつながっていくわけなんですけども。ほんと

にまずは自分たちを鼓舞するために、みんなでもう1回集まって、震災前みたいな感じでもう1回やってみようぜと、それが一番大事だったのかな、自分たちも前に進むために。そういう強い思いはありましたね。

阿部：私もかなり落ち込んでましたので、若い人たちからお尻を叩かれながらね、こうやってみんなから逆に元気をもらいながらね、やってましたけども。去年も実はお祭りをしたんです。ほんとに人集まるのかなって心配したんですけども、やっぱりみんな待ってるんですよ。何て言うんですかね、お祭りごとっていうか、お祭りって言えばみんな出てくるし、我々も勇気をもらうし、もっと前に進まなきゃっていう気持ちになりますしね。だから、郷土芸能やってる人たちはみんなそうだと思うんですけども、祭りごとのない町というのは栄えてはいかないし、これは昔からそういうふうに言われていますし、やっぱり我々は最後まで、若い人たちを育てながらやっていこうと思います。我々今、着ているこれ（自分のお祭り装束を見ながら）も全国の皆さんから支援をしてもらいながら、ようやくこういう立派な半纏も作らせてもらってね、我々それが恩返しだと思っていますんで、これからも皆さんよろしくお願いします。

（会場拍手）

司会：さっき下は3歳からとおっしゃいましたが、子供たちにとっての虎舞というのはどんな存在になっていますか。



大槌町虎舞協議会「後継者もばっちり」

阿部：難しいですね・・・。我々のメンバー、子供たちが主なんですけども、まあその子供たちは生まれたときから、そういう囃子を聞いたりとかして育っていますんでね、自然とそういうふうになるって言いますかね、たぶんその子供たちがこれからの虎舞を背負ってってくれるんじゃないかなと私は期待していますけども。

菊池：今回津波で、町内会とか自治会的なものが全くななくなってしまって、例えば、さっき阿部会長が言ってましたけど、大槌町に 20 団体くらいの郷土芸能の団体があって、その団体さんっていうのがすべて町名を名乗っているんですね、地域のものであり・・・で、地域がなくなって、学校も統合されて、そういう中で地域性を持ってやっていくっていうのがまだ厳しい状態です。なのでそれはもうこれからの問題になっていくと思うんですけども。やっぱり今の状態じゃまだちょっと子供たちが一生懸命できる環境じゃない。それはこれから我々がそういう環境を作っていかなきゃならないと。もちろん学校と連携してやっていかないと厳しい状態ではありますね。

司会：参加者のみなさん、ご質問等ございませんか。

質問者 1：沖縄に、獅子舞があるんですけども、虎舞も何歳から被れるとか決まっているんですか？

阿部：子供用の虎の頭もありますし、まあ別に立って歩けるようになれば（会場笑い）、踊りたいっていえば、それなりにやらせます。例えば 90 になるおじいさんが、「いやあ、おれ元気だ、踊りたい」っていえば、それはそれなりにちゃんと・・・（笑）

司会：他にご質問ございませんか。

質問者 2：さきほどもちょっとありましたが、大槌虎舞の被害状況と、その中でどういうふうにして芸能を再現してこられたのか、具体的な様子をお聞かせいただければ。

菊池：城山虎舞の場合は、すべての道具が流されました。今、最低限、虎舞をやるための道具は揃えさせてもらっているんですけども、（国際 NGO）ケア・インターナショナルジャパンさん、それから（企業）メセナ協議会さん、日本財団さん、あとは岩手県の文化振興事業団の助成金を頂いて、最低限の衣装とか太鼓とか揃えさせていただいたという感じですね。あとはお祭りで使う山車も、今、各団体さんが製作途中なんですけども、それも助成金を頂いてやってるという感じですね。



仮設住宅で鎮魂の奉納をする「虎舞」

質問者 2：頭はどこでどういうふうに作られたんですか・

菊池：うちの場合は、うちのメンバーが虎頭をつくっているんで、値段はつけられないものですよね、やっぱり製作の苦労なんか考えれば。基本的に自分たちで使うものは自分たちで作るという形でやっています。

司会：今、稽古する場所とかは？

菊池：公民館とか町中の集会所的なものがやはりすべてなくなったので、（高台にある）城山体育館、大槌の中央公民館なんですけれども、そこを利用したり、あるいは津波の被害がなかった地域にある集会所で今は練習をやっているって形ですね。

質問者 3：頭のデザインというのは、各地区とか町内で違うんですか？

阿部：地区もそうですし、各団体によっても違いますね。

司会：どういうあたりの違いがよく出るところですか・

菊池：基本的に陸中弁天虎舞さんと我々、城山虎舞の踊りはよく似ているところがありまして、それもあるんで、合同でやったときに合うというのがあるんですね、やっぱり。安渡虎舞さんという 350 年の歴史がある団体が大槌町にあるんですけれども、そこは舞台用の踊りなんです。和唐内の虎退治をモチーフに。我々はそれとはまたちょっと

違うんで、一緒にやったときに違いはかなりあるので、合わせるのは大変なんですけれども、そこはお互い、小さいころからやっていますんでね、それなりに合わせてやっているって感じですね。違いはもちろん各団体さんあって、笛のメロディー、それからかけ声、衣装も違います。今日はみんなそろった衣装着ているんですけども、各団体に戻るとそれぞれの半纏、法被があって、それぞれの衣装を着て、それぞれの活動をしていますので、大槌虎舞ってという形で合同でやることときは同じ揃いの衣装を着てやろうじゃないかということで、最近やっているという感じですね。

司会：震災に関わらず、その連合体として活動されていたということで、震災前のいろんな積み重ねといいますか、そういうことがあるかないかですいぶん違っていたという部分もあるんでしょうね。

阿部：そうですね。それこそ狭い町ですから、必ず親戚がいたり、小さいころからの先輩がいたり、そういう感じで必ずつながりがあるんです。どっかでみんなつながっているんですね。なので気心が知れている。あと大槌っていうのは中学校が1つなんですね。小学校がバラバラでも、中学校が1つで、そこにみんな通う。そういうのが大きいんじゃないんですかね。大きい町の団体さんなんかとは違って、1つになれるというのは大きいと思いますね。

司会：阿部さんの時代もそういう感じですか？

阿部：まあそうですね。私の同級生は339人いましたけれども（笑）。当時、私が中学校の頃はよく安渡虎舞さんのところに行って、このへん言うと、「かてで」もらって（笑）、そういうふうなことでましたけど。私は二十歳のあたりに陸中弁天虎舞ができましたので、今年で38年ですかね。ま、いろいろ頑張ってもらっています。

司会：去年はすいぶん、あちこちに公演に行ってもらっていますよね。

菊池：震災後、県内はもちろんですけど、今日も秋田に来させていただいたんですけども、東京とか、向川原虎舞さんは海外、ロンドンで公演したり。どこで虎舞をやるにしても、震災のときに受けた全国の皆さんからの助けに対してのお礼の気持ちもあるし、何よりやっぱりおかげさまで元気にやれていますよという姿をアピールするのに虎舞はすごい適している、合っていると思うんですね。躍動感があるし、元気をアピールできるし。ほんとに極端な言い方で言ったら、おかげさまで生き延びさせてもらったという。食うや食わずの震災直後っていうのは小さいおにぎりであっても、パン一個でも食べられたのは、そういう支援があったからだと思っています。その感謝の



気持ちとか、おかげさまでという気持ちを表すために、極力、公演は断らないでやるようにしているんですよね。その躍動感、自分たちの元気をアピールするってことで、あちこちでやらせてもらってるんですね、今。

司会：すごく元気もらいましたよね。お昼に（虎舞を）見た方たち、みんな頷いていますけれども。今朝だいぶ早くに出てこられたんですよね。

阿部：ほとんど二日酔いの人たちが多くて・・・（笑） （会場爆笑）

菊池：声ガラガラなんです（笑） （会場爆笑）

司会：今後の虎舞に託したい思いを最後に、お聞かせいただければと思います。

阿部：さっき菊池副会長も言いましたけど、この震災で、日本全国あるいは世界の人たちからもいろんな支援を受けてね、助けてもらって。これからも郷土芸能というのはたぶん100年も200年も続いていくと思うんですけども、まあ我々が死んだあとも、語り継がれるようなそういう団体にしていきたいなと思っています。

菊池：阿部会長が言うとおりの、ほんとある意味これからだって思っています。さっきも少し言ったんですけど、後継者問題っていうのもこれからです。やっとな、何とか道具を揃えられて、亡くなったメンバーもいますけれども、震災前の活動に近い形で今やっとなできるようになってきました。後継者問題はこれからほんとに考えていかなければならない問題で、ただ、こういう大槌虎舞っていう連合体もあるので、みんなで力を合わせながら伝え残していかなければならないなと。これが三陸沿岸に誇れる郷土芸能なんだっていう思いを持ってやっていきたいと思っていますし、いろんなところで皆さんにお目にかかれることがあると思うんですけども、ほんとにさっき言ったあの気持ちで、いろんな自分たちは虎舞をやっていますんで、またいろんな場所でご声援いただけたらなと思います。今日はほんとにありがとうございます。

（会場拍手）

司会：ともに東北に生きる仲間として長く皆さんと一緒に歩んでいきたいと思っています。ご参加の皆さん、虎舞協議会の皆さん、本当にありがとうございました。

（会場拍手）



わらび座とのコラボレーション

岩手県大槌町「城山虎舞」HP <http://www.shiroyama96.com/>



シリーズ

# 復興と絆 伝統芸能と地域

大震災の直後、東北の伝統芸能は傷ついた大地から澎湃と立ち上り、多くの人々の鎮魂と再生への祈りをつないでいきました。伝統芸能の生命力とコミュニティをテーマに2011年11月に始まったシリーズ「復興と絆」は、今回で最終回を迎えます。日本人の生き方、自然観、その奥に流れる心を問い続けてきた2年間の集大成が本講座です。

## 第6回講座「六百年の鼓動を受け継ぎ、未来に向けて舞う」

講師 ▶ 宮城県石巻市雄勝町・雄勝法印神楽保存会

日時

2013年  
2月17日(日)  
13:00-16:00

場所

秋田県仙北市  
たざわこ芸術村  
温泉ゆぽぽ 紫苑

宮城県石巻市雄勝町は東日本大震災の大津波により町全体が壊滅し、言葉や国指定重要無形民俗文化財「雄勝法印神楽」があります。娯楽性やアクロバティックな動きにあふれ、地元根深く、親しまれてきたこの神楽も、面や太刀、衣裳などが大津波で流され、大打撃を受けました。しかし、全国各地からの支援を得て復興の歩みを続ける雄勝法印神楽保存会のみなさんはこう言います。

「私たちには、祭りや神楽と共に生きてきた600年の歴史と伝統があります。私たちの心のよりどころとしてきた祭りや神楽は、私たちに元気を与えてくれます。必ずや元のにぎやかな雄勝の町が再興されることをめざして、日々精進してまいりたいと思っています」

大震災からまもなく2年。私たちがこれから何を見つめ、どう歩んでいくのか、共に考える場にしたいと思います。ぜひご参加ください。

- 13:00-14:00 ドキュメンタリー映画上映 「雄勝～法印神楽の復興」  
(監督:手塚眞、制作:日本ユネスコ協会連盟)
- 14:15-15:30 雄勝法印神楽公演
- 15:30-16:00 神楽保存会のみなさんとのトークタイム



主催 ▶ 文化庁「文化芸術創造都市モデル事業」仙北実行委員会

お問合せ・お申込み

「文化芸術創造都市モデル事業」仙北実行委員会事務局  
「復興と絆」講座担当(菅野) TEL.0187-44-3975

e-mail korenaga@warabi.or.jp  
e-mail kanno@warabi.or.jp

入場  
無料



文化庁「文化芸術創造都市モデル事業（民族芸能創造発信事業）」

## 「復興と絆― 伝統芸能と地域」

### 第6回「六百年の鼓動を受け継ぎ、未来に向けて舞う」

講師：宮城県石巻市雄勝町・雄勝法印神楽保存会

2013年2月17（日）13:00～16:00 たざわこ芸術村温泉ゆぽぽ 紫苑

司会：文化庁の「文化芸術創造都市モデル事業」の採択を受け、さまざまな形で地域と文化の関わりを考え合ってきたこの取り組みも、3カ年の事業を終えようとしています。「復興と絆」は採択2年目の2011年から始まった講座です。この講座では被災地の芸能をお呼びし、直接お話を伺い、踊りにふれさせていただくことを中心に來ました。その最終回は、石巻市の雄勝法印神楽保存会のみなさんをお招きし、復興への足取りと共に、神楽の素晴らしさを感じていただければと思います。

今回は、第1部として、石巻市雄勝町と、雄勝法印神楽の復興の様子をドキュメントにおさめた映画「雄勝―法印神楽の復興」を最初にご覧いただきます。この映画は日本ユネスコ協会連盟が製作しました。監督は手塚眞さんです。手塚眞さんは手塚治虫さんのご長男ですが、わらび座は手塚先生の漫画を原作としたミュージカルを3作創っています（「火の鳥 鳳凰編」「アトム」「ブッダ」）。手塚眞さんも秋田にわらび座においで下さったこともあります。そのかたが監督をされたドキュメント映画に出ている方に來ていただき、踊っていただくというのは、大変ご縁を感じています。それではご覧ください。

#### 第1部 「雄勝―法印神楽の復興」上映（（終了後、拍手）

司会：続きまして、雄勝法印神楽をご覧いただきます。先ほどの映画に出ていらした方が踊られます。お楽しみに（笑い）。

#### 第2部 雄勝法印神楽公演

##### ・魔王（まおう）

スサノウの尊が諸国を巡っているうちに、あるところに魔王が魔物どもを率いて出沒し生業ができず苦しんでいる住民をみてそれらを成敗して安住楽土を築いたという舞です。

##### ・蛭児（ひるこ）

西の宮の祭神の舞です。鯛釣りとか恵比寿舞いなどと呼ばれておりこの舞いで使用し

た鯛の切り子は大漁充滿商売繁盛の縁起ものとされ、漁師町ではその切り子を貰うと行列をなします。

・日本武尊（やまとたける）

日本武という呼び名は神代の武人ということで、人皇第11第景光天皇の皇子「小うすの尊」の物語を舞にしたものだそうです。

尊に恨みを抱く女が岩長姫になりすまし、熱田神宮に忍び入り天の叢雲の劔を盗み出し、その罪を尊に着せようとしてしました。このことを知った尊は非常に怒りました。実はこの女は大海原に住む悪鬼であることがわかり、見事退治し、宝剣を取り戻すという、荒型舞の代表的舞です。人気がある舞いで、よく舞われます。

（踊り終了後、会場大きな拍手）

司会：ありがとうございます。それでは伊藤会長からひと言お願い致します。

伊藤会長：大震災以来、全国の皆様方から絶大なるご支援をいただきまして、このように復興復活することが出来ました。今回は秋田の皆さんにお招きいただき、温かい拍手をいただきまして本当に幸せです。まだまだ大変なこともあります。これからもどうぞご支援よろしくお願いします。ありがとうございました」

（会場大きな拍手）

司会：ありがとうございました。法印神楽保存会のみなさんは昨日秋田に入られました。いろいろお話をさせていただき、こういう形で呼んでもらい、踊りを見てもらえることは本当にうれしいけれど、やっぱり、雄勝に来てほしい、雄勝で神楽を見てほしいとおっしゃっていました。

東北は今、2つの風とたたかっていると言われていています。一つは「風化」。もう一つは「風評被害」です。東北は一つになって、この風とたたかっていかなければなりません。それにはお互いの地を訪ね合い、交流することが一番です。この「復興と絆」は小さな講座ですが、この出会いが発火点となり、東北の復興への道を今後も多くみなさんと歩んでいければ幸いです。

それでは、これにて3カ年の「文化芸術創造都市モデル事業」の全事業を終了します。ありがとうございました。

（会場大きな拍手）







雄勝法印神楽保存会



2013年(平成25年)2月9日(土曜日)

# 文化往来

「道具類いっさいが流失しましたが、復活できました」。宮城県石巻市の渡波獅子風流の代表者は感無量の面もちであいさつした。2

日、東京の国立劇場小劇場で開か

## 「東北の芸能」第2弾、宮城の舞・神楽に喝采

このほかに上演された気仙沼市早

れた「東北の芸能Ⅱ 宮城」で芸能団体が次々に披露した舞が、満員の観客から熱い拍手を受けた。

ことに力強かったのは600年の歴史をもつ石巻市の雄勝法印神

を制限した歴史がある。同県文化

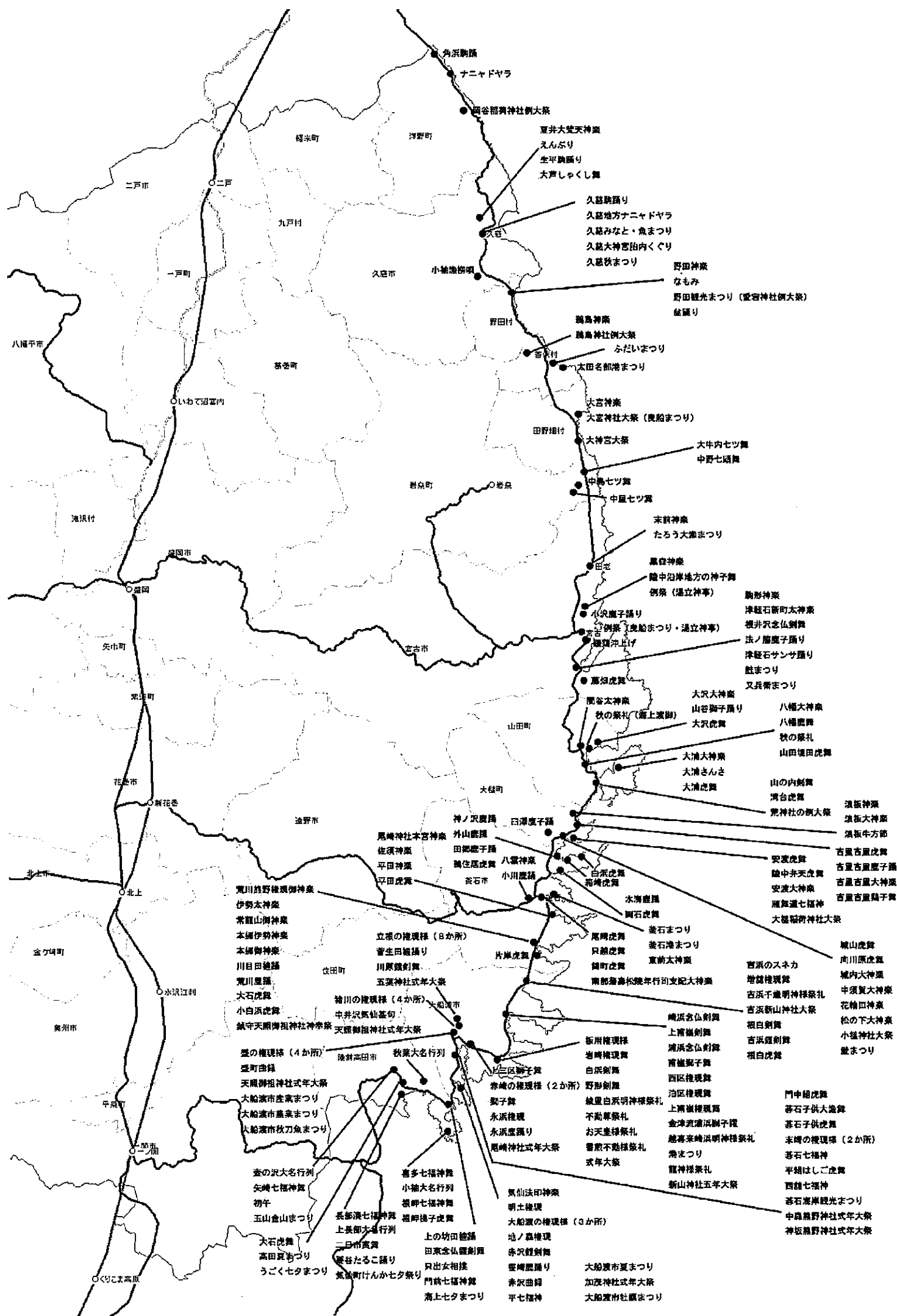
稲谷の鹿踊、温泉地で知られる秋保の田植踊、栗原市小迫の延年も、いにしえの芸能の姿をほうふつとさせた。被災地の文化遺産を紹介するシリーズは、このあと6月に福島編を予定している。

楽。やはり用具を失ったが、震災財保護課の小谷竜介氏によると、の2カ月後には無事だった者が集まり、歴史を絶やしてはならないと再開を決めた。この日は仮設舞台の装置で海と漁業にまつわる演出を特集。4本柱の上に斜めに渡り、民衆は限られた芸能にエネルギーを吹き込んだのだろう。

の歴史をもつ石巻市の雄勝法印神

を制限した歴史がある。同県文化

稲谷の鹿踊、温泉地で知られる秋保の田植踊、栗原市小迫の延年も、いにしえの芸能の姿をほうふつとさせた。被災地の文化遺産を紹介するシリーズは、このあと6月に福島編を予定している。



岩手県沿岸地方の民俗芸能及び祭礼・行事（久保田裕通氏作成）





# クリエイティブタウン フォーラム in 北東北

文化庁「文化芸術創造都市モデル事業」仙北市実行委員会は、事業3年目の今年度事業の一つとして、「クリエイティブタウン フォーラムin北東北」を企画します。この企画は昨年10月に「たざわこ芸術村」で開催しました「第一回 創造農村ワークショップ」の北東北版として、歴史的遺産を地域の文化資源として大事にし、新しい文化資源の創出とともに、観光地としての共通性を内包している青森県十和田市、岩手県遠野市、秋田県仙北市の3都市の「創造的まちづくり」の現状報告と各都市の次のステップへの挑戦と、3都市共通の課題等について語り、交流する会です。

「創造都市・創造農村」推進や日本でのネットワークづくりについて第一人者の佐々木雅幸氏、「東北学」の第二段階として遠野市を拠点に精力的に取り組まれている民俗学者の赤坂憲雄氏、現代アートでまちづくりを展開している十和田市現代美術館の藤浩志副館長、秋田を代表する観光地・角館のまちづくりを精力的に推進されている安藤大輔氏の皆様方によるシンポジウムです。

## 内容

## 十和田市、遠野市、仙北市からの 取り組み報告とディスカッション

- ・歓迎スピーチ 門脇光浩仙北市長「創造農村への挑戦」
- ・特別講演 赤坂憲雄氏「震災復興と文化芸術」
- ・パネルディスカッション
  - ◆コーディネーター 佐々木雅幸氏(大阪市立大学大学院教授)
  - ◆パネリスト
    - 遠野市・赤坂憲雄氏(学習院大学教授)
    - 十和田市・藤 浩志氏(十和田現代美術館副館長)
    - 仙北市・安藤大輔氏(角館町観光協会会長)

## 日時

2012年

**10月21日** 日

13:30-17:30

## 場所

秋田県仙北市  
たざわこ芸術村

一般公開  
(どなたでも参加可)

主催 ▶ 仙北市、文化芸術創造都市モデル事業仙北市実行委員会  
共催 ▶ 秋田県、秋田県教育委員会、NPO法人都市文化創造機構  
後援 ▶ 仙北市教育委員会 「国民文化祭・あきた2014」応援事業

**入場  
無料**



文化庁「文化芸術創造都市モデル事業」

クリエイティブタウン・フォーラム in 北東北「創造農村への挑戦」

2012年10月21日（日）

司会   ただいまから、「クリエイティブタウン・フォーラム in 北東北」を開催いたします。私は本日の司会進行を務めさせていただきます、仙北市のフリーマガジン「S ぷれっそ」を編集しております坂本佐穂と申します。どうぞよろしくお願いいたします。仙北市は文化庁の文化芸術創造都市モデル事業3ヵ年継続採択都市として、また平成23年度文化庁長官表彰、文化芸術創造都市部門の受彰都市として、この間、文化芸術による、まちづくりを進めてまいりました。その一環として1年前の昨年10月15日ここ、たざわこ芸術村のこの会場で、創造農村ワークショップ第一回大会が開催されました。全国各地から10都市の皆様が集まり、田園都市型の創造都市の在り方について意見交換をいたしました。今回の「クリエイティブタウン・フォーラム in 北東北」は、創造農村ワークショップを引き継ぐ形で北東北3県から、観光地であり歴史的遺産に恵まれ、人口規模も似通っている遠野市、十和田市、そして仙北市の3都市での創造的まちづくりの取り組みとこれからの方向、そして3都市共通の課題を討論する場です。

特別講演と遠野市のご報告をお願いしておりました赤坂憲雄先生が3日前にドクターストップがかかってしまいまして、本日来られなくなってしまいました。ご本人も参加できないということをお大変残念がっておられましたけれども、今日は佐々木雅幸先生が特別講演を行ってくださることになりました。お手元の資料にございます「震災復興と文化芸術－3.11以降の社会と創造都市・農村」という演題でお話いただきます。3.11東日本大震災から1年半が経ちまして、3.11以降の文化芸術、3.11以降の学問のあり方が問われています。大きな災害と災害のあいだの時代、災間の時代といわれる今、北東北からの創造的復興についてこのフォーラムを通して考えてみたいと思います。

それでは本日の流れについてご説明いたします。まず初めに開催地を代表い



たしまして、仙北市の門脇光浩市長より歓迎のご挨拶をいただきます。そのあと、佐々木雅幸先生にご講演をいただきまして、その後シンポジウムに入らせていただきます。シンポジウムのパネリストは門脇光浩市長、十和田市現代美術館副館長の藤浩志先生、角館町観光協会の安藤大輔会長です。コメンテーターは大阪市立大学大学院教授の佐々木雅幸先生です。コーディネーターは弘前大学の北原啓司先生にお願いいたします。なお、佐々木先生はお仕事の都合で途中退席されますのでご了承ください。

お手元に配らせていただきました資料に佐々木先生、赤坂先生、藤先生のご本を紹介させていただいておりますのでご覧ください。

それでは、歓迎の挨拶を仙北市、門脇光浩市長よりお願いいたします。

門脇市長      昨日、今日と仙北市で第八回の産業祭というのをやっております、その中で、昨日でしたけれども宮城県の女川町の方々がステージに上がって、獅子振りという伝統芸能を紹介してくださいました。会場の中にも何人か一緒にご覧になった方がいらっしゃいますので、ああ、あれだねと思っていたと思うんですけども、この話を先にしていきたいと思います。女川町、皆さんご存知のとおり被災地で、昨年3月11日の震災のあとに、5月くらいから仙北市のほうへ竹浦という集落ごと避難してこられた方々です。100名くらいの方々が半年ほど、このもう少し北のほうの田沢湖のホテルで生活をしていました。そのときに僕らも何回も皆さんとお話をしたんですけども、何に一番苦しさを感じていたかという、もちろん生活自体も大変な状況なんですけれども、実は獅子振りをしたい、と言っておりました。獅子振りは名前の通り、獅子舞のようなものでありまして、疫病退散をするという女川の各地域に伝わっている伝統芸能なんですけれども、これをやりたい。けれども笛はあるんだけど、太鼓もないし、そもそも獅子頭がない。それで大変苦しんでおられました。どういうことかという、何か辛いことがあったり、地域の団結、連携を確かめ合う、そういう場面では、獅子振りというものが当たり前にあるんだという話だったんです。あるおばあちゃんがその獅子振りの獅子頭を手作りしました。とても良くできています。一例で

すけども座布団を2つに折ってさらに2つに折ってこれを獅子頭の原型にして、ホテルにあるスリッパで角を立ててみたり、目玉はジュースの空き缶の底を2つ入れてみたり、それから避難者の方々にお届けをしたときに使った風呂敷を獅子頭の後ろにつけて胴体にしてみたりということで、本当に手作りなんですけれども、その手作りの獅子頭で獅子振りを昨日の夜やったんだよ、と泣いてお話をしてくれたおばあちゃんがありました。東日本大震災の今まさに復興ということで取り組まれていますけれども、全く何もなくなってしまった、流れてしまった地域が多数ありまして、その地域で何に拠り所を見つけるかということがとても話題になっています。高台移転ということをよくやっていますけれども、昔から目印になっていた松があるところに移りたいとかいう話がよくあるんです。例えば町の鎮守様、村の鎮守様がなくなったり、神社仏閣が全部なくなってしまったりしたときに地域は何にすがっていくのかということを実は今回の獅子振りを通して感じたんです。伝統芸能でした。たまたま今回そうだったのかもしれませんが。そういうご縁があって、昨年10月末くらいに仮設住宅ができたということで皆さんは帰られたんですけれども、その後何回も何回も仙北市のほうに集落の方々がおいでにな



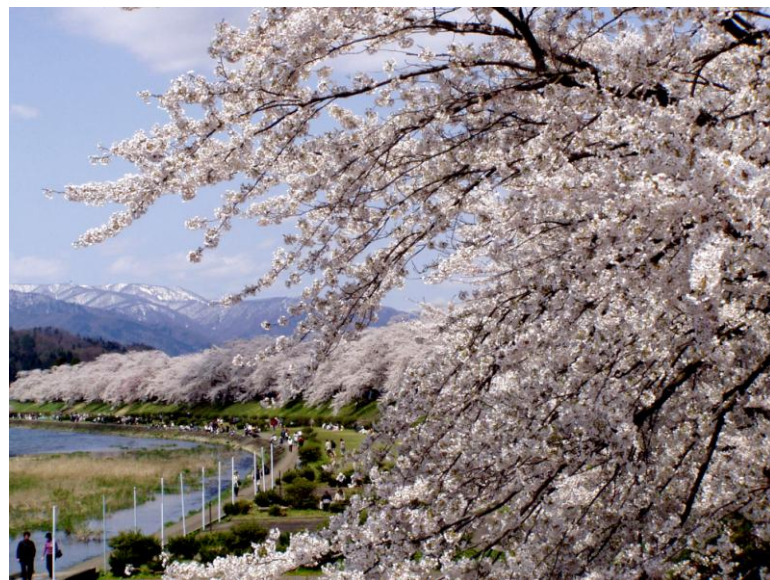
っています。仙北市の方々も何回も何回も（女川町のほうに）行って、ちょ

っとした空き地を見つけて畑を作って野菜の種をまいて収穫をして食べてく  
るということもしています。去年10月のやはり（仙北市）産業祭で、「頑張  
ってやっています」ということで、獅子振りの皆様ご一行が仙北市に來られ  
て、そのときは借り物の獅子頭でした。だけれども避難している間に作った  
手作りの獅子頭も持って踊って、泣いて、それを見ていた観客の方々も一緒  
に泣いて・・・という感動的な獅子振りが行われて、今年また、昨日やっていた  
きました。同じ感動がありました。獅子頭の首のところから「共に生きる  
」というような札を下げていたんですけれども、女川の方々から言わせると  
「共に生きる」という勇気を仙北市の方々からいただいたっていうんです  
けれども、僕らはまったく逆に思っていて、女川の方々の生き様（いきよ  
う）をみて、自分たちは何をやっているんだと思ってしまったというのが獅子  
振りを通して僕の感じた心持ちなんです。

創造的な都市をつくろうとか、創造的な農村をつくろうとかいうときに、行  
政が邪魔をしていることがいっぱいあります。例えばこれは2年くらい前に  
神戸で行われたフォーラムのときに神戸市統括監の齊木（崇人）さんがお話  
をしたんですけれども、都市計画関連法、農村活性化関連法、まったく別々  
ですね。都市計画の関係は国交省で所管していて、農山村活性化のほうにつ  
いては農水省が所管している。別の法律で分けをして、地域を作っていこ  
うという考え方なんでしょうけど、もちろんそれは広い分野ですので、いろ  
んな分けをしなければいけないことはわかるんですけれども、都市の機能  
とか農村の機能をそもそも分けて考えるという考え方に大きな疑問がある  
ということが1つ。それからそこで生まれる、もしくは生み出される土壌を作  
るというようなものに対して行政が区切りを持つかのような対応をしている  
ということにも疑問を感じる。生まれるものは生まれるわけです。生まれる  
ものはそう思っている人が生み出すということが1つと、それを生み出させ  
る環境から生まれるわけです。それは都市も農村も関係ないと自分は思っ  
ているわけですけれども、だとすると例えば超近代的な都市で生まれるものは  
そういう背景を持って生まれてくるといいますし、農山村についてもそうい  
う背景を持って文化芸術、伝承芸能が生まれて、今でも継続して行われてい  
るというバックボーンがあるわけですけれども。どっちがいいとかどっちが  
悪いとかいうことではない。創造的な都市と創造的な農村というものが両立

してはじめて日本の国土はお互いに元気良くなるはずだと思っています。だから、1つの概念にこだわることがないように、農村は農村の豊かさを自分たちでもっと自覚しなければならない、要するに自分たちの住んでいるところの良さだったり、もしくは辛さだったり悲しさだったりというものをきちんと自分たちが自覚するということが新しい農村というか文化力というか農村力というものを生み出していく土壌にならなければならないと思っております。話を戻しますけれども、齊木先生がお話をしたように法律で変な区切りをつけているということに疑問を感じていることと、それから妙な都市への期待、そういう期待を抱く農村というものの時代の錯誤の悲しさみたいなものもいつも感じています。

ここ、わらび座はもう61年になります。61年ここで根を張って頑張って、地域の文化であったり、伝統的なものであったり、全国のお祭りとか様々なものを収集し、また発信していくというような活動をしていて、まさにこれが創造的な活動であるというふうに思っています。ですから今日のフォーラムがここで開催されなければいけない必然性があったということもどうか皆様にご理解をいただきたいと思っております。



角館の桜並木

仙北市は町が2つと村が1つ、一緒になって8年前にできた市ですがけれども、3万人くらいしか人口はありません。ただその人口3万人のなかの多様性



この後の様々な、佐々木先生の特別講演であったり、パネルディスカッションであったりということで、ここでまた元気をもらって、よーし少し頑張ってみるかという気持ちになっていただけるような機会になればありがたいと思います。今日は5時半くらいまでの時間ですね。産業祭も同じ地区で行っていますけれども、残念ながら5時半には終わっていますので、このわらび座さんでお楽しみいただきながら、できればもう一泊、もう一泊というふうに仙北市にできるだけお留まりいただきたいと思います。また角館のほうでは「ネオ・クラシック！カクノダテ」が始まっております。様々な蔵

などを活用した異空間があります。蔵と超近代的なアートとのマッチングだっ

たり、本当にドキドキする空間が広がっているところがたくさんありますので、そこもぜひご覧いただきたいと思っております。重ねて、皆様、仙北市にお越しいただきましたことを感謝申し上げます。どうかよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

司会 門脇市長ありがとうございました。市長には後ほどのシンポジウムでもパネリストとして参加していただくことになっています。それでは次に佐々木雅幸先生の特別講演です。本日の演題は「震災復興と文化芸術－3. 1 1以降の社会と創造都市・農村」。

では佐々木先生お願いいたします。

佐々木 皆さんこんにちは。私は東北学はわかりませんので、当然、赤坂先生のピンチヒッターはできないのですが、今日は私の個人的な体験を通して、最初に少しお話をしてみたいと思います。

お手元に最近私の書きました本のはしがきというものがあまして、そのはしがきの中ほどからのところに、昨年ちょうどこちらで10月15日に創造農村ワークショップをやらせていただいたということと、そのあとに今スライドで出ております鵜鳥神楽という神楽を震災のあとで、私どもの大学でお招きして大阪の市内と神戸の長田という阪神大震災のあったところですが、そこで神楽の奉納をしてもらったんですが、それを通じて、伝統芸能とか伝統文化、先ほど門脇市長も言われましたが、この鵜鳥神楽の場合は幸いにして、獅子頭は残ったんですね。ただこれは巡回していく神楽なものですから、それを迎える宿が被災しているということがあって、何とかこれを維持するために大阪にも来てもらおうという形で、都市と農村という関係で、農村のものである伝統的な芸能というものを都市の力で維持していこうという試みをいたしました。

そのときに改めて思ったんですが、今日もわらび座の舞台で「遠野物語」を



拝見して、やはり東北というところになぜこれだけたくさんの伝統芸能、伝統工芸が残っているのか、日本のなかでも非常にたくさんのものがここに残っているということはおそらく歴史的に繰り返し大きな災害があって、その災害の中で生き残った人たちが死者を弔い、自分たちがその死者の命まで生きるというために自分たちを奮い起こす必要があるわけですね。同時にその自然の脅威というものに対しては、恐れを持ち、そして敬い、つまり畏敬の念を持ちながら、死者と現在生きている生命とのつながり、それを感じながら同時に、生きる力を奮い立たせる。たぶんその力が伝統芸能をこれだけたくさん残してきたんだということですね。それを改めて思いました。同時に、京都に祇園祭というのがあるんですが、あれは貞観年間に始まるんですね。祇園御霊会というのがあるんですけども、これは夏の天候が子供の命を奪う、梅雨のときですね、それを祓う、清めるということで始まるんだけど、おそらく貞観大地震というものを当時の都、京都にも伝わってきていて、そういう都市と農村の関係性のなかで、祇園祭りというものもずーっと京都で続いてきた、あるいは途中で復興してきたということがあるに違いないと。考えてみると、文化の力と一言で言うわけだけれども、これは大変なもので、人間が生きる根源的な力を与える、奮い立たせるといったことがあるなとつくづく思ったわけです。

さて、今日の大きなテーマですね、大震災というものはどういうふうに捉え

られるのかといえば、いうまでもなく日本列島というものは非常に不安定なプレートの上にのっかっていますから、繰り返しこれから先も我々はそういった大きな災害に直面していかなければならない。つまり自然災害を絶えず念頭に置いた暮らしぶりというものが必要なんだと。ところがだいたい20世紀の100年間というのはですね、そういったことを忘れて、資本主義の経済の中、世界の競争のなかで、効率重視ということが国土政策にまで及ぼされてしまって、従って東京という大都市にあらゆる機能を集中してそこに集まった人口を養うために農村が食料供給基地になり、さらにはエネルギーの供給基地にされて、そしてその結果、地震多発ということがわかっているにも関わらずとんでもない危険なものをあちこちに、しかも断層の上とか、津波がくる可能性があるところにおいてしまった。こういった意味では高度経済成長政策というものが生み出した政策災害。自然災害であると同時に政策災害である。従ってそれをどういうふうに我々が乗り越えていくかということを考えたときに、人間の英知といいますか、それを集めれば、繰り返してはいけないということになるわけですね。そういった国土の効率的な利用とは違う、もっと多様性や創造性を生かした地域の自立という方向。それは都市と農村が新しいネットワーク関係を結ぶということになっていくんだろうということが私の今日のお話のメインでございます。これから先、復興、復旧をどう考えるかといったときに従来、日本は災害復旧の法律しかなかったんですね。復旧というのは元に戻すということです。となると、防波堤とか防潮堤を元に戻してもうちょっと高くするとかね、そういうことだけで済むのかと。私はとてもそんなことではないと思っているんですね。阪神淡路大震災の際に、道路とか鉄道とか物理的なインフラを先に復旧した。しかし人々の生活や心は豊かになっていない、傷ついたままである。これではいけないということで、文化芸術によるまちづくり、都市の再生という方向に神戸市は舵を切ったんですね。そのときに出てきた言葉が物理的復旧ではなくて創造的復興ということだったんです。ご承知のように今回の東日本大震災にあたって創造的復興という言葉が使われていますね。これの意味するところは単なる物理的復旧ではないということです。人々の生活に芸術文化を持ち込んで、人々がもっと創造的に生きていけるようにしようということが神戸からのメッセージだったわけですね。そういった意味で、私どもは本当の意味での創



造的な復興ということにどれだけ文化芸術が役に立つのかということを真正面から捉える必要があると思います。

さらに 20 世紀というのは大量生産、大量消費、大量流通の時代だったわけですが、それは先進国ではだんだんに行き詰まりをみせておりまして、ちょっと前まで例えば液晶テレビを大量生産した会社がもう倒産の危機にある。あるいはプラズマの大型テレビを作っていた会社もどうも危ない。そういった工場はどんどん途上国に移っています。おそらく自動車などの従来型の大量生産工場もそういう運命をたどる。そしたら、日本の社会に残るのは何なんだろう。エネルギーをそんなに使わなくても済む、そして大量生産、大量消費じゃない、もっと創造的な経済のあり方が問われるだろう。今、創造経済、創造都市という言葉が私どものこれからの方向性を指し示すものだと思うっておりまして、そういった方向についても少し考えてみたいと思っております。

創造都市というのは平たく言うと、市民の一人一人が創造的に働き、暮らし、活動する都市のことである、ということでありまして、私のように大阪から来まして、創造都市というと、まあ市長一人が創造的・・騒々しいですからね（笑）、皆さん勘違いされるんじゃないかと。そうじゃなくて市民一人一人が創造的でなくちゃいけない。市長一人でソウゾウしく騒いでいるというのはあまり創造的じゃないと私は思っているわけですね。創造都市という本を書きまして約 10 年が経っているんですが、どうも都市だけではないだろうと。創造農村というのがあるだろうということで、いろいろなアイデアをいただきまして、私なりに考えて、じゃあ創造農村というのは何かということですね、これからお話しますが、まず農村を支えるコミュニティが、自治があって、その創造活動が活発に行われていて、農村の特徴はやはり豊かな自然のなかで伝統芸能、伝統文化という固有の文化を育んできている。そしてこれまでは、大量生産の形で、農業が営まれてきているんだけど、それが農業ももっと創造的に、職人的な創造的農業に変わってくるんじゃないか。そうすることによって地域の自立性が高まって、様々なグローバルな、ローカルな問題に創造的問題解決が行えるという場が変わっていくのではないかと思います。こういった形で創造都市、創造農村というものを考えてみ

た場合に、実はヨーロッパから出てきたアイディアでございまして、20年くらい前にEUのギリシャという国、今破綻しかかっている国ですが、ここはヨーロッパ文明の発祥の地でありますし、映画女優出身の文化大臣であったメリナ・メルクーリさんという方が欧州文化首都、これからヨーロッパはユーロのような単一通貨を導入して経済は一つになってくる。国もだんだん国境が低くなってくる。ただ都市というものはそれぞれ多様な文化を持っているもので、その文化多様性ということに基づいて文化首都ということを始めようと提唱されました。それ以来、文化産業、創造産業、あるいは創造的な階級、クリエイティブクラスといますが、そういった考え方があちこちで広がってまいりました。一番わかりやすい例でいいますと、スペイン。今日このあとイタリアの話もするんですけど、ギリシャもスペインもイタリアも全部、国は破産していますよね（笑）。たぶん国は破産する時代なんですね。でも、だからといって人々の生活が同じように惨めかという逆で、国は破産しているけど、地域はもっと豊かに動いている、活動しているところがかえって多いんじゃないかと。そういう時代に入ってきたんじゃないかと私は思うんですね。バルセロナという都市はピカソやダリやミロというような画家が出たり、ガウディというようなとても変わった建物を作る建築家が出た



ガウディの教会

りしまして、バルセロナという町に行くと、この町の中心通りは車はほとんど走れなくしてあります。両側にのろのろとしか走れなくなっていて、普通、車がどんどんスピードを上げて走る道路の中心部は歩行者天国になっていて、大道芸人が5メートルおきくらいずつ並んでいるという、非常にアートな空

間です。経済効率で都市を作るんじゃなくて、人間の楽しみのために都市を造ることがやられている。広場に行きますとこんな大きな猫がどんと置いてあって、子供たちがわいわいざわざわ騒々しいわけですね。騒々しい空間ができると大人たちも釣られて集まってきて、サッカーの話とかもちろんしますね。リアルマドリッドにどうしたら勝つかとか。ちょうど阪神巨人みたいなもんですが。それと似たようなレベルで政治の話とかいろんなことが起こってくる。そういった「場」が生まれると、アイディアとアイディアがぶつかりあってもっと新しい考え方や新しい産業に結びつくようなアイディアが生まれるということが出てきます。これがバルセロナという町の特徴なんですね。こういう町のことを、私の友人のランドリーさんという方、間違わないでください、この方、洗濯屋さんではないです（笑）。ランドリーというところらへんにある洗濯屋さんのことですかといわれるんですけど。これは laundry。この人は Landry。u があるかないかの違いでございます。彼は創造都市という言葉で広めようと。私も友人なので、じゃあ広めましょうということになりまして、今から 10 年くらい前にイギリスの政府にトニー・ブレアさんという首相が出てきたときにイギリス政府は国策として創造産業を推進すると。創造産業って何かというと、音楽や舞台芸術や映像や映画やファッション、デザインですね。そういった文化的な産業群というものです。それからクラフトというものもあります。これでロンドンを再生させる。再生したので、この前もロンドンは見事にオリンピックを成功させました。開催地選考で最後まで残ったパリに勝ったんですが、パリよりもロンドンのほうが「面白そうだ」ということになって、ロンドンが勝った。オリンピックの開会式や閉会式を皆さんご覧になったと思うのですがイギリスを代表するアーティストが出てきてアートイベントが繰り広げられます。今オリンピックはスポーツの祭典ではないですね。アートとスポーツの両方の祭典に変わるんです。

都市も面白い人たちが集まるところ、例えばアメリカ人のリチャード・フロリダ、この人はピッツバーグに住んでいたんだけど、フロリダと言うんですがね（笑）、この方が、アメリカの町を調べたところ、ゲイやレズビアンという同性愛者がたくさん住んでいるとその町は面白い町として発展していくということに気がついたというので、大きな反響を呼びました。彼がもっ

とも注目した町がサンフランシスコです。サンフランシスコはアメリカの中で一番最初に同性愛者同士の結婚を認めたところでありまして、この町は公用語が8ヶ国語ということで、町の中心にありますアートセンター、Yerba Buena Center for the Arts（ヤーバ・ブエナ芸術センター）というところは様々な国々のアート作品を企画して展開する。そして町に住んでいるホームレスの人でも、アート活動をしている人はウェルカムで追い出さないというようなオープンマインドな試みをしております。当然こういったところにシリコンバレーですね、サンフランシスコから車で1時間南に下がったところにシリコンバレーがありますから、現代の新しい産業というのはこういう場所から生まれてくるということになりました。

国連の教育文化科学の専門機関でありますユネスコ、皆さん方は世界遺産、例えば平泉、富士山などの世界遺産の登録では聞いたことがあるねと思われるかもしれませんが、現に今生きている文化産業を発展させている都市、地域を応援しようということで、創造都市ネットワークということをして2004年から提唱しております。ここに挙げました7つの分野の文化産業というものを発展させている都市、今、世界34の都市が入っております、日本では神戸、名古屋、金沢という3つが入っております。世界ではさらに40くらいの都市が審査を受けるということになってきています。日本では新潟、浜松、それから札幌、そして山形県の鶴岡という比較的小さい町。鶴岡もユネスコに手



鶴岡市・致道博物館

を挙げようとしているところで、これも後ほど紹介したいと思います。国連の貿易開発会議というところでは創造経済レポートというものが出されまして、これからは工業経済の時代ではなくて、創造経済の時代であると、こういうふうなことを言っております。私はそれをちょっとこのような形でまとめておりまして、21世紀はだんだん創造経済になってくる。そうしますと20世紀



は工業製品の大量生産、大量消費、大量流通、大量廃棄の社会だった。都市の形は産業都市、工業都市です。農村といえば、その都市に食料を供給する供給基地としての位置づけだったんですね。だけどこれからは創造経済に変わるでしょう。創造経済っていうのは先ほどから挙げております文化産業などを発展させて、それで人々の文化的な消費を高めましょう。今の若い人たちは隣の人と同じ服を着ている、あるいは同じかばんを持っているというのは落ち着かないわけですね。我々の世代はみんなと同じユニフォーム、学校行くときも制服。でも今は違いますね。みんな違うものを持ちたいし、違うデザインにあこがれるわけです。流通形態もネットワーク型になり、テレビを見る人たちもうんと減ってきてまして、スマートフォンでソーシャルメディアで交流する。こうなったときに都市と農村は創造都市と創造農村という形でそれぞれが自立的にネットワークを組むようになり、農業も食料供給基地として大量生産をする時代から職人的なものづくり。例えばりんご一個も職人が作ったりんごが売れる時代です。これもあとで申しますが、大量生産できなかった在来野菜は市場から姿を消してしまったんだけど、今は反対です。例えば京都の伝統野菜、あるいは金沢の伝統野菜、これは今ブランドの価値があります。在来的な伝統的な野菜を復活させて、それを新しいイタリアンにしている鶴岡の奥田シェフ、カリスマシェフがいますね。こういった時代が変わってきている。

このユネスコの提唱している世界の都市がネットワークになっているんです。アメリカにはサンタフェという町がある。私はサンタフェは行ったことがないんですけども、写真集のことは知っています（笑）。

実はアメリカで有数のアーティストが集まる町なんですね。人口は6万5千人ですから、そんな大きい町ではありませんが、たくさんの美術館、ギャラリーがあります。この町が取り組んでいるのは世界からクリエイティブな人たちが集まって、お互いにクリエイティブな体験や交流をしようというクリエイティブツーリズムということを提唱しています。これまではマストツーリズム、団体観光で何とか観光客を増やそうと。まあ京都なんてね、私の友人が副市長をしていて、よく言うんですが、観光5千万人計画なんてやめておきなさい、5千万人来ても客単価の低い人たちだけ来てもしょうがないでしょ。

十分の一でももっとクリエイティブな人たちが集まるほうが絶対町はきれいになるし、クリエイティブになる。サンタフェでやっているのは例えば工芸作家さんたちがいますが、そういう人たちのところをビジター、ツーリストたちが訪れて一緒に作品を作ったり交流するということをどんどん広げていっている。おそらくはわらび座で様々な工芸館があったり、アーティストが住むようになってきますと、またここもクリエイティブツーリズムの拠点にそのうち変わってくるんじゃないかと思っています。



たざわこ芸術村

それから、次はイタリア。ギリシャ、スペイン、イタリア、財政危機の激しくなっているところですが、イタリアにボローニャという町があって、この町もサッカー強いですね。昔、中田英寿さんがペルージャとかボローニャにいたときは非常に輝いていました。私はここに約10年前に1年間留学しておりましたので、この町の隅から隅まで歩いておいしいワインを飲んで、オペラを観てという夢のような生活をしたんですけど、実はこの町はオペラでできた町です。まず大学がありますが、大学の本部、この大学は世界で一番古い大学なんですね。この本部の前にあるのがオペラハウスなんです。テアトロ・コムナーレ・ディ・ボローニャという。大学前の広場の向かい側にオペラハウスがあるなんていう町は日本にはちょっとないですね。さすがイタリアです。ベルディ、ロッシーニ、こういった人が活躍しまして、ロッシーニさんというのは非常に才能がありまして、オペラを創っただけではなくて、オペラはもう飽きちゃってその次にやった仕事が料理人なんですね。自分でおいしい料理をたくさん作ったので、どんどん太っちゃったですね。だから写真見るとすごい太ってますけど。料理もオペラなんですけど、この町にはたくさん職人がいます。伝統職人、例えばジュエリーを作ったりバイオリンを作ったり、こういう職人がいる。この人たちはみんなオペラをしている。職人の仕事って言うのはオペラっていうんですね、イタリアでね。オペラハウスでやるのはオペラですよ。あれは音楽のオペラと言わないとちょっと混乱します。職人の仕事はオペラです。えっと思われるかもしれませんが、工場で誰かに指図されてイヤイヤしているのはラボーロというんですね。ラボーロという言葉とオペラという言葉、違う言葉なんです。オペラというのは一人前の人間が創造的に頭と手を働かせて作る。ボローニャの町でオートバイとか自動車のメーカーがあるんですね。ドゥカティというオートバイのメーカーがあり、フェラーリという車のメーカーがあるんですね。これはヤマハとかホンダとは違う。大量生産しない。フェラーリ大量生産したらとんでもないですよ。これは少ししか作らないから高いというか、そういうものですね。つまり職人的に作っちゃう。部品の一点一点も職人が作りますから、これはオペラ。つまり大量生産、大量消費の行き詰ったあとのものづくりというのは職人的なオペラによるものづくりに変わるんじゃないかというのが私が考えていることです。そうすると農業もそういうことなんです。既存の

工業も農業もオペラでやる。その結果、作品としておいしいりんごができてくる。それから、保育園とか老人ホームとか障がい者の施設とかホームレスの施設とかこれを協同組合で運営しています。協同組合って言葉はコオペラティーバというイタリア語があります。これはオペラをみんなと一緒にやるという意味ですね。ラボーロと一緒にやるという言葉もあります。コラボレーションというんです。最近新しい公共などでコラボレーションなんて言葉を聞かれたことがあるかもしれません。私はあれ大嫌いですね。一緒に汗かくだけのつまらないもの。コオペレーションのほうが創造的にみんなと一緒にやろうということになります。そんなことでオペラとコオペラの町だと。実はこういうことを本に書きましたら、作家の井上ひさしさんがなかなか言いことを言っているねということで、自分もボローニャ行くといって行かれて書かれたのがボローニャ紀行という本です。こちらのほうが面白く書かれているので、多くの方は井上さんの本を読んでから私の本を読む方がほとんどだと思います。残念ながら井上さんは亡くなってしまったんですけども、ボローニャ紀行、とっても面白いですからぜひお読みください。こういうボローニャがやっぱり音楽の分野でユネスコの創造都市に入っているというわけであります。



ボローニャ

では日本ではどうなっているかといいますと、文化庁さんが文化芸術創造都市ということで、ユネスコがやっているなら日本でも応援しましょうと。応



援といってもですね、前の前の長官の青木（保）さんて方に呼ばれて創造都市応援するけど金がない、どうしたらいいかねと言われて、まあせめて表彰状くらい出してもらえませんか、まあ表彰状くらいなら紙一枚だから・・・ということでそこから始まったわけです。この中にですね、横浜、金沢、比較的大都市であったり中規模都市もありますが、うんと小さい町もあげております。そして東京は入れない。東京いれたらつまらないので、東京の場合は区に注目しました。豊島区。区の単位で表彰してしまおうということにいたしました。狙いは大きな町も小さな町も農村も創造的に多様な取り組みをしているというところを応援しています。

さて、神戸です。神戸はデザイン都市神戸ということでユネスコの創造都市ネットワークに2008年に入りました。それより前に1995年にご承知のように阪神淡路大震災で五千人くらいの方が亡くなりました。当時としては都市の直下で起きた非常に大きな震災で、映像で非常に激しい壊れ方しているのが出たので、海外のメディアにも流れて、もう日本はつぶれるんじゃないかと、西日本全体が潰れるような、ちょうど東日本大震災で東日本全体が潰れるような印象を海外が持ったのと同じようなことがおきました。ここではまず物理的復旧が優先されました。しかし市民から批判が出まして、自分たちの生活がきちんと回復していないし、心の傷が癒えていないのに、ビルや道路や高速道路、鉄道だけが復旧している、これでは都市が復活したとは言えないだろうと。そこで神戸市は2004年に文化創生都市という宣言をいたしまして、芸術文化というもので人々の生活やあるいは心の豊かさというものを応援していくと。そして現代アートを多面的に取り上げた、手作りの神戸ビエンナーレ。小規模なものなのですが、こういったことをやると同時に、ユネスコの創造都市ネットワークにデザインという分野で加わりました。この町のデザインの考え方は「町のデザイン」、「暮らしのデザイン」、「ものづくりのデザイン」という3つを、真ん中に書いてあります5つの視点から進めようということでございます。私もユネスコの創造都市ネットワークへの登録のときに応援いたしまして、ついこの10月6日に新しいクリエイティブデザインのセンターができました。ここは「KIITO（きいと）」という名前のセンターでありまして、お金がないから、新しいビルを建てるのではなくて、

## 「KIITO（きいと）」の活動



大正時代だったかな、輸出用の生糸を検査するための生糸検査所っていう古いビルがあったんです。これを国から払い下げしてもらって、その中を改装してアートセンターにしています。今、世界的な流れは古い建物を上手に新しい現代アートに使ったりしていくということでございます。

さて、神戸の次は金沢でありまして、実は日本の創造都市の流れを最初に取り上げたのは金沢でございました。当時私は金沢大学におりまして、市長さんや経済人といろいろ議論をしながら金沢の創造都市について社会実験を繰り返してきました。この町はまず伝統文化を大変大事にする、そして町並み



金沢 21 世紀美術館

とか伝統景観、ちょうど角館のような。そういったことを進めるために条例をしっかりと作ります。そしてその条例を町全体だけではなくて、ある地区を保存するために、こまちなみ保存条例、川の斜面の緑地を保存するために斜面緑地保存条例、町のなかを流れている用水を保存するために用水保存条例。きめ細かい条例を作って都市景観、伝統景観を守るんですね。条例の数が一番多いのが金沢市です。今これをまねして条例作りに取り組んでいるのは高松市。瀬戸内国際芸術祭を始めております高松市は金沢のあとを追いかけて

今、創造都市ということを言っています。この町が特徴とするところは大量生産の工場がありません。むしろハイテク職人企業、世界中に回転寿司の機械を作っているのは2社しかないんですが、2社とも金沢にあるんですね。これは金沢に寿司職人が多かったということがあるのか、魚がよかったのかよくわかりませんが。それから金箔工芸などのような伝統工芸を現代に生かす、そういったことがございます。金沢の場合は、特に注目されるのは繊維工場を市民が24時間自由に使える市民芸術村というものに再生した。そしてこの市民芸術村というものの成功を踏まえて若い人たちが自由に集まって文化創造ができるということと世界の最先端の現代アートが鑑賞できる場所として21世紀美術館というのを作るんです。このとき市長がずいぶん迷われまして、この町は伝統文化が非常に強いのでたくさんの人間国宝の先生方が、現代アートっていうのは50年、100年先にはみんなガラクタになるので、市長さん間違いないのは私どもが作った伝統工芸の作品はこれは価値は変わらないからこっち買ったほうがいいよって言ったんですね。そしたら、いやずーっと伝統だけやっていてもやはり町の発展性はない。現代アートという最先端を今の子供たちに見せて、その子供たちが新しく工芸作品を作ることになったときにもっと新しい工芸が生まれる。つまり伝統と先端というのは融合していかなくちゃいけないということを説明しました。蓑豊という興行師みたいな美術館長がいて、彼がオープンして半年で市内の小中学生を全員無料で招待します。集まってきた子供たちにもう一回券という券を渡しました。次はお父さんお母さんを連れてくるというふうにしたら大成功しました。今は2代目の館長秋元（雄史）さんという方です。この方は、瀬戸内の直島の美術館で活躍した人で、町の中の空き家をアートスペースに変えた経験のある方です。この方が金沢に来て、21世紀美術館がどんどん外へ出ていって、町のなかにある空き町屋にアートの場を広げ、伝統工芸と現代アートを結びつけるという非常にチャレンジングなことです。21世紀美術館のオープニングのときは、ヤノベケンジという大阪在住の現代アートの作家ですが、ジャイアント・トラヤンという大きなお人形さんを作りました。このジャイアント・トラヤンというのはなんでこんな格好をしているかということ、彼がチェルノブイリの事故で住めなくなった場所、そこの保育園を見に行ったときにあったお人形がヒントで、21世紀に核戦争のなかで

も子供たちが生き延びるためにはどんな姿かという、こんな姿になるんだということですね。それはまさに福島第一の発電所の事故の前に彼は直感したわけですね。そういったところで生き延びていく力をどう与えるかということだったんですが、この21世紀美術館、上から見ますと、丸い。この周りに作家さんのアトリエ、ショップがありまして、小さな美術館がブドウの房のようにあります。これで今34ありますが、これにもう一つ鈴木大拙館が加わって35なんですね。町の中にこういう形で出てきますと町中が美術館。山口県の萩は町中博物館ということで、まちじゅう博物館条例っていうのがあるんです。金沢はまだ町中美術館条例まではないですけど、そういう展開ということになりますと、次はクラフト、伝統工芸をいかに現代アートと結びつけていくかということに取り組んでいます。クラフトの町ということでクラフトイズム宣言というのをやりました。この宣言は伝統的ものづくりというのは、和菓子や料理、それからデジタルコンテンツなどのメディアアートの最先端のITの分野でも、ものづくりは職人的になっている。同じように農業でも職人的ものづくりというのがこれからもっと復活してくると思います。そういう中で、昨年ちょうどこの場で第1回創造農村ワークショップというのが開かれました。そこで近藤誠一（文化庁）長官が来られて、震災復興に文化芸術の力を生かそうという格調高いお話をされて、そして日本全国で創造農村づくりに取り組んでいる仲間たちが集まって議論を重ねました。



近藤誠一文化庁長官のご講演



もちろん門脇市長もおられたんですが、例えば木曽町という長野県の町があります。ここは本当に中仙道の宿場町で、林業も豊かなところではありますが、まさに地元の資源を生かした木曽学というのを始めようと。地域資源を活用するための研究所を作る。さらには農村景観というものを守るということで、フランス、イタリアに「もっとも美しい村連合」というのがあるんですが、「日本でもっとも美しい村連合」というのを作っちゃったんですね。文化景観、農村景観というのはですね、これからますます大事になります。それから先ほど言いました鶴岡です、山形県の。こちらのほうも米もお酒もおいしい、野菜もおいしいですけど、たくさんの在来の野菜があった。約70種類くらいこの土地にしかない、つまり庄内平野にしかないものがあると。ところが大量生産にのらないので、市場からどんどんどんどんなくなって、農家もう作る気がなくなったと。そんなときに現れたのが、カリスマシェフですね、奥田さん。彼はダボス会議という世界経済のフォーラムで「Japan Night2012」料理責任監を務めました。彼が地元にあるものにこだわって新しいイタリア料理を作るということに踏み出したんですね。そうしましたら、どんどんどんどん農家の人たちが元気になりました。つまりマーケットがあるわけですね。地元の野菜でないとできないような味ができるわけですね。つまり固有価値っていうんですが、そういうことによって今この町は食文化を軸にして創造都市という方向に行きまして、映画も、食文化映画祭という形になっている。こういう取り組みが1つのモデルかもしれません。それから今年は創造農村ワークショップ第2回を引き受けてくれたのが、丹波篠山にあります。今お見せしている写真はこの町を象徴していると思うんですが、まさに丹波の田園のなかで、祇園祭りに山鉾に匹敵するくらいの世界的工芸作品でできた山車が動いている。都市の文化と農村の景観が見事に一致している町なんですね。ここが創造農村の定義を作られていまして、彼らは、創造農村と創造都市はこういう違いがある、比較できるんだと。創造都市は主に芸術文化、創造農村は伝統文化を含む生活文化。創造都市は市民がプレーヤー、創造農村はコミュニティだと。こんなふうな形で、農業を創造産業にする。農業の創造産業化ということは6次産業化ということでもある。まさに日々の暮らしをクリエイティブにする。「クリエイティブくらす」、クリエイティブに暮らすと。英語でクリエイティブクラスというと創造階級、こち

らではクリエイティブな暮らし。そんなことで創造農村づくりというのが始まります。今年の2月4日に全国の約30の自治体200人が集まりまして、ネットワークを作ろうと。創造都市と創造農村のネットワークを作ろうということになりまして、来年1月に横浜でそのための会議を持つ予定でございます。何といたっても創造農村を作るためにはまず行政は役に立たないって私、言いましたけど、それはクリエイティブでない行政は役に立たないんで、行政にまずクリエイティブになってもらう。市長だけクリエイティブでもダメで、行政全体がクリエイティブになる。そのために行政の中に専門的な芸術文化委員会、アーツカウンシル、アーツコミッションというんですが、こういったものがあつたほうがいい。それから、町の皆さん方に創造農村クラブのような市民参加型のクラブがあつて。「ネオ・クラシックカクノダテ」、安藤さん頑張っておられます。こういったイベントのなかで、創造的なプロデューサーが生まれてくるといったことが必要ではないだろうかと思います。こういったことを通じて、創造都市・農村ネットワークの広がりの中で震災後の新しい創造的な日本、そして創造的なアジアというものが広がっていけばいいなと考えております。

どうもご清聴ありがとうございました。

司会 佐々木先生ありがとうございました。創造都市とは具体的にどんなものかというのが何となく見えてきたような気がいたします。決して騒々しいだけの都市とは違うということも良くわかりました。佐々木先生に改めまして盛大な拍手をお願いいたします。

司会 それではここからシンポジウムに入らせていただきます。パネリストの皆様をご紹介します。仙北市長 門脇光浩様、十和田市現代美術館副館長 藤浩志様、角館町観光協会会長 安藤大輔様。

それではコーディネーターは北原啓司先生にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。



右から安藤大輔氏、門脇光浩市長、藤浩志氏、北原啓司氏

北原 それではここからはパネルディスカッションという形で進めさせていただきたいと思います。先ほど佐々木先生のほうから、震災復興と文化芸術ということで、創造都市という言葉がそもそも出てきたところから、様々な都市、日本の今の動き、それから「都市」ではなく、「都市・農村」という表現でしたが、そこで行われている職人さんの職を大事にするものとか、育てていくような文化、様々な事例を見せていただきました。今日はここにお集まりの3人の方、特に十和田からいらした藤さんの場合にはさっきの話から言うと、創造都市の中で言うアートというもの、それを1つのきっかけにして街のみなさんがいろいろ動いていくという事例、ここ数年の間の東北の動きとしてはかなり先端的な事例かと思います。それから角館の場合には、今日はネオ・クラシックの日と重なっていますが、さっき金沢が出ていましたけれど、日本で一番最初に伝統的建造物保存地区に指定されたのは角館ですし、そういう意味でいうと、金沢と同じようにずっと昔からの生業とか、たまたまいみたいなのを今にどう発展させていくかということを実践されてきた町ですので、それは市長さんからもこれからに向けてのお話をいろいろいただけたと思いますし、安藤さんからは今までやってきていること、ネオ・クラシックあるいはその前に想 nic というのもありましたし、そういった動きについてもお話いただきたいと思います。ではさっそく、十和田市現代美術館の副館長である、藤さんのほうから皆さんに少しプレゼンテーションしていただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。



### 角館・武家屋敷

藤 トップバッターなんですね（笑）。よろしくお願いします、藤です。十和田の美術館の副館長ということで、今日登壇させていただいていますが、こういう形で登壇するのは初めてです。今までさんざんいろんなところ…昨日も実は東京都の国際シンポジウムがあって、登壇してきたんですけど、藤浩志というアーティストとしてこの30年近く、いろんな地域でいろんなプロジェクトを立ち上げる活動してきたので、アーティストという立場からプレゼンテーションしてきたことはさんざんあるんですけども、美術館の人間としてプレゼンテーションさせていただくのは初めて。今日は記念すべき日です（笑）。僕自身、先ほどのお話にありました京都で大学時代は過ごしていてその後転々としまして、今現在自宅は福岡県の糸島というところにあるのですが、もともと両親は奄美大島。金沢の話の中でも伝統工芸ということがありましたけど、うちの親戚縁者が奄美大島にある大島紬という絹織物を製造していて、そういう関係もあり、大学時代は京都市立芸術大学の染織科で制作をはじめました。大島紬について言えば奄美大島の伝統工芸だったものが60年70年代の高度経済成長期に鹿児島を代表する産業まで拡大してしまい、多いときは鹿児島県内に大型の製糸・染色工場、機械織り工場や手織りの手



工芸の工場が150カ所くらいあったのですが、バブル崩壊以降大きな工場や量産するための手工業の工場もどんどん廃業してゆき、今は伝統的な手法を大切にする工房での生産に落ち着いていったので、ある意味奄美大島のもともとの伝統文化の一つとしていい形に戻っていったのかなと。学生時代に工芸作品の制作を始めた頃、そのような流れを見ていく中で、モノが作られてゆく仕組みと地域との関わりに興味を持つことになり、いろんな地域での新しい形でのアートプロジェクトの立ち上げに関わるようになり現在ここにいるということになります。そもそもなぜそのようなアーティストが美術館の副館長になったかといいますと、美術館が今までは市の直営だったんですが、この春からナンジョウアンドアソシエイツというところが指定管理になりまして、新しい運営体制を作中で、新しい活動を作っていかなきゃいけない状況にあるということだと思います。

では、美術館の紹介などから…。しかし、僕は4月1日から赴任してきているものですから、北原先生のほうが絶対に詳しい。このパワーポイントも以前だれかが作ったものをいただいてきましたので、ちゃんとお話しできるか



十和田市現代美術館

どうか…。まずざっとどんな建物かということ。十和田市現代美術館は計画としては10年くらい前から始まり、5年前にできたアートセンターということになります。先ほどの話に出ました金沢21世紀美術館と同じ建築家の西沢立衛さんによる建築ですが、金沢のあとにできた美術館になります。いわゆる美術作品を展示する空間を象徴的にホワイトキューブという言い方をしまして、いわゆる四角い箱ですね。創造的な活動を展示する四角い箱・ホワイトキューブがまちの中に広がっていくというコンセプトで作られています。美術館という名称ですが、実は作品を収集・コレクションし、保存し、教育普及していくいわゆる博物館としての美術館ではありません。どちらかというと、パブリックアートの延長で計画されていて、屋根付きパブリックアートの集合施設といったほうがいいかもしれません。1部屋に1作品が計画され展示されています。これは建築の計画の段階で、何人かの作家にそれぞれ空間と作品の提案をしてもらい、その中からセレクトして、建築家と協議しながら、パーマネント作品として27点が展示されています。これは入れ替わりません。いつ来ていただいても必ずここにあるということです。今までの美術館とかアートセンターの場合、箱はあるんですけども中身が入れ替わっていきます。ですから象徴的にどの作品、どういう作品があるのかというのは行って見ないとわからない。ところがここは大仏さん効果みたいに4mの高さのおばちゃんに必ず会えるということです。4メートルの高さの



あるロン・ミュエクという作家の作品ですが、もともと彼は映画の特殊メイ

クをずっとやっている作家ですから素材感も表情もやたらとリアルに作られている。大きな人に会いに観光客がやってくるというのが特徴ですね(笑)。作品といっても全作品、鑑賞者を作品空間に取り込むような仕掛けの作品になっていまして、例えば山を切り取ったような、夜の森林が再現されて切り取られている作品があったりとか、暗い部屋に入ると額縁みたいなものとか水槽みたいなものとか時計みたいなものとかあるんですけど、実はプロジェクターで映像が映っていまして、鏡の中にいる人が変わっていったり、水槽にいる金魚が突然いなくなったりとか、非常にトリッキーな作品もあります。部屋に入ると暗い部屋なのですが、どこか外国の夜中のドライブインが再現されていて、窓の外に高速道路のような風景がある。椅子とテーブルがあり、座ってくつろげるんですけど、そこにラジオが流れていまして、アメリカかどこかのドライブインに夜中に入ったらこんな感じかなというのが体験できます。中を通して歩いていくと思わず未来的な空間に繋がってそうな体験できるところもあります。狭い部屋に真っ白いテーブルと椅子が置いてあり、天井から変なものがぶら下がっているなあと思ってよく見ると天井に穴が開いているところもあります。この天井の穴は、なんだろうなと思い近づくと、「テーブルに上るときは靴をお脱ぎください」とかの表示があるんです。椅子とテーブルを使って天井の穴から天井裏を覗ける仕組みになっていまして、天井裏を覗くと…乞うご期待という(笑) ぜひ行って体験してみてください。ネタバラシをちょっと今やめました(笑)

この巨大なシャンデリアみたいな作品は、韓国のスウ・ドーホーという作家の作品ですが、一個一個がよく見るとちっちゃい人形が連なって出来ていまして、10万個の人形が連なっているとか。圧巻です。他にも美術館の隙間にはいろんな小さな作品や、大きい作品や仕掛けられています。建築的な特徴でもあるんですけど、屋内作品でも外からも多くが見えるようになっていまして、まちの景観の一部になっています。日暮れの時間と共に建物全体のライトアップが始まり、夜になると本当に美しいです。四角い建物の一面ごとに色がじわーっと変化していくような設計がされていて、刻々と変化する色のコンポジションが楽しめます。日暮れから夜の9時くらいまでなんですけど、光のモニュメントとして美術館がまちの中心部にできているというようなかたちです。

3年前から美術館の向かい側、にもいろんな作家の作品が配置され公園として整備されました。それは無料でどなたでも入れます。ファットハウス・ファットカートという太った家と太った車もあります。家の中に入ると家がしゃべっている映像が流れています。何で私はこんなに太っているんだろう、太っていることがアートなの？家がアート？みたいな、何かぶつぶつ語っているんです。見て外に出てあらためてその家を観ると、妙にちゃんと顔に見えてくる（笑）。日本を代表する草間彌生の作品もあります。これも非常に人気です。

ムーミンに出てくるニョロニョロでもなく、オバQでもないんですけど、でかいお化けみたいな作品もあります。その向かい側にあるホワイトキューブ、お化けの兄弟のような作品も上に乗っかっているんですけど、これは実は屋外トイレです。それ以外にもでかい枕のようなベンチだとか、タイルでできた椅子だとか、ミラーのような椅子だとか、まちなかにアートが点在しています。この昼間は非常に地味な単なる岩のような作品ですが、夜になるとすごい光のビームが、空に向かってぶわーっと伸びるという作品です。

そもそも何でこういうものができたのかというと、ここは十和田市の真ん中にある官庁街通りという通りですけれども、ずいぶん以前にここに軍馬補充部という馬を育てる場所がありまして、馬を売り買いする拠点として十和田市は成長していったらしいのですが、ここが立派な桜並木、松並木として整備され、日本の道百選に選ばれ、ここを観光資源にしたいということのなかで動き出したわけです。ところがやはりどの町もありますように、昔の繁栄というのはどんどんなくなってしましまして、春は桜もきれいで素晴らしいんですけど、人が来ない。もったいない、もっといろんな人に来てほしいということで初期のころは馬の彫刻を置いてみたり、なぜだかカエルの彫刻を置いてみたり、彫刻を置いていった時代もあります。地域には華やかな祭りがあり、その時は賑わうのですが…中心市街地の空洞化です。行政関係の建物のたくさんあったのですが、整理されるとそこが空き地になってゆきます。どんどんさびれていくというか、非常にさびしい風景になっていく。官庁街の入口の中心市街地のアーケード街も周辺に大型商業施設ができることによって、シャッター街になってゆき、若者や家族連れの用事もなくなり



中心市街地に人が回遊することがなくなってゆく。その中でアートにどういう役割が果たせるのか！　ということが課題だったわけです。

そこで、十和田市は2003年くらいからアートを使ってまちづくりって何ができるのかということについてアンケート調査をはじめます。アートワークショップを開催して、アンケート調査を始めたんです。そのときに一番最初に導入されたアーティストが実は僕で（笑）藤浩志だったんですけど、そのとき僕は子どもたちがいないおもちゃを持ってきて、かえっこという物々交換のお店屋さんごっこをおこなうプログラムをやり始めていて、これを十和田にもってきて実施しました。おもちゃに魅かれて子ども連れの家族が集まりますからそこでアンケートをするという流れです。その後いろんなアーティストが来まして、どういう場が市民にとって必要かという対話の場を作っていくわけです。なぜだか参加者全員でパンを被ってパフォーマンスしながらまちを歩いてみたり（笑）。ゴミ袋で作った巨人（？）をお祭りに出品してみたり、光の作家が来てデコレーションしてみたり、アーティストがいろいろ関わって、まちを使って遊んでみたり、中心市街地にふさわしいアートセンターというのはどういうものかということを考えるプロセスを楽しんでいます。工事中の壁にもアーティストと一緒に絵を描いてみたり。で、美術館としてオープンしたわけです。建物としては、大小のホワイトキューブが何個もあるんですが、企画展示室といういわゆる新しい作品展ができる部屋は大きい部屋1つ、小さい部屋2つしかありません。9割が常設の作品で1割だけが新しい展覧会が展開できる部屋ということになります。それだけではなかなか面白さを作り出すのは難しいので、企画展示室で作家を招待して展覧会をやる場合、美術館の中だけで展示するのではなくて美術館の隙間だとかまちの中でも同時に積極的に展示してもらっています。何らかの関連プロジェクトをまちの中でもやり、まちの回遊性を作っていこうと。美術館の入り口にある象徴的な花柄の巨大な馬の作品を作った韓国の作家のチェ・ジョンファの企画展では美術館の中に市民から集めた作品が飾られて、逆にまちの中には作家の作品が展示されています。まちなかに松本茶舗さんというお茶道具の店、陶器とか売っているお店があるのですが、その入り口にはプラスチックハンガーでつくられたオブジェが飾られていますね。



このお店の棚には模造品の白菜みたいなものが棚一杯に飾られていますね。種屋さんには植木鉢を積み上げて作品化して飾っています。プラスチックの籠をかぶってパフォーマンスやってみたり。

それとボランティアがまちなかツアーを企画して開催しています。

もちろん美術館の中ではレクチャーや展示やイベント等も行っています。柴川敏之さんというお相撲ネタの作家が来た時は、まちなかのいろんなものにまわしをつけていくということをやっていました。それでフラワー・ホースにもまわしをつけて、駒の花とかいう名前をつけてますね。

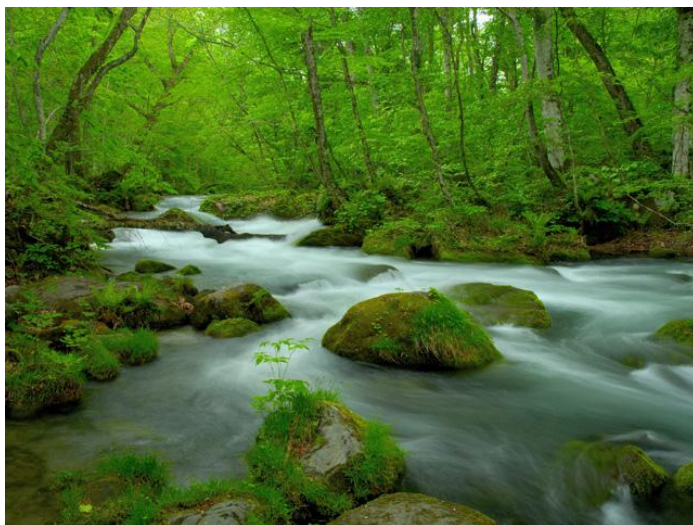
十和田市現代美術館の場合、高校生まで無料で入れるので、頻繁に小学生が遊びに来ています。学校の見学も多いです。まちの中にいろんな仕掛けをしたまちでの展覧会もありました。さっきのシャッター街ですけども、ほんとにシャッターを開けて中で何か展示をしたいんですけども、なかなか管理とか難しいということで、せめて覗いてみると何か面白いものが見えるというのはどうだということで企画したそうです。こうやって覗くと昔の道具が置かれていたり、それぞれのお店の中で何か特徴的なものを展示してみたり、昔の写真とかをちょっと立体的にして置いてみたりとか。覗いてくださーいという絵があるんですけど、シャッターを覗くと懐かしいものが見えるという展示です。

草間彌生さんの企画展のときはこうやってまち全体が赤いドットになりま

した。このときはほんとにたくさんのお店に協力してもらいまして、まち全体が赤いドットになったそうです。気持ち悪いといえば気持ち悪いけど（笑）。すごいといえばすごい感じの風景ですね。草間彌生という人は非常に特徴的な髪型をしているということで、みんなでそのカツラをかぶって、草間ナイトということで盆踊りをやってみたり…。何か楽しむということですね。コンサートをやってみたり、馬を連れてきてみたり、上映会やってみたり、お茶会やってみたり、いろんなプログラムを受け入れています。最近、美術館で結婚式をするという要望が出てきて、やってみたのですが、それが評判良くて結婚式やりたい人がいっぱい出てきて、困っちゃって（笑）。美術館なのに結婚式場みたいなパンフレットを観光協会が作ってしまったたりして、作家からクレームが来たりして（笑）。まあちょっといろいろ難しい面もあります。

これは栗林隆という作家の作で、写真で見ると風景画のように見えますが、実際には展示室全体に土で山を作っていて、そこに10分ごとに霧が発生し、ある面まで霧が溜まると世界地図の地形が浮かび上がるというような作品です。美術館の中ではそのような展示なんですけど…、さっきの松本茶舗さんでは…。そう。実は十和田の中心市街というのは何回も大きな火災にあって、そうなんです。それである時期、昭和の初めに建てられた建物には、商品を火災から守る為に六畳か八畳くらいの地下室があるらしいんです。ところがもう30年くらい前からもう閉鎖していて、水浸しになっていてずっと使われていなかったのだとか。その水を抜いて掃除させていただいて、栗林展のときは地下室に日本列島の地形みたいなものを作ってそこに雪を入れて、日本列島が浮かび上がるというような作品を作っていました。さっきの松本茶舗さんのところというのは、常設になっていまして、次に紹介する新しい活動というのが始まっています。先ほども説明しましたが十和田市現代美術館はホワイトキューブが特徴的で、もともと白い箱がまちに広がっていくコンセプトだということなので、じゃあもっとまちにキューブを広げてみようかと。栗林さんも美術館の建築物そっくりの移動できるホワイトキューブを制作したのですが、なんとこのキューブ、マイナス20℃の冷凍庫になっていまして、氷の作品を展示するために作られた箱だと思ってください。この箱はここで展示された後、長崎まで出かけてゆきました。これは最近動き始めているプロジェクトなんですけれども、十和田市が抱えている問題に、

十和田湖畔や奥入瀬溪流周辺のホテルの廃業があるということで、そこを使ってどうにかできないかと、今写真に写っているのは美術館ではなくて、その奥入瀬にある奥入瀬溪流ホテルというホテルの中の一部なのですが。ホテルの中に美術館のキューブができてしまっています。先ほど話したように美術館にはもともと常設の作品はたくさんあり、観光客には人気があるのですが、若い人たちや市民の人たちが発表していく場は少ないので、どんどん新しい場所を作ろうと…。　こうやって奥入瀬溪流ホテルの中にもホワイトキューブができたわけです。　アーツキューブプロジェクト（A r t s C u b e プロジェクト）というのを始め、表現の場所を増やしてゆこうとしています。これも30年くらい前にできた溪流館という、もともと奥入瀬溪流を案内するために作った小規模の博物館みたいなところなんですけれども、ここもだんだん老朽化し機械が壊れたりしたところに展示室としてのキューブをもう一個、ぽんと作ってみました。そこでいろんな作家が展示を始めようと。同じ施設内に20年前にできたジオラマがあるんですけど、その中に映像の作家の作品をそのまま組み込んで展示してみたり、溪流館のなかのカフェコーナーで新しいプロジェクトとして空間を作ってみたり、まちのツアーだけではなく、奥入瀬の奥にブナ林があるんですけども、今年はたくさん新しい芽が出てきているということで、ブナ林に見に行くツアーを山本修路という作家が企画したりしています。このように来年から本格的に始まる予定の「Arts Towada 奥入瀬プロジェクト」という活動へのデモンストレーションを始めております。



奥入瀬溪流



これは僕の以前からの手法の一つなのですが、若い作家とかコーディネーター、キュレーター、これから何か企画したい人、表現したい人を集めて、十和田奥入瀬で何ができるのか、合宿形式のディスカッションしましょう…と呼びかけています。それが今年の11月の16、17、18日に開催されます。ここからどんな活動が広がるのか、こうご期待ということで…僕のほうからのプレゼンテーションは終わりたいと思います。ありがとうございました。

藤 何か僕のプレゼンテーションみたいになってしまいましたね（笑）

北原 ありがとうございました。僕は実は十和田市現代美術館の建築のコンペのほうの審査委員長をやらせていただきまして、僕の専門は建築計画ではなくて、まちづくりなものですから、何でもまちづくりの人間が美術館のコンペの委員長になったのかというところが実は大きな味噌になっていまして。この美術館は単体として格好いい美術館を作ろうとかそういう問題とは違って、アートをきっかけしてどうやって市民が元気になっていくか、それが一番のコンセプトでした。

一番最初、十和田は、街に広がるプロジェクトとして、相撲を一つのプロジェクトにしたとき、それを商店街に協力してくれって言ったときに確か100近くある商店のなかで、いいよって言ったのが20に満たなかったんですよ。2回目にさっき白菜のスライドがありましたけど、あの白菜の（展示をしたお店の）人も最初はすごく気に入らなかったらしくて、チェ・ジョンファさんが白菜のオブジェ作らせてくれって言ったら、何だ、うちは米屋だと。何で米屋に白菜を置かなければいけないんだと最初断られたらしいんですけども、そのときにチェ・ジョンファが言ったのが、私たち韓国人にとって命の次に大切なものは白菜であると。キムチですね。日本人にとってそれは何だと言ったら、米に決まっている！と話になって、それから打ち解けたっていう話があります。そういうことでだんだん商店街の人たちが協力し始めて、そしてとうとう（草間さんの）水玉のときには100ある店舗のうち70以上が入ったと。入らなかったのはマックとか、ソフトバンクとかいわゆるチェーン店ですよ。僕、3年見ていて、まさにアートがきっかけになって、松本茶舗さん

みたいな方は最初からどうぞどうぞの人でしたけど、裾野が広がっているというのは最近特に思うんですよ。

藤さん、（副館長になって）まだ1年経っていないけど、アート、特に現代アートっていうと一般の人からいうと手が届かないとかいうふうに見えちゃうんだけど、十和田で美術館を中心にしながら、少しずついろんな小さな活動が生まれている。これは面白くなるだろうなと期待があるんですよね。どうでしょう、半年経ってみて。

藤 現代美術をどうだっていう形でいくと面白くないと思うんですよ。なかなか広がらないなっていうのもあると思うんですけども、ただほんとに面白い活動や、魅力的なもの、ありえないものがそこにぽんとあるとか、面白い仕掛けっていうのがそこから派生するものとして出てくると面白いんじゃないかな。今ちょうどサイトで見せているんですけども、奈良美智展というのが始まったんですが、その1つの仕掛けとして美術館が美術部を作ろうという活動をしていて、これは僕の個人的な活動の延長でもあるんですが、今いろんなところで地域活動が部活動化しているというふうに思っていて、いろんな部活動が出ているんじゃないかなと。それは面白いんですが、部室がないなということに気づいたんですよ。で、いろんなところで空いているスペースを使ってどんどん部室が増えていけばいいっていうことで、今新潟でも実験していたり、長野県茅野市、北九州市の小倉、あと前橋ですね。「部活動」活動をいうのを実験的にやっているんですけども、十和田市現代美術館の中でも、奈良美智部長の美術部を作ろうということで、それで今ちょうど公募したんですよ。これは期間限定なんですけども、何日間か美術館のなかに美術部が出来まして、奈良さんが部長ですから、募集したら、全国各地から130人以上応募があって書類選考が大変で。わずか5人くらいの部員なんですけれども。その部室で一緒に作りながら、結果的に町なかの店舗とかに協力していただいて、美術部の展覧会をやろうと。それは現代アートだからどうだということではなくて、何かそれだったら面白いかなということで広がっていくという形でしょうかね。

奈良美智

青い森の ちいさな ちいさな おうち

Yoshitomo Nara: The Little Little House in The Blue Woods

100



2012年9月22日(土・祝)～2013年1月14日(日・祝) 十和田市現代美術館

本展は、奈良美智の代表作を多く展示する。また、十和田市現代美術館の企画展として、奈良美智の作品を展示する。本展は、奈良美智の代表作を多く展示する。また、十和田市現代美術館の企画展として、奈良美智の作品を展示する。本展は、奈良美智の代表作を多く展示する。また、十和田市現代美術館の企画展として、奈良美智の作品を展示する。

## 十和田市現代美術館・奈良美智展

北原　そうですね。美術館ができたとき、あるワークショップを頼まれて行きました。実は最初できたときにあれに対して、またハコモノかと言って市民の中で新聞に投書する人がいたんですね。でもせっかく作ったから何とか使おうというワークショップで講演頼まれたときに、市役所から最初に来た電話が、反対派の人が申し込んでいるのですがどうしますかって電話で、今からだったら満員だって断れますよって言われて（笑）。そんなことやったら、あとが大変ですよと言って、その人どうぞって言ったんです。で、僕は最初の講演、パワーポイントをちょっと変えまして、「弘前市民の僕にとってはほんとにうらやましい場所ができました。でも一部にはなぜこんなものを作ったんだという人がいます、みんながみんな喜んでいるわけではありません」と言ったら、会場の方二人くらいが、そうだって言ったんですよ。ああ、あの人だなと思いながら、そのまま進めていって、そのあと、「でもね、作ってしまっただけからこれを使い切らないともったいないじゃないですか」という話をして、で、そのあと「使い方方のワークショップをしましょう」と言ったら、その二人がきたんですね、僕のところに。あ、来たなと思って、そしたら、「あなたみたいに言われちゃうと反対できないんだよな」って言われて、実はそのあとその人、一年以上ワークショップ皆勤賞でして、そして自らグ

ループを代表して発表するようになって、一番面白かったのが、「俺たちこういう企画を考えている」、「なんだ?」、「サンバカーニバルだ」っていうんですね。サンバカーニバルっていうのは（十和田が）馬の産地なので、産馬と思ったら、ほんとにリオのカーニバルの女の人呼んできて踊るって。「現代アートってこんなもんだろ」ってよくわからないこと言われたんですけど、つまり「何が出てくるかわからない楽しさがあるんだろ」って言うので、そのとおりですと言ったんですけど、そういうノリで別に反対賛成関係なく、いろいろな人たちの広がりが見えているのが現代アートが入ってきた良さなのかなというふうに思っていましたけど、そういう意味で言うと、十和田の場合は、ほんとに歴史の、新渡戸三代からのしっかりとし街づくりのなかに新しいことをちょっとずらして見るみたいな、ますますこれから目が離せないみたいな感じで見ておりました。

藤 実を言うと、どっちかっていうとある種の疑問があって十和田の美術館に来たようなところがありまして、つまり（十和田市現代美術館は）完成されたものが置かれているところなので。僕自身の興味というのは、何かを作ることの興味であったりとか、これから何かが作られていく状態にいろんな人たちが興味を持ってくるんじゃないかなと。作られていく、動いている状態にはいろんな人たち、何かを作りたい人たちが集まってくる。完成されたところには完成されたものを鑑賞しに集まってくるんですけども、果たしてそれがクリエイティブなものなのかどうかというのが非常に疑問であると。十和田市現代美術館の場合、予想以上の集客がありまして、年間17万人くらいお客様がこられる。そういう意味で今までぜんぜん人通りがなかったところに人通りができていったので、その分お店であるとか町の中の飲食店であるとか、多少はできてきたわけですけども、本来もうちょっとそこにクリエイティビティというか何かを作っていく態度みたいなものがもっと美術館としてもできなきゃいけないんじゃないかなとも思いますし、美術館というよりアートセンターということで言うと、何かがそこから始まっていくという仕組み、システムを本来、町が持っていないといけなくて、その一つの拠点としてアートセンターがあるんじゃないかと。それはただ単に美術館に作



品があるから観に来てくださいというのではなくて、何かいろんなクリエイティブな活動をそこから作っていく。それがないとアートセンターとしては非常に不十分で、そういうシステム自体をどうやったら構築できるのかなと。ただデモンストレーション性っていうことを僕はいろんなところで考えていまして、拠点が必要である、システムが必要である、ある種の仕組みが要る。ただやっぱりそこで、「すげーっ」、「なんじゃこりゃあ、すげー」と思うような、心が動くような感動を伴うデモンストレーション性というのが必要だなと僕は感じています。それからすると4メートルのおばちゃんは（笑）、やっぱり「えーっ！」というのがあるわけです。それがやっぱり象徴的になって、それを見に来るといふ人もいますし、一つの吸引力になっているのも確かで、そういういろんなシステムのことを考えたときに非常に注目しているのはレイヤーという考え方で、いろんなレイヤーがあるんだというのは当然ですよ。住んでいる人のレイヤー、観光客のレイヤー、何かを作りたい人のレイヤー、いろんなレイヤーがあってそれをどういうふうにつないでいくのかというのがたぶんあると思うんですよね。そのへんがたぶん町のなかでの今後の展開を考えたとき、現代美術館だからと現代美術にこだわっていたらダメだと僕は思うんですよ、面白くもなんともない。ただいろんなレイヤーの中で、現代美術館というのは一つの象徴、ツールとしてはあって、けど、ぜんぜん違うところでの浸透のあるいろんな活動、いろんなムーブメントというのが発生していかなきゃいけない。それをどうつないでいくのかというのが一つの課題かなと。

北原 おっしゃるとおり。だからあの後、裂織のグループができたりとか、古い伝統的なものとか、全部同じような形で動いていますよね。僕は商店街の人に、こういうシステム、仕組みができているのにもし皆さんが何もしなければ、あのロン・ミュエクが作った4メートルの巨像というか巨人の女性が大魔神のように荒れ狂って街に出てくるぞって言ったんですけど（笑）。それくらい出てきそうな雰囲気があって。そういう感じで街がちゃんと対応できるのかというあたりを少し言ったりしました。ありがとうございました。

十和田の話はいったんここで置まして、今度は地元角館の話として安藤さ

んのほうから、今展開されている活動ですとか想いを伝えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

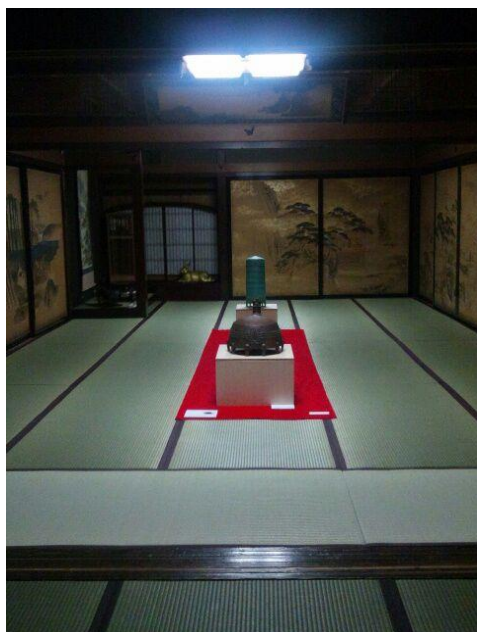
安藤 安藤と申します。今ご紹介ありましたが、昨日から「ネオ・クラシック！カクノダテ」ということで、皆さんのお手元にも入っているかと思いますが、こういうアートイベントを開催しております。サブタイトルとして、「創造の最先端とかかわらずそこにあるもの」という非常に私たちの思いを反映しているサブタイトルがついております。そもそもの「ネオ・クラシック！カクノダテ」をやるにあたっては、今日ここにもお見えですが、佐藤励くんという彫刻家をはじめ若いアーティストの方々が、想nicアートということで2008年、2009年と角館の外町（とまち）、いわゆる武家町ではない商人町のほうで、活動を展開されました。非常に衝撃的で、創造性あふれる展示会だったので、今後とも継続してほしいなと思ったんですけども、そのやっていく中でやはり若い芸術家たち自身がアーティストであって、それからディレクターをやってプロデュースをやってということで、非常に大変な負担があって、2年間で残念ながらやめてしまったという経過があったわけです。そ



「ネオ・クラシック！カクノダテ」展示

ういう中で一昨年からこの創造都市モデル事業が仙北市で行われまして、会長が市長なんですけれども、我々に事業の中身をまかせてくれるという形で、

モデル事業を行ってきたわけですが、その中で、若いアーティストがクリエイティブなことをやれる能力があるんだから、大変であったプロデュースとかコーディネートとかそういうものを我々がお手伝いすることによって作家が作家活動に集中しながら、なおかつ当初の想nic アートの理念を生かしながら、角館の外町でそういうアートイベントを展開できないかということを検討して始めたのがこの「ネオ・クラシック！カクノダテ」であります。このネオ・クラシックをやる背景として、3つぐらいのことがあると思うんです。1つは角館の佐竹北家という今の（秋田県）知事のご先祖でありますけど、佐竹北家の初代が京都の公家の出身ということもあって非常に文化政策を重視したという歴史があります。この文化政策を重視したというのは武士だけではなくて、町人、農村部にいたるまで、北浦、ほぼ今の仙北市にあたる地域ですけども、そこが連綿と文化に対して非常に馴染みがあったというか、重きを置いていたということが背景にあると思います。ご承知のとおり平福百穂や、さらにさかのぼると小田野直武といったような文人画人が多く出ておりますし、さらには明治の文学界には非常に多くの方々、例えば新潮社の初代社長であった佐藤義亮さんとかいろんな方が出ているということからもわかるとおり、非常に文化的な素地があったということ。それからもう1つ大事なことは、文化的な素地があったと同時に新しいものに取り組むということですね。そのことに対してあまり抵抗がなかったということが



「ネオ・クラシック！カクノダテ」展示

あろうかと思います。私事になりますが、うちにもレンガ造りの蔵座敷があって、レンガ造りの蔵座敷としては東北で一番古いんですけども、明治24年の完工なんですけど、東北の片田舎の町で、レンガが入ってきて間もないときによくこんなレンガ造りの蔵座敷を作ったものだというふうに思います。そのときは一種異様な建物ができたと思われたと思うんですが、そういった新しいものに取り組む、進取の気風が角館にはありますね。「ネオ・クラシック！カクノダテ」も、国民文化祭に向けてより充実していければいいのではないかなというふうに思っております。以上です。



安藤家の蔵

北原 はい。ありがとうございました。今まさに動いているところで、今日は貴重な時間のなか来ていただいてお話いただきましたが、来週の日曜日までやってらっしゃいますよね。こういう取り組みをずっと続けていくという話と再来年ですか、国民文化祭の話がありました。このあたりで、門脇市長さんのほうから、今日突如パネリストを依頼されたという話もございますが（笑）。先ほどすごく印象的なスピーチもしていただきましたけど、国民文化祭の話

も含めて、これからの創造農村への話を少しいただきたいと思います。よろしくお願いします。

門脇市長        はい。門脇光浩ですけども、市長という立場でここに座っているのはえらいすわり心地が悪いですね。そうではなくて、アーティストとしてお話をしたいと思っておりますけど（笑）。（会場笑い）

というのはさっき、藤さんから話を聞いたときに思い出したことは自分たちずっと昔から、地域づくり団体で活動していたんですよ。その活動っていうのは、今の皆さんの概念だとするとアーティストっていう考え方でいいのかなと思ったんですが。田沢湖畔に辰子像という、舟越（保武）先生の彫刻を



田沢湖「辰子像」

ブロンズ像化した辰子像というのがあるんですよ、きれいな金に光る像なんですけど、その像と同じ像を作ろうという話を若い方々と一緒にして、実際作ったんですよ。マネキンを関節ごとにぶつ切りにして（笑）、中に太い針金をいれて、あのポーズをきちんと作って、それから石膏で全部固めて金のスプレーで塗るという。ほぼ完璧な状況なんですよ。大きさも同じくらいで。その像を僕らは軽トラックに積んで、夜中に農道の真ん中においてくるんですよ。で、朝に学校に通う子供たちが、「あ、ここに辰子像がある！」とびっくりする。それを家に帰ってお父さんお母さんに話す。「あの道に辰子像がいた



んだよ」って。するとお母さんが「じゃあ田沢湖の辰子像はきっと今いないんだよ」って話になるわけですよ。で、その次の日、また夜中に軽トラックに積んで、また別の国道の横に移すわけですよ。そうすると辰子が動いて歩くという状況ができる。一週間くらいやったんですよ。もちろん製作も僕らがやったし、夜の移動も僕らでやったんですけども、ある日、警察から電話が入ったんですよ。これは当時僕も知らなかったんですが、道路占用という許可があってですね、国道の横に何か工作物を置くときにはちゃんと許可証の申請をなさいよという約束事があるんですけども、僕らそんなこと知らないで、ただ、ぽんと国道の横においてきたんです。で、僕のところに電話がくるわけですよ。ところが僕がおかしいぞと思ったのはですね、何で僕に電話が来るんだろうと。つまり誰も知らないところで僕らは作って、誰も知らない夜中に置いてくるということを1週間くらいやるわけですから、僕のところに電話くるはずがない。ところが、あとでわかったことは、当時暴走族ってのが結構いまして、暴走族が国道でスピードを競うっていうレースをやっていて、その場面に僕ら何回かすれ違っているんですよ。で、警察がその暴走族を捕まえて、おまえらそんな危ないことをしちゃいけないという話をしたら、いや僕らよりも何か厄介なことをやっている連中がいたと。どうも軽トラックの荷台に人間を乗せて走っていたという話があって、その軽トラックのナンバーで僕だとわかったということなんですけれども（笑）。これ何が楽しかったとかというと、要するに地域の方々がびっくりするというのが楽しかったんですよ。びっくりしたりびっくりさせられたりするのが楽しかったんですよ。僕らの地域活動というのは大体そんなことが多くて、さっき内陸縦貫鉄道のお話しがあったんですけども、内陸縦貫鉄道の



秋田内陸縦貫鉄道

無人駅で、プラットホームを使ってモダンバレエを行う。駅に入ってくる車

両の中から、きれいなバレリーナが5人出てくるんですよ。で、踊って、行き違いになる電車で何事もなかったように乗っていく。そういうことがあったり、炭焼き小屋の炭焼きの窯を使って陶芸をやってみたり、そういう今までなかったことをやってみることに楽しさを感じていた。さっきお話のあったとおり、デモンストレーションというか、町には意外性というものがとても必要で、びっくりしたり、びっくりさせられたりと。できないと思っていたことがほんとはできるんだという楽しみだったり、できると思っていたことができなかったというようなことだったりということが日常的に行われることに、とても楽しさを感じる、というようなことがいっぱいあったらいいと思うんですよ。さっき、すごく座り心地が悪いなと言ったのはどういうことかという、市長としてだと、できないと思われていたことができるとても評価されるんですけど、できると思われていたことができないというのは評価されないの（笑）。

でもこんな活動が始まったきっかけというのは横浜の野毛の大道芸フェスティバルに何人かで遊びに行ったときに、今は大道芸フェスティバルは年に何回か行われるようになっていると思いますが、当時はまだ年に1回だったんですね。その野毛の大道芸フェスティバルに行ったときに、昨日までは普通の商店街だったところにたくさんのジャグラーの方々が自分の技を披露している異空間がとても楽しかった。さっき安藤さんがお話したようにネオ・クラシックカクノダテもこういう空間なのに何でこうなるの？という楽しみがほんとにあると僕は思って、もちろんそれはプロデュースの方も素晴らしいですし、作家の方も素晴らしいですけども、そういう意外性みたいなものが日常的にあるというところにとっても惹かれるのかなというふうに思います。・・・という具合のお話で終わってしまっていていいでしょうか（笑）

北原 意外性があってよかったんじゃないでしょうか（笑）ありがとうございました。このあたりで（佐々木）先生のほうからコメントをお願いします。

佐々木 いや、十分騒々しいですね（笑）。先ほどの藤さんのお話で、展示というか、

プレゼンテーションというかデモンストレーションというか。これについて僕の大先輩ですけれども、梅棹忠夫という、国立民族博物館という非常にけったいなものを作った学者がいて、残念ながら亡くなってしまったんですけども、彼は博物館は情報産業であり、展示というのはコミュニケーションメディアであると言うんだよね。その意味は、普通、情報産業というと放送ですね、放送局とか。あるいは新聞のようなマスメディア。でもこれはメディアのコンテンツはほとんどきちっと整理されていなくて、発信だけなんです。実は今の時代はコンテンツが大事なんです。コンテンツがきちっと整理されて、専門家だけではなくて、市民にも使える。コンテンツを上手に引き出したときに何か新しい組み合わせがあって、それが新発見につながったり、産業化していくという、そういうような広がりのあるメディアが、プレゼンであり展示だというふうに言っているんですね。だから（博物館は）情報産業だと。つまり博物館や美術館は、私から言うと、コンテンツがきちっと整理されていて、それらがこれまでと違う意外性のあるものと結びついていて、何か新しいことやモノや産業を興していくという場所だと考えるととっても本質的な機能ですね。それぐらいの広がりを持って美術館を考えたらもっと面白くなる。金沢 21 世紀美術館（館長）の秋元（雄史）さんとよく話をしていて、彼は最初金沢に来たとき、伝統工芸って大嫌いで、もう自分にはわからない世界だというわけですね。で、自分は現代アートの世界なら分かる。ところが、地元の経済人や伝統工芸の人たちは何とかして秋元さんを自分の味方にしたいわけです。それで、いろんな場所に引っ張り出して、結局は先ほど言ったようにアートプラットホームという美術館が外に、町に出て行った。出て行って、最初は空き家だけど、工芸作家のアトリエだとかショップだとかになったときに、彼はそこで何か言わなくちゃいけないとか、いろいろな現代アーティストを連れて行ってコラボレーションするとか、というなかで、今年、彼がやった企画展が「工芸未来派」ということだったんです。地元の経済界の人たちは、先ほど出た奄美大島の大島紬が衰退したのと同じように、やっぱりバブルの時代に良い目を見ていて、それからどんどん衰退していますから、何とか工芸を再生したい。そこで、生活工芸という概念を出して、経済界は生活工芸で、毎年のようなメッセをやる。工芸作家はクラフトのトリエンナーレをやる。美術館は工芸未来派というかた

ちで、いくつかの波を起こしてくるんですね。だから創造都市あるいは創造農村の広がりというのはアートが切り口になっていって、そのアートが新しい違う領域に侵略していくとか、越境していくとか、そのプロセスを仕掛けていく、そういう段階を仙北も十和田も迎えている。じゃあそのときにどういうプレーヤーなり担い手があればいいか。一つは、金沢の場合は、金沢 21 世紀美術館というものと、金沢市立美術工芸大学というのがあって、そこはやっぱりけっこう核になるんですね。今度、秋田の美術工芸短大が 4 年制大学になって、そこが核になるのかなと思うのですが、大学と地域の



秋田公立美術工芸短期大学・大学開放センター

#### 同大学は「ネオ・クラシック！カクノダテ」と事業提携

アート拠点、あるいはその次には農業だとか、そういったところにも展開していく。北川フラムさんのように、過疎の農村で、廃校や空き家でアートプロジェクトをする。それはそれで素晴らしい作品が生まれるけれども、その次にじゃあ農業自体も創造産業になるか、というような仕掛けですね。このあたりを考えたらもっと仰天するんじゃないですかね、日本中が。門脇市長の辰子姫の騒ぎどころじゃなくて（笑）。そんな感想を持ちました。

北原      ありがとうございました。最後におっしゃった創造産業として農業や地域の工芸が進んでいくという一つのきっかけだったり、トリガー（引き金・要因）みたいなかたちでアートとの出会いから思ってもみないようなことにつながっていくという意外性というか、それがクリエイティビティの一つの要

素かなと。創造性ということの中に出てくる、越境、越えいていくというお話を佐々木先生おっしゃいましたけど、古くて変わらないような伝統的な趣きみたいなものを大切にしてきた町が、違う方向ではないけれど、そこから次の世界、ステップに飛びぬけていくみたいな、今ちょうどそういうときにあるのかなという気がしますし、それが2年後の国民文化祭にも出ていくとすごく楽しくなりそうだなという気がしました。最初にありましたように関西でのお仕事の関係上、佐々木先生には講演していただき、コメンテーターをしていただきましたが、そろそろお出にならなければいけない時間ですので、今日は（夕方）5時半までの長丁場、こんなシンポジウム見たことないですが（笑）、パネルディスカッションだけで3時間というのは、なかなかすごいと思うんですけど、ちょっとここで休憩をいたしまして、第三部といたしますか、ちょっと僕もプレゼンテーションしようと思っていましたので、お話をさせていただきたいと思います。ではいったん休憩しますので、今日はなにしろ赤坂先生が来られないということで佐々木先生に特別講演していただきまして、最後コメントもいただきました。佐々木先生への拍手で第二部を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

司会 はい、ありがとうございました。ではいったんここで休憩とさせていただきます。引き続きシンポジウム後半は4時10分から、再開させていただきます。4時10分までにこちらのお席にお戻りください。

---休憩---

司会 まもなく再開いたしますので、お席についてお待ちください。

北原 それでは、始めさせていただきたいと思います。今日はとにかくいろいろ急な変更等出ていますが、とても楽しい会ですし、やはりここまで来ていただいた方に何かお土産をもって帰っていただきたいということで、そもそも



3. 11 後という形で赤坂先生がお話されるはずだったことと、今の創造都市・創造農村とつなげる話として、プレゼンを10分から15分くらい、前の画面でさせていただきたいと思います。僕が前に使った資料を編集し直しましたので、これを見ていただきたいと思います。実は去年、「震災復興と文化芸術によるまちづくり」というシンポジウムに呼ばれて、北東北の町育ての実践とアートと復興をどう絡ませるかという話があって、今日のタイトルにやや近いものがあるので、少しそこからお話させていただきたいと思います。

実は去年の3. 11の後なんですけれども、3. 13の夜、私の教え子からこんなメールが来ました。その教え子は本当は僕の目の前に今座っていたんですけど、大事なときにいなくなってしまったので、あ、今戻ってきたようですが、あの人です、まるでわかったかのように（笑）、紹介されるタイミングで来ましたが、地域創造という地域の文化芸術をどう支援していくかという組織に入った彼女から、忘れもしない3. 13の夜、夜の10時か11時くらいですけど、メールがきたんですね。今でも忘れませんが、「先生、私は混乱しています。こんな大変なときにこんな仕事を続けていてもいいのでしょうか」と。つまり東北がもうどうしようもなくなって大変になってしまったときに文化なんていうことを言っていていいんだろうかという非常に彼女らしいメールがきました。これはよくわからないけど、僕は即答しました。「こういうときだからあなたは必要なんですよ」と言ったら、よくわからなかったと思いますが、「そうですよね」ってメールが来たんですが（笑）。いや、そういうことなんです、今日一番言いたかったことは。僕は今、復興まちづくりの仕事をしています。石巻の復興で、明後日もまた行きます。もう2週間に1回ずつ行ってるんですけど、そういうことをしているときに、彼女のような仕事をしていることの重要さというのを僕はとても感じているわけですよ。さっきちょっと安藤さんがお話された、角館でやっていた想nicアート、僕の目の前に佐藤励さんがいますけれども、僕はこのときの「想いをかたちに」という言葉が好きでした。プロジェクトがあって、こういうマップも作られて、今やっているネオ・クラシックのように蔵を使うところもそうじゃないものも含めて、佐藤さんのようにいっぺんこの地域から離れて、美術の大学とかいろんなところに行った方が戻ってきて、自分たちの作品を展

示したり、それを街の人たちが応援していくという、それが仙北市の角館で4年前、5年前に僕が初めて見たもの。これに彼女も実行委員に入っていて、私も応援する形で来させていただいたわけです。そのときに僕は講義をさせられまして、授業をしたんです。「空間」を「場所」に変えるということで、地域の素材みたいなものをどうやって、もういっぺん自分たちで見えていくかという話と、もしかしたらアートみたいなことが起きると、街の人たちが「なんだ？」というふうにとちょっと変わるかもしれないね、もしかしたらそういう出来事が続いていくと、街に新しい予感を生むかもしれないねと。さっきびっくりする、びっくりさせられるという話を市長さんがされてましたけど、何か考えてもみないようなことが起きていく可能性があるねと。

こういう話をしたというのは、実は震災と何があるのかっていう話もあるわけです。僕はまちづくりという言葉ではなくて、「まち育て」という言葉を15,6年前に作りました。まちづくりという話よりは、我々は育てていくんだろうと。今日、一番初めに市長さんも一人一人が自分たちの地域から生まれた生業というものをちゃんと認めて育てていくことが大事だとおっしゃってまして、まさに僕も同じことをここにこう書いていました。生業を育てていく。残していくっていう保存ではなくて、次の世代に向かって少しずつ変えながらちゃんと育てていくっていう話。そういうものとして、歴史とか文化とかってあるんだと思います。ストックの社会と言って、今あるものをうまく使いなさい、マネジメントしなさい、作るのはもう終わったっていう話があるんですけども、そうじゃなくて、これをどうやって育てていくか。ところが3.11。そのストックが目の前から全くなくなってしまったんですね、目に見える形では。そこに新しい町を作るために我々が皆さんと議論しているときに、「ほんとになくなったんでしょうか、ストックは。あるいはほんとに生かさなきゃいけないストックがあったのに、生かしきれなかったという反省があったんじゃないか」という話をしています。僕の仲間たちは例えば被災地に行って一番最初にやったことは、小学校の校歌をそこのおじいちゃんおばあちゃんに聞くことでした。校歌の歌詞です。風景が全部変わってしまっても、我々の小学校、最近の小学校の校歌は「明るい未来と豊かな何とか」とか、「希望あふれる・・・」みたいに全部同じなんですけども、皆さんが小学校に通っていたときの校歌を思い出していただくと、結構

70代でも60代でも思い出せるんです、言葉を。地域の様々に大事なことが出てきているはずなんです。そういうのを聞きながら、それを見ていたんだね、この人たちは。その見ていた歴史みたいなものも残していけないかっていう話で、もし新しい住宅地を作るにしても見たいものがあるんだよねと、いうことを議論しようとしています。例えば、こういう話というのはよく言われていましたけど、これ、気仙沼の被災地で全部流されて鳥居だけ建っているときに、ああ神様が守ったんだねという話をよくされるんですけど、そうじゃないです。神様を我々の祖先は守ってきたわけで、つまりだんだんだんだん何か来ても倒れないところにこういうのを持っていくわけです。これは先人の知恵です。それを見ているうちに、ああ、そうかと思うことが出てくるっていうのが最初考えたことです。



これはあまりにも有名なところですが、大船渡の越喜来というところ。何が有名か。この線の上と下を見比べてみてください。これは明治と昭和の最初の震災、津波を受けて、そして下のほうはもう住む場所じゃないとみんな知っていました。知っ



てたんで、この上を見ていただくと、まったく被害ないです。なんでもないです。ところが誰かが大丈夫だろうと思ってくと、つられて来るわけです。一番辛いのは一番最初に大丈夫だろうと思ったのがこの真ん中に見えている役場なんですね。役場が移るとみんなを引っ張ってきます。小学校もできてしまいます。そんな形で、一番まずいはずのこの線の下にだんだんだんだん開発してきてしまいました。この線も見てください。ここから上は何てことはないです。たった1メートルの差でこんな違いがあります。残酷です。これがその下にあった学校です。僕はここでもし人が亡くなっていたら、今日ここで映しません。運良くここは、運良くじゃない、ちゃんと避難してここは誰も子供たちが亡くなっていないので今日あえて映します。ここは線は4階にあります。さっきの地面の線はこの上に飛び出たところにきます。ということはここは全部浸かっちゃうわけですよね。実際こうなっています。な

ぜ一人も亡くならなかったのか。あの線を知っていたおじいちゃんがいたわけですね、市議会議員の。市議会でいつもその話ばかりしていました。頼む、この建物は地震が起きたときに1階に下りてきて、校庭に並んで点呼していたらもう遅い。それから山のほうに逃げても小学1年生は無理だろう、4階から避難させろと。「そんなこと無理じゃないか」、「大丈夫、崖のほうに橋を渡せばいい」。市議会でまったく違う議題のときにもいつもそのことばかり言っている変わったおじさんという話だったんですけども、ほんとに良かったのは去年の地震が来る前に、とうとう彼が言ったことが実現されていたんです。それがこれです。たった4メートルの橋です。4階からこの崖のほうにくる、この橋を渡って降りるとその目の前にはこれがあるんです、ここに線があるんです。つまりここの線をひいたところには波はこないんです。で、この場所まで、さっきの場所から、小学生だって20秒もあれば行ける。これに全員が上ってきて避難したと。我々は昔の人たちの、先人の持っている、どんどん蓄積されてきた知恵とか、もちろん文化もですけど、あるときに違うものにただ変えてしまうのではなくて、生かすべきものと、そこから発展させていくものと両方できるはずなんだけど、軽く見ちゃうわけです。これはほんとに変わったおじさんがあそこまで言うんだからと作ったんです。そのおじいちゃんは残念ながら去年かな、病気で亡くなりました。でもその方のおかげで、ここの子供たちは救われました。一人も亡くなっていません。私たちは地域の文化というときに、一番最初に市長さんが生業から生まれてきたっていう文化と、もちろん現代アートのようにそうではない、ある種の刺激として生まれてくるもの、飛び込んでくるもの、そこから新しく創造していくものがあるかもしれませんけれど、こういったことにも1個1個に目を凝らしながら、住んでいく生活の文化みたいなものもすごく大事だという気がするわけです。



大船渡の大船渡線という電鉄があり

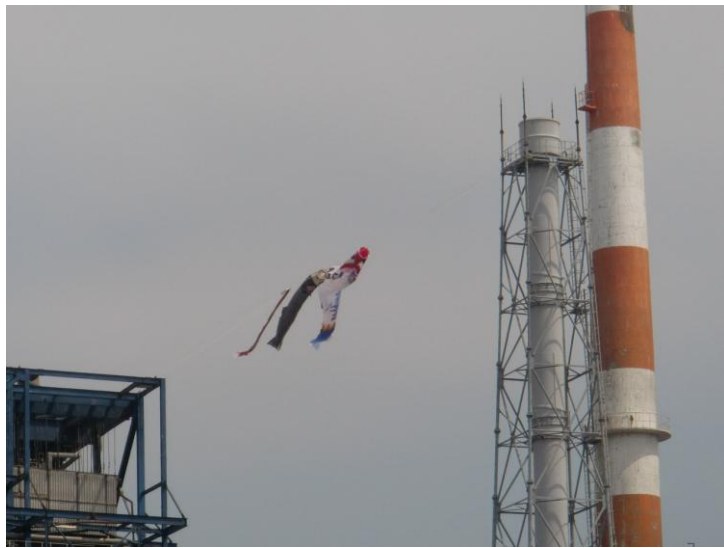


ます。ずたずたになっていますけれども、この町だけはまったく大丈夫です。あの上にあります。そういうふうにしてきたからです。駅が避難所になりました。大船渡市の中で、大船渡駅なんて台無しになりましたけど、この町は駅こそがみんなを守る場所だったんですね。こういうふうなことを見ていると、もしかしたら我々はそういうものを今までちょっと軽く見てきた。もっともっとこれから考えていかなきゃいけないことがあると思うんです。例えばこれ、去年の震災の直後、4月に陸前高田を歩きました。陸前高田の真ん中でこいのぼりが立っていました。4月20日ころ、ゴールデンウィークの前です。家を流されてもこいのぼりをあげる気持ちは流されません。地域の方々と話していると、これはどうしても上げたいというわけです。もちろんここで亡くなった方がいるかもしれませんが、子供たちも。でも子供たちを育てていきたいという気持ちは萎えません。だからその人たちと僕らは復興をやっている以上は負けません。彼らが一緒に頑張りたいというのであれば頑張ろうと。つまり育てたいわけですね、子供を。それと同じで我々は、根こそぎなくなっちゃったと言っているけれど、地域で育てていくものがきっとあるわけです。その意志として、僕は辛いけれど、この写真を撮ってみんなに見せています。同じようにこれはびっくりしたんですけど、石巻の製紙工場です。かなりやられました。でもこの製紙工場がありがたいのは被災して10日以内に市民に向けてメッセージを発します。我々はこの場所で操業を続けると。かなり大変なんですけど、続けると。言って何をしたかというとなんか彼らはここにこいのぼりを。最初僕撮ったときにどうやったんだろうと思って、そっちが気になって撮ったんですけども、すごく元気になるこいのぼりでした。こういうふうな我々が培ってきた日常の文化みたいなもの、そういったものってどういうふうに変わっていったって、槍がこようが鉄砲がこようが、というのがありますが、地震がこようがかわらないんですよね。そういうかわらないものと、どんどん上にレイヤーが重なって変わっていくものが組み合わされていく面白さというものが僕は創造だと思うんです。そういう意味でデザインボキャブラリーというのをいろいろ見ようという話をしたんですけど、そこでお話したかったのは、さっき奈良美智さんの話が十和田でもちょっと出てきましたが、もしかしたらアートを入れ込むことで人は変わるかもしれないということについて我々が実践したこと



をちょっとお話し  
ます。

奈良美智さんとい  
う人は弘前高校の  
卒業で、そんなこ



ともあって、弘前のレンガの倉庫で展覧会をやりたいという話があって、僕  
らはいわゆる実行委員会を作ってやりました。これがその倉庫です。そこに  
いろんな人たちが500名くらい集まって、一番右の背広のかたが奈良美智  
さんのお父様なんですけれども。その方々と一緒に実行委員会作りました。  
建築の人たちが中心になりながら、ペンキの塗り方からいろいろやりました。  
中の壁にペンキを塗らないと絵が置けませんので、そんなふうなことを毎週  
やっていました。面白いのは現代アートが好きでこのおじさんが来ているわ  
けではないということです。毎週土日に来ると、若い女の子と一緒に仕事が  
できて、そしてお弁当がもらえる（笑）。きっとそういう魂胆で来ていますか  
ら、僕がカメラを向けるとちゃんとカメラ目線になっているわけです。女性  
のほうは本気で仕事していますから。きっと家に帰ると、彼は奥さんに、今  
日もいい仕事してきたわーって言うんです。面白かったのはこのボランティ  
アに参加した人たちは、2ヵ月後の展覧会の無料という、こういうカードを  
もらえるんですけれども、いら  
ないって言いましたからね、こ  
の人たちは。私は見たいわけじ  
ゃないんだ、仕事がなくなるの  
が辛いんだって言われました。  
それがもしかしたらこういうも  
のに関わる地域の人たちの気持  
ちかもしれない。つまり毎週行



く場所ができたんです、この人は。で、こうやって作業しながら、倉庫は美  
術館に変身します。今は良くなりましたけど、当時はこの写真はもぐりの写真  
なので忘れていただきたいんですけれど。美術館の作品なんて写真撮っちゃ  
いけないんですけれど。奈良美智さんの許可を取らなければ。まあ実行委員  
のメンバーということもありますし、僕はいろいろボランティアでやってい

ましたけれども、たった1回巡ってきたチャンスですね。最後に鍵をかける  
っていう、忘れ物とか誰か潜んでいないか調べるという最後のチャンス、も  
うこの日しかないだろうって、撮りまくった写真をお見せします。こんな至  
近距離で撮れるわけがないので。この作品を見にバンバン人が来るわけです。  
だいたいこういったものに対して、一般の人はこれはいったい何なんだと僕  
に聞くわけです。我々のマニュアルで、「はい現代アートです」というしかな  
かったんですけど（笑）。で、いっぱい人が来たんです。古い倉庫を育てなが  
ら、こういうふうなことをやって6万人きました。横浜で8万人です。弘前  
で6万人、ありえません。弘前の真夏の奇跡なんて言われました。おかげで  
僕たち、絶対お金戻ってこないだろうと言っていたお金が戻ってくるころ  
か、お金が余りまして、そしてみんなで結局新しいNPO作んですが、気に  
しているのは、実はこの英語なんです。これは奈良美智さんの展覧会のキ  
ャッチコピーでした。「I don't mind if you forget me」っていう中学校の2  
年くらいまでに全部習う単語です。中学校の授業で教えるように後ろから訳  
せば、「もしあなたが私を忘れてもどんまいです」という意味です。これは作  
品が言っているわけです。さっき見たいろんな現代アートが見ていただいて  
帰っていくときに、「来ていただいてありがとうございました。あと忘れても  
らっても結構ですよ」というふうに言っている言葉なんですけど。ただ奈良  
美智さんいわく、これ反語でして、「まさかお前ら忘れるんじゃないだろう  
な」ということなんだそうですけど（笑）。僕はそんなことじゃなくて、こ  
のボランティアで2ヶ月間くらい、たまに行って、ああ、あと1週間でなく  
なるな、あと5日でなくなるな、あと3日でなくなるなど思っているうちに、  
この英語は作品が言っているんじゃなくて、倉庫が言っている英語だと思い  
始めました。「いや、忘れてもらったっていいんですよ」。この倉庫は何年か  
ぶり、何十年かぶりで脚光を浴びました。2ヶ月で終わりです。また元に戻  
します。で言っているんですよ。「いやいいんですよ、いい夢を見させてい  
たきました、ありがとうございました」。この言葉が僕にはけっこうきつかつ  
たんですよ。逆に思い入れがあったんで、「いや、またね」という気持ちに  
僕らはなるわけです。皆さんの地域でも、角館はまさに今、「ネオ・クラシッ  
ク！カクノダテ」なんかで、そういう場所、空間を使っているんじゃないか  
という気がするんですよ。各町にきつと、「いや、いいんですよ、忘れてもら

っても」というようなものがあるような気がする。そういうものにちょっと違う命を与えるのも創造だと思うんです。だから僕らは次の年にまたやりました。引き出しの向こうから奈良美智をみるみたいなやつをやって、その次にやったのは「A to Z」。これやったのが2006年。8万6千人がきました。これは倉庫の中に街を作りました。倉庫のなかに町並みを作りましたから、あそこにちょっと猫が見えると思いますけど、猫もオブジェです。こうやって家の中に20数個のアルファベットの数だけの部屋を作って美術品を窓から覗きながら、街を歩けるという不思議な展覧会です。だから街が一個、映画のセットができたみたいなかたちでリピーターが多かったです。かなり増えました。言いたかったことはこの後なんです。実はそれまで弘前市ではほとんど支援もしてくれなかったんですけど、この頃からちょっと変わってきました。弘前市役所から、弘前駅で電車を降りたときに一番最初に見えるこの大きなところにバナーを飾らないかと。普段はここは弘前城とかねぶたの絵なんですけど、その場所に飾っていいよというわけです。そんなもんかなと思いました。そのうち、商店街や街路灯に全部つけないかと。嘘だろと思いました。秋のバージョンまで作られるわけですね。バスも、お願いが来て奈良さんが描いてあげます。青森県立美術館まで行くバスができます。信じられないことにあの単なる私的な一倉庫から、県立美術館行き直通バスが出て、そしてうちの美術展の半券を見せると、県立美術館の入館料が100円安くなるということまでされるようになりまして。

こういうふうに行くのが、さっき言った驚かされることなんですね。びっくりしました。みんなあやかりたいと言って、この「A to Z」っていう飾りを店に置くことによって、「私も協力しています」というマークになるんです。この駐車場、どういう協力をしているか全くわかりませんが、マークがあるわけです（笑）。本屋さんはしたたかですから、当然ここぞとばかりに本を売る。

「奈良美智フェア」、これはよくある。想定内です。ケーキ屋さんは、これはもう間違



いなく作らせるしかないって、このパリ亭さん、チーズケーキ（奈良さんの女の子のイラストの焼印入り）をまったくお金を関係なくやらせるわけ。それでたった150円で売ってしまうっていうこんなことをしてしまう。想定外だったのはこのケーキ屋さんが一昨年つぶれてしまったことなんですけど。応援したかったんですけどね。で、かわいそうなのは和菓子屋さんです。現代アートは和菓子には合わないだろうと。この開運堂というのはあの卍のマークが弘前市のマークですから、弘前のマークを使うくらいの老舗。その店がちゃんと「A to Z」っていう看板を出しているわけです。どうやったのかと思ったら、左側にちらっと見えているショーウィンドウに行きますと、何やら雰囲気が変わっていきまして、絵も飾っているし、それはクッキーっぽく見えるなど。クッキーのわけがないんです、和菓子屋ですから。落雁なんですけど、それをこういうふうにして。いつもこれやっていればいいのにと、思うんですけど、この期間中だけ、「私たちだって頑張れるもん」と。一番笑ったのはこれです、ワンカップでして、お酒です。これもなかなかいいなって。こうやってみんな、悪乗りっていうんじゃないんですよ。乗るときは乗ろうと。これがある意味で言うと、それまで冷ややかに、「まあ、弘前の出身の人だしね」なんていう話をしてたのが、やれるんだったらやってみようか、みたいなそういうノリで町が少しずつ変わってきているというところに僕は面白さを感じています。

十和田に関しては、さっき藤さんからいっぱい見せていただきましたが、ただ僕がひとこと言いたいの、このチェ・ジョンファさんのときに、さっき言ったこの（白菜のオブジェを飾った米屋の）おじさんが笑顔で写真におさまるよ



うになっただけでもすごい。最初は「ダメだ」と言った人がですよ、米をちょっと下において、全部あんなものを飾ってしまって、しかもこうニコッと笑っている。後日談ですけど、見に来る人たちにいつも何て言っているかというと、「君たち、日本人にとって命の次に大切なのはなんだと思う？」と聞くそうですけど（笑）。そういうふうにみんなが生き生きしてくるんですね。

西沢立衛さんという、さっきの（金沢の）21世紀美術館とこの十和田の美術館と両方とも設計に絡んだ、とても有名な建築家、今45、6歳の方ですけども、その人がある雑誌にこう書いたんですね。「私はあの美術館をどういう気持ちで作ったか。人々が十和田を思い描くときに、その都市の風景の一部にこの美術館がなってくれたらいいなと思います。それは建物だけではなく、今進めているアート活動を含めて、美術活動、市民活動の広がりの中で、風景を作りたい。町の人たちの意識のなかに作り出されていく風景なのかなと思います」。町の風景になる建築とアートという文章を書かれていたんですよ。ああそういうことを考えているから、こういう設計したんだなって気がしました。これからどんどんどんどん人が動いていくのを見てみたいんですね。建築家は普通そんなことを言わない、「この建築どうでしょう」って言うんですけど。そこから出ていって、そしてそれがどんなふうにも人々の意識の中に入ってくるのかということを考えているというのを本で読んだときに、ああこの方を選んで良かったなと本当に感じました。

そして最後にちょっと角館の話をしたいんです。アートな出来事が町に新しい予感を生むということです。さっき紹介したこのマップ、最初の年にもらったのかな。そして今日いらっしゃっている安藤さんのところなんかも、中で実際にいろいろ見せてもらったりしました。町がその気になってくるという変化を感じているわけです。例えば、想nicアート



の本拠だった佐藤義亮邸の向かい側にある、お蕎麦屋さん。とっても元気な人で、ときどき見に来てくれたんですけど、蕎麦打つのだってアートだよなって僕に言ったんですね。樺細工職人の方も俺たちもアートだよなって。もちろんですよという話をして、そうしたら蕎麦屋さんは次の年、2年目に行ったときに、みんなに見せると言って、アート作品、いやアートは蕎麦だってばと言ったのにちょっと勘違いされて、こんなの作るわけですよ（笑）。「おもしれえべ」って。僕はあなたのその蕎麦を打つ姿がいいんだと言った



んですけど、それでもその気になってきたのはいいかと思いながら、また彼に会いたいなと思いますけど。そういうふうにしてみんながちょっと一歩踏み出るといのは、励くんたちがやったことがきっかけになったなあとは僕は思っています。そのときの講演会のときに、何だかわくわくしていく出来事がこれから続いていくぞ、いっぺん想いを形にしたことが思わぬノリにつながっていくんだよね、アートな出来事の連鎖が別の地域にも広がっていくんだよねと。実際（大館市の）ゼロダテはそうです。アートを育てながら、次の世代を育てていくということをやっていくと、町ってどんどん変わっていくよね、アートの取り組みによって、町の景観も育つよね、という話をして、そのときは終わりにしたんですけど、その次の年に行ったときに、安藤さんのところを見たら、庭をこうやって開けてらっしゃるわけです。僕は自分で昔言ったことはすっかり忘れちゃって、安藤さんに「いいですね、ここ。窓、門を開けているっていいですね」と言ったら、安藤さんが、「先生が言ったんじゃないですか」って。実は僕が付き合っている黒石というところ、旧家がいっぱいあるんですけど、庭をオープンしているわけです。そして見せている。これも一つの自分たちの宝物である。見せようと思うと部屋の中に置きたいものなんかも置かないで、きれいにしていく。素敵な景観になっていく。閉じているだけじゃなくて、開けて見せてみよう。その景色自体がアートだと思うわけです。そういうことをやられていて、ああ、こういうノリにつながっていけばと思う、と安藤さんに言うと、ネオ・クラシックやっているよと話をされたんです。僕は今地域で必要なのは、まちづくりしたい人じゃなくて、自分たちの「場所」を持ちたい人、世の中には「空間」がいっぱいあります。

からっぽの間です。僕は建築の学科にいましたので、「スペース」という言葉が結構好きです。スペースのデザインなんて格好いいなと思ってたんですけど、最近スペースという言葉、「空間」という言葉が妙に空々



しく見えていまして、空間というのはからっぽの間なんですね。中心市街地が空洞化するとか、空き店舗とか空き地とかいつも「空」って漢字が使われるんですけど、それよりは、あそこは自分の「場所」だと思えるようなものがこの地域から出てくる、そのときのきっかけにアート、あるいは「もう忘れたっていいんですよ」というようなものを「これすごい財産じゃないか」と、もういっぺん再生させる、そんなふうなことをしていくこと。新しいものを作っていくことだけが創造じゃなくて、そこから何か組み替えて変容させていく。前にアメリカ人が小学生にクリエイティブの教育をしているという現場を見たことがあるんですけど、そのとき言っていたのはこうでした。「クリエイティビティというのは変容である、変えることである。あなたの目の前にあるこの紙を1時間の間に違うものにしなさい」。それを彼はトランスフォーメーションと言っていましたけど、「変えていくこと」だと。空間も、ちょっと何か彩りを加えたり想いをこめると、きっと「場所」に変わるのかなと。そういう意味でまちづくりというのは空間を作ることなんですけど、僕の「まち育て」というのは「空間」を「場所」に変えることという形で、ゼロダテなんてのは、それをゼロからスタートするという意味も含めてやっているんです。被災地もそうです、ゼロからのスタートです。ですからアートで活性化するんじゃなくて、アートみたいなものとさっきの藤さんのお話もそうでしたし、門脇市長の話もそうでしたが、それと出会うことによって、いろんな方向性に飛んでいく、その気になって動いていく、みんな同じ方向に行くんじゃなくて、ちょっと違う方向に行く。それがもしかしたら想定外という意外性もあるかもしれない。そういう形で今、北東北の小さいいくつかの町で現実的にそういうふうなものが今まさに動いている最中なんだというのを今日さっきのお話を聞きながら思ったわけです。僕はたまたま運良くて、十和田にも関わることができましたし、角館にも通わせていただいたり、大館にも行ってますけど、すごく思うのはアートが、という言う意味じゃなくて、まさに文化創造、創造都市・農村という言い方をしていますけど、創造という言葉は何なんだろうということをこの地域の、古い町並みのある町だからこそ、すごく感じるというのを、今日、昨日と感じながら、最後にちょっと余計でしたけど話をさせていただきました。以上で僕のプレゼンはこれくらいにいたしまして、ここから皆さんに戻っていただいて少し議論を進め

ていきたいと思いますのでよろしくお願いします。ありがとうございました。

北原 ではここから、1時間弱あるんですけど、今日のタイトル、「クリエイティブタウン・フォーラム」自体が一つのキーワードでもあるんですけど、クリエイティブ、つまり創造。今日はほんとにいろんな話を聞いて、面白かったのが、思ってもみなかったような驚くようなことが起こる、その反応が面白いというのもあったり、また、十和田の場合のスタンス、藤先生のお話を聞いたときに、現代アートというものが持っているインパクトの中から次のものが生まれていく楽しみみたいなものが、十和田は満載のような気がしています。それぞれの立場で、クリエイティビティ、創造という言葉と引っ掛けながら、今後どんなふうな方向に関わっていきたいか、あるいはこんな姿を見てみたい、そういったお気持ちをお聞きしながら議論を進めていきたいと思うんですが、これはさっきと逆にしまして、市長さんから話をお願いします。

門脇市長 はい、さっきお話のあった金沢の例でいくと、市立工芸大学があって、21世紀美術館があるわけですよ。僕も何度か行ったんですけど、とてもうらやましい環境だと思っていて、漆器からお菓子まで本当に見事に生徒さん方と町が一体化しているという状況が感じられました。実は今、仙北市で来年くらいに何とかしたいね、という話があって、何かというと、秋田美術工芸短期大学の4年制大学への認可が11月におりるはずなんですよ。そのあとの美術工芸大学と仙北市、特に角館を中心とした町のあり方の連携を考えていて、学生たちの視点というか楽しみを少し分けていただくというような気持ちがありまして、できれば、一方的な話ですけど、学生たちにぜひ校外学習のような形で角館、仙北のほうにおいでいただきたい。分かりやすいのは美術工芸大学の話ですけど、例えば秋田大学であったり、国際教養大学であったり、県立大学であったり、ノースアジア大学もであったり、たくさん大学ありますが、その各大学それぞれが、角館もしくは田沢湖、西木という空間のなかで、学生たちにとっての場所づくりができないかと。それを一緒

に楽しませていただくというような市民との関わりをもつことができないかということで、空き店舗であったり、空き教室であったり、というところに大学を作ろうと。それは学生が入学した大学だけではなくて、例えば秋田市内に4つも5つもある大学のみんなが集まって、異業種交流のようなものにもなったり、お互い触発したりする場にもなったりするような教室を何個か作って、そこから生まれてくるものを僕らも楽しむ、もしくは観光客も楽しむ。もう一方では、学生たちが作った作品が経済的な側面というところとちょっと変ですけど、例えば、芸術志向の学生たちが作った作品を角館という年間600万人くらいのお客様が訪れる場所で、売り買いができるようにもなりたいという話を少しずつしています。それにはけっこういろんなハードルがあるんですけど、これもたぶん面白いんじゃないかと。基本的には楽しいか、楽しくないかで考えたほうがいいので、これは楽しいんじゃないかという思いで、少し進めてみたいと思っています。



角館・火振りかまくら

北原      ありがとうございます。藤さん、十和田の場合は、そういう学生たちとの付き合いというか、あるいは、高校までいっちゃうとちょっと違うかもしれませんが、そういう教育のプログラムの話というのは実際どうなんですか？

藤      今までがそんなになかったんですよ。せいぜい学芸実習とか職場体験とかで受けいれるくらいで、それに関しては小学校、中学校、高校、大学までやっているんですけど。特に京都はほんとに美術系大学が珍しいくらいいっぱいあるような地域でもあるので、逆に十和田とかいろんな地域での活動をやっ

ているときに近くに美術系の大学ができるというのはやはり非常にうらやましい。いろいろ後輩たちから聞いているんですけど、僕の後輩らも秋田の先生になるらしいです、来年4月から。何人か知り合いが来るみたいで、4年制大学になって、引越してくるっていう人が関西からもあるようなので、そのあたりと連携取りながら作っていくというのは非常にうらやましいなど。

まだちゃんと決まっているわけではなく、組み立て中ですけども、今僕が始めている、奥入瀬・十和田のプロジェクトでは元々ホテルだったところがいっぱい空いていまして、そこに大学のゼミ単位で来て、合宿やったり、一つのプロジェクトを実際にやっていったり、研究していけるような場として、ネットワークを作っていきたいなど。近くに美術系大学がなかなかないというのもあるんですけども、逆にいうとそうやって全国の美術系の大学にも声をかけながら、夏の間とか使ってもらえるようなつながりを作っていないとダメだろうなど。そういう意味でネットワークというのが一番大事になってきていて、それに対していかにオープンにしていくか、どうつないでいくかというのがたぶん大きな課題だろうと思います。

北原     ありがとうございました。今、美術系の大学という話があったんですけど、僕が今いる大学は別に美術系ではないんですけど、美術系ではない大学も可能性はかなりあると思うんですよ。十和田は僕らがワークショップをやったときに学生さんが来てくれて、北里大学ってのがありまして、獣医の学科なんですね。集まった人たちに「美術館来たことある？」って聞いたら、「まだありません」。「何で？」と聞くと「私の専門は動物です」と言われて、馬の像があるじゃないとか言ったんだけどさっぱりダメで、そういうこともあって、大学は郊外にあるものですから、「街に来たら面白いんじゃない」、「街に来るきっかけになるから美術館来てみたらいいのに」って。その人たちとの出会いだって、さっきの市長さんの話じゃないけど、また不思議なものにつながっていくかもしれない。美術の人だけじゃなくて、例えば地元の高校でもいいと思うんです、角館の場合にね。地元の高校の美術部じゃなくてもきっといろんな可能性が出てくるのかなと思うんですけど。安藤さん、今回のネオ・クラシック、その前の想 nic、地元の高校生とかね、中学生とかすごい



った人たちが見に来たりとか、反応はどうなんでしょうね。

安藤     そのへんのところには我々も取り組んでいないということもあるのですが、あまり（そういう反応は）ないですね。

北原     ただ前の想 nic だと高校の美術の先生とかが関わったりされていましたよね。それで高校生たちが来るとか。やっぱり一番いいのはアートというと芸大とか美大の人たちとかって話なんだけど、案外そういう形でアウトリーチしていくと、どんどん違う方々が関わっていく面白さがあるような気がするんですけど。

藤        よろしいですか？ちょっとその話のつながりであると思うんですけど、地元の小学校とか中学校に対して、できれば、というか、考え方としてなんですけれども、例えば小学校の授業の中にいろんなワークショップ形式の授業を入れていくということはすごく重要だなと思っていて、そういうプログラムを組み立てられるとしたら、アートセンターとかそういうシステムを持っていること。例えばダンサー、コンテンポラリーダンスでもそうですし、一時、関西のほうで、「ダンスで理科」というのをやっていた（笑）。理科を教えるのにダンスしながらやっていくとかね（笑）。僕は前に本の対談のときも話していたんですけど、演じるということを小学校の5年生、6年生の段階で教えるというのは一つのリテラシーになるなと思っていて、一番問題なのは演じているのに演じている自分に気づいていないこと。例えば親を演じているとか子供を演じるとか、友達同士の中で、お互いに何かを演じているとか。演じているというのをどこかの部分でちゃんと自覚する。そういう意味でいくと、演劇、劇団とかというものがどうやって小学校のなかに入っていくか。防災教育ではやっている方たくさんいらっしゃると思いますが、防犯・防災について演劇で教えていくということもあると思いますし、アートという美術とか図工とかというイメージがあると思うんですけど、僕はすべての科目に、例えば言葉で遊んでいく、昔の古語でもいいですし、何でもいいん

ですけど言葉を組み立てていくことで、それがアートになっていくというか。例えば数字で遊んでいく、数学とか算数ではなくて、数字で遊ぶことでそれが新しい活動になっていくとか、教育に対しての新しい介入の仕方というのがすごく重要になっていくんじゃないかなと。

北原     そうですね。明治大学の齋藤（孝）先生が、つまらない朗読をすごく大げさに、みんなで歌うようにしゃべっていくんですよ。そうするとみんな朗読が楽しくなってケラケラ笑いながら子供たちがいっせいにやるんですよ。普通の朗読というのはすごくつまらなかったのに。そういうふうに分で表現して、演じていく面白さで覚えちゃうんですよ。

門脇さん、2002年くらいに総合的学習といって、いろいろな地域のものを教育・学習の場で活用していこうということになって、そのうちゆとり学習という話が出て、少し後退しましたが、この仙北市の場合、西木にしても田沢湖にしても、角館にしても、素材はいっぱいあるし、今おっしゃったようなこと、創造性を高めていく授業ができそうな気がするんですけど、実際どうなんですか、今？

門脇市長     3日くらい前に、火山砂防フォーラムという全国大会があったんです。駒ヶ岳の噴火の周期が40年周期なので、1970年に噴火していますから、もう今噴火しても不思議じゃないという、状況的にはそうなんですよ。

それで、生保内小学校という、田沢湖近く、（駒ヶ岳の）ふもとの小学校の5年生の子供たちに、4月、5月くらいから火山学習をお願いしたんですね。先生方も素晴らしかったし、大学から来ている指導の方も素晴らしかったんですけど、火山の恵みみたいなものが、温泉だけではないんだよねという話から始まっていくんですが、例えば昔の溶岩流の跡がかなりの侵食があった後に、つるつるした岩盤になって、そこに沢水が流れ込んでいて、自然のウォータースライダーで遊べるよというところがあって、そこに行ってみんなで遊んでみたり、噴火をイメージするお料理を作ってみたり、（噴火が起きたら）子供たちはきっとこんなファッションで逃げたほうがいいんだよね、と

いうファッションショーがあったり、とっても楽しかったです。防災教育というと、何とかせにやいかんというがんじがらめの感じがあるんですけど、子供たちの視点からは火山はとても恵みもあるし、怖いところもある、2つのことがわかったので、こんなことができたという話が印象的でした。

北原 それはかなり創造的な授業ですよ。スタッフというか先生方がかなり思い切った取り組みだと思いますけど。

藤 そういうプログラムの構築にアーティストだとかデザイナーだとか、僕の言葉でいうと非常にやわらかい状態の人が入っていくと、すごく面白くなるんですよ。

北原 さっき言った、がんじがらめの教育ではなくね。

藤 そうなんです。やわらかい人でフレキシビリティを持ちながら、いろんなイメージで今までの常識にとらわれずに、例えば火山の捉え方を料理にしていくとか、ファッションショーにするとか非常に新しい視点だと思うんですけど、そういう今まであり得なかったような、考え付かなかったような新しい視点が町のなかにいかに浸透していくのかというのがすごく大きい課題なんじゃないかなと。

北原 そうですよ。そういう意味でいうと、外から入ってきた、例えばアートだったり、それに関わる人たち。僕はよく、「土の人」と「風の人」と言うんですけど。「風の人」が来たときのちょっとした風で、おおっと思ったり。つまり風の人があると、土の人というのはあまりにもそこに居過ぎるので、土ぼこりがたまっていくと、いいものにもだんだん気づかなくなっていくし、もう一方、人に見せたくないものは土に隠すわけですよ。そこの外から来た人、学生でもいいし、アーティストでもいい、風が吹くと、その風がふうっと吹

くことによって、土ぼこりが飛んで、いいものは光ってくるし、見せたくないものは見られちゃうし、それで「やべえ」と思いながら次に動くわけですよ。そういう刺激みたいなものがさっきの学生の話とかであるような気がするんですけどね。

門脇市長 長野オリンピックのマークを描いた方、有名なデザイナーさん（篠塚正典氏）。火山の噴火のときに例えば火砕流であったり、溶岩流であったり、ここは危険ですよということを観光客の方々にも知ってもらうためには、言葉は長すぎるので、ピクトグラムにしましょうということで、子供たち原案のピクトグラムをその作家の方がきちんとした形で構成をしてくれたんですよ。これを国交省さんがすごく気に入って、この子供たち提案のピクトグラムを全国の火山にセットしようかということですよ、すごい喜んでいました。

北原 ありがとうございました。

藤 さっきの風と土で思い出したんですけど、僕は最近、この図を使って説明していて、地域に当然のようにいろんな役割があって、土の人、風の人という話があると思うんですけど。ここで水の人というのが非常に重要だなということをお話して、これは僕、「性質（たち）」だと思うんですけど、いろんな要素を皆さん持っていて、何かやっぱり育てたがる人、そこで醸して育んでいく人、土系というか。何か運びたがる風系の人、で、いろんな地域素材を「種」という捉え方をすると元々その地域にはあるんだという話もあるし、もしくは十和田の美術館みたいに新しい種、または海外から持ってくる、外来種を持ってくる（笑）ということもあるかもしれない。でもそれが育っていくためには必ず光と水が必要だという話で、光というのはつまり光を当てる役割。今まで光が届かなかったことに光があたるように、例えばメディアであるとか、いろんな文章書いたりとか。そこで水の人というのが実はすごく重要で、これは何なのかというと、興味関心をそそぐ人だと。この関心というものに対して、もっと注目すべきだなと思っていて、例

えば何らかの活動で、すごくちっちゃな活動でもいいですけど、「いいね」

「面白いね」って言ってる人がいると応援される。トラックの荷台の上に人形乗せて走っていても、やっぱり仲間で、「これ面白いね」って言ってたから、たぶんできたと思うんですけど（笑）。やっぱり水がぜんぜん注がれないと、それは枯れていく。ただこの図式の中で、いくら枯れてもそれは土の栄養分になっていくので、まあどんな表現でも必要なんじゃないかというのもあるんですけど、ただここで水をどう集めるかという、例えば越後妻有のトリエンナーレでは、「こへび隊」というボランティアグループを作ってやっていますし、瀬戸内国際芸術祭の場合は「こえび隊」ですね。そういう関心、興味を持つ人を大事にしながら、そこをどれだけコントロールできるかという、水の人の役割はすごく重要なんじゃないかなというのがある。



こえび隊

たぶんその地域で何か活動するときに、観客だけではない、いろんなものを一緒に作っていく人たち。弘前の「A to Z」を見ても500人のボランティア、それはどういう興味関心があったかわからないけれど、一緒に働けるというそういう関心もあるかもしれないけど、でも関心を持って集まってくることが重要であるということと、ちょうどおとといの東京会議で西條剛央さんという「ふんばろう東日本支援プロジェクト」という活動をやっている早稲田大学の哲学者なんですけど、彼は元々学者でボランティア活動とかしたことなかったんですが、自分の実家が仙台で、親戚が被災したりしていて、



何回か仙台に通ううちにどうにも物資が届かないということに対して、どうにかしようと思ったときに、構造構成主義という理論に基づいて作ったのが「ふんばろう東日本」という活動だっていう話なんですね。その中ですごく面白いのは、これは僕の一つの持論でもあるんですけど、ものごとの価値というのは絶対的な価値というものはない。それぞれ、例えばこの水に価値があるかどうかというのはどこにあるかによっても変わるし、どういう状況にあるのかによって変わるというように、ものごとの価値というのは変わってくるというのは当たり前のことですが、これを誰と飲むかでまた自分の中での価値が変わってくると。これを水のメーカーの人と飲むと、最高の水のように思えるかもしれないし、またぜんぜん違う人と飲むと何も価値のないものになるかもしれない。「誰と」で、ものごとの価値が変わるということと、その西條さんが言っているのが興味のあり方でも、ものごとの価値は変わるということなんですね。興味のある人との関係のなかでいくと非常に価値が高くなるわけですけども、文化芸術にまったく興味のない人との関係のなかでは、いい物があっても、それは絶対的にいいものではない、それは興味・関心のなかであるんだと。興味と関心をどうつないでいくかというところがすごく重要なんだという話をされていて、非常に面白いなと。で、この「水の役割」というのが、興味・関心なんですけども、そういうものをいかに集めていくか。地域の文化・風土というのを語るときに、水との関係というのは人の生活を大きく左右していて、地域特性というのは、その人がどういう水の環境のなかで暮らしていたのか。そことの関係のなかでの独自の風土というのがあるんじゃないかなとか、そういうことに非常に興味を持っています。

北原 「水の人」というのはすごく興味のある言い方で、もしかしたら単発でアートイベントみたいなことをやろうと思うと、たぶん水をやって花を育てるよりは造花を持ってくるんですね。それが枯れていく怖さもないし、次の年もまた造花という。でも、地域に密着して続けていこうと思うと、水をうまく入れないと育たない、枯れちゃう。それをどうやって続けていくかというのは、例えば去年から始まった「ネオ・クラシック！カクノダテ」にしても、

これからですよ。どうですか、水の人としてはどんなことを期待しますか？

安藤　そうですね。興味・関心というのは非常に大事なことで、この「ネオ・クラシック！カクノダテ」のサブタイトルが、「創造の最先端とかわらずにそこにあるもの」なんです。実は、「かわらずそこにあるもの」というのは我々いつも何気なく見ていると変わらずそこにあるんだと思っているのですが、3.11の被災地は極端な例ですが、そうでなくても、角館の町中からも毎年、1個か2個ずつ蔵がなくなっていったらですね。古い家屋も当然なくなっていく。もちろんそれにはいろんな理由があるんですが、やっぱり持っているものが守る努力をしていかないと残っていかないものだと思うんです。有形のものも、無形のものも。そういう毎日の生活の中ではなかなか気づかないんですが、例えばこの「ネオ・クラシック！カクノダテ」で、こういうアートイベントを行い、よそから来る人も地元の人も興味を持って見ると、「あれ、この建物って普段はどうやって維持されているんだろう？」とか変な話、「ここの家は どうやって収入を得て、ここを維持しているんだろう」とか、「この家、この蔵、そろそろ手をつけないと大変だよな」とか、「ここの階段はもうゆがんでいますよね」とかいうことが、アートの場として脚光を浴びるからこそ、ようやくわかるんですね。それがわかることによって、そのあと維持していく必要があれば、どうやって飯のタネを探していきましょうか、どうやってお客さんを集めましょうかという話になっていくわけで、それは非常に重要なことで、さっき佐々木先生のお話の中で、創造都市・農村に触れられて、人を集めるんじゃない、クリエイティブな人が観光客として来ると、お金を落としてくれるんだみたいな、客単価が高いんだっていう話があって、非常に下世話な話なんです。私としては、我が意を得たりという思いがあるんですけども（笑）。いずれにしろ、少子化、高齢化が進んで、どうやってそこにあるものを維持していくかということを考えた場合、その部分が重要になっていくと思います。それを今のアートイベントの中で、気づかされる、あるいは気づける、ある意味で芸術に触発されるという、いいことだなと思います。

北原      ずっと「ネオ・クラシック！カクノダテ」とかアートイベントの話をしてきたんですけど、ちょっと冷静になって考えると、今この空間、このわらび座のね。さっき安藤さんも背景にわらび座がここにあることが大きいとおっしゃっていましたが、僕はもちろん学生時代からわらび座の存在も知っていましたし、いろいろとメディアでも見ていました。でも実際に昨日からここに来て、今日幸いにも途中からでしたけれども「遠野物語」を見せていただいて、その空間にいたのはほんの4,50分でしたけれども、だからさっき安藤さんが言われたことがすごくわかって・・・僕はちょっと感動したんですよ。というのは、その前に是永さんからいろいろとわらび座のこれまでのことを聞いていたんですけども、そこで彼らがパフォーマンスをしている、それをある種の演技としてみているわけじゃなくて、そのコミュニケーションの発信と、こちらと一体化しながら観ている雰囲気の中で、僕は鳥肌が立ちましてね、フェイスブックで、「おれ、すげーもん見た」って昼間書いたら、「いいね、いいね」って来たんですけど（笑）。そういうふうな創造的なことをしながら、誰かに対して押し付けるわけじゃなくて、自分たちが体を鍛えて動いて、虎の舞なんかめっちゃくちゃ体力いるんですけど、それをずーっとやられている姿を見ながら、こういうものがこの東北で、ずーっと毎日やられている、す



わらび劇場

ごいことですよね。そういうのを目の当たりにしたときにこの町は何て豊か

なんだと思った。角館のように、古い建物とうまーくやっていくこともできるし、こういった創造的な芸術をずーっと続けていけるような場所もあるし、その現場でこういうシンポジウムができること自体、すごくいいことだと思うし。ここでずっとクリエイティビティを続けてらっしゃるグループ、今日お聞きしたら、2世の人たちがもうやってらっしゃるとか。そういうふうに続いているものがそばにあるという豊かさにびっくりしました。市長さんどうですか？こういった空間で、こういうことができること自体、普通のどっかのシティホテルみたいなところか、市民会館とかでやるんでしょうけど、ここだからということもあると思うんですよね。

仙北市長            さっき僕は第二部のほうでアーティストしてお話をしたいと話しましたが、この話は僕は役者として話をしなければいけなくなってしまう（笑）たった1回ですけど上げてもらったんですよ、ステージに。いい役をいただきまして、あれ感動ですよ。空間としての感動というものとまた別の、快感ですかね（笑）。そういうチャンスが実は市民にはあるわけで、これもまた贅沢な話ですよ。60年経っているんですけども、僕らはそういうところに暮らすことができたのはラッキー、ですかね、ちょっと他人行儀な話になってしまいますけど、ラッキーです。

北原            ありがとうございます。いろいろと考えてしゃべっているとそれなりの時間が経ってまいりましたが、主催者の方からそういう話は聞いていなかったですが、せっかく今日ここまで皆さんにも長時間いていただいて、この距離だったら、マイクなくてもしゃべれる距離だと思うし、ワイヤレスマイクもこの長時間に耐えられず電池が切れてきたようですので（笑）。今日はせっかく十和田から藤さんが来てらっしゃいますし、佐々木先生はいらっしゃいませんけど、すこしこんなこと聞いてみたいとか、こんなこと思うんだけどなあということがあれば、フロアのほうからも質問とかご意見いただけたらと思うんですけど、いかがでしょう？この際こんなこと聞いてみたいとか、十和田までどうやっていったらいいんですか？という質問でもいいんですけど

(笑)。まあそれは置いておいて、何か質問とかご意見とかありましたらいただきたいんですが、どうでしょう？あ、市長さんから業務命令が出ましたので、僕が初めて角館来たときにお会いした佐藤励さん、感想でも何でもお願いします。

佐藤 今日、北原先生の教え子の津田さんと一緒に来たんですけど、私は今、安藤大輔さんと一緒にアートディレクターということで「ネオ・クラシック！カクノダテ」を開催しています。宣伝みたいな感じで、質問ではないですけど(笑)、今日やっぱり先生の話とか藤さんの話とかを聞いていて、間違っていないなと思ったのが、去年私が彫刻作品を飾った場所が荒川家さんだったんですけれども、そこは今までずっと公開されていなかった蔵で、私は地元の作家ということで、自分が交渉をして自分が彫刻を飾るという、私が「風の人」になって、荒川家さんが「土の人」で、初めてその蔵を公開したときにすごく反応が良くて、家主の荒川家さんがすごく喜んでくれて。自分の蔵がこうやってまた光をあびるのが嬉しいと。今年もまた光をあびているのがすごく嬉しいということで、「ああ、やってよかったな」と思っていたんですけど。実は今年また一つ野望があって、今年新しく八柳樺細工店さんに私、交渉してきまして、今度は「土の人」が八柳家さんで、蔵も公開していなかったし、蔵座敷とか一緒に掃除だったり空間を作っていったらまたこれが面白くて。面白い現象がおきていますんで、28日にまで「ネオ・クラシック！カクノダテ」やっておりますので、ぜひ来てもらえれば嬉しいなと思います。

北原 ありがとうございます。そういうノリの連鎖がいいですね。つながっていくっていう。

藤 今話を聞いてちょっと思ったんですよ。これは非常におもしろいなというところが、これはアートイベントとしてやられているじゃないですか。で、たぶんいろいろな展覧会の質とか運営の方法とかでこの日程を設定されて、(蔵を)公開していただくということでも無理なくやろうとしてこういう形にな



っていると思うんですね。8日間、9日間かな、まあ1週間ちょっとという形でやっているじゃないですか。僕昔からいろんな活動をするなかで感じているのが、時間軸の設定の仕方というのが美術作品に対して意外と極端だなということなんですよ。どういうことかという、パーマネントかテンポラリーかという考え方ばかりで、つまり恒久設置か、またはイベントで、ギャラリー1週間かみたいな、もしくは企画展になってきたりとか、瀬戸内国際とか大型になってくると、半年間やったりとか、うちの美術館だと3ヶ月の展覧会やったりとか、実は時間軸が設定されているのは、ある事情によって設定されているわけなんですけど、実はその作品とか、その場所とか、都市計画の仕事をしていた延長でいくと、ほんとはその土地、その地域のそれぞれの場所というのはそれぞれにふさわしい時間軸を持っていると思うんですよ。それは千年単位で残さなければいけないところもあるかもしれないし、あるところは33年、僕は1世代33年説なんですけれども、1世代単位で残していかなければいけないところ。逆に、季節ごとに変わらなければいけない場もあるし、商業施設なんかはそういうところもあるかもしれないですし、床の間みたいな感じで季節ごとにやっぱり変わっていくということも必要かもしれない。もしくは1週間単位で変わったほうがいい場所もある。もしかしたら毎日変わったほうがいい場所もある。そういう意味でいくと、いろんな表現形態、いろんな表現活動、作品ありますけれど、作品には時間軸がほんとはあるんですよ。賞味期限があるんですよ。賞味期限が短くてすごく面白いものもあれば、長い賞味期限のなかでじっくり見せるものもある。十和田の美術館の場合、長い賞味期限のものを選んで入れているとはいえ、建築と同じ運命をたどるわけですから、仮に30年くらいというのがたぶん設定されているのかなと。わからないですけど。その考え方といくと、こういうのをやる時も時間軸の長い単位で、もしもそういう場所があればですよ、そういうものが定着していったって、ここは3年間やる、3年間見られるようなところにするとか。もしくはイベントでしか見れない、1週間単位のものもあるし、パフォーマンスなんてのは一晩しか見れないわけですから、そういうものもあるし、もしくはそういうものが記録として映像で流れている。映像で流れているものが1ヶ月単位で、例えば駅で流れている映像が1ヶ月単位で変わっていくとか。ふさわしい時間設定の仕方でもっとコントロールし

ていくような技術というのがたぶん必要なんだろうなという気がするんですよ。こういうアートイベントの次に出てくるのは、それぞれの作家の作品でぜんぜん違って、たぶん3ヶ月耐えうる作品もあるし、ひょっとしたら10年耐えうる作品もあるかもしれない。そこで作家のモチベーションも変わってきて、もっとここでやるんだったらこれぐらいの、とか、もしくはそれぞれの予算のつけ方でも変わってきて、たぶんそのへんのことがマネジメントする上ですごく重要になっていくのかなと。更新されることも重要だけれども、定着されることも重要であると。その辺のことは次の課題としてあるのかなと。

北原     ありがとうございます。ほんとに僕もネオ・クラシックについてはそのことを言いたかったんです。全く一緒です。ずっとあの作品が置いてあるんだよねという状況が出てくるという話。例えば十和田の場合に松本茶舗さんとか確実にいろんなイベントごとに何か置いてくれというんだけれども、ずっとこれを置いていくことになるんだという話をしていますからね。イベントじゃなくて、そういう状況を作っていく。もちろん（作品を）変えてもいいんですけど。実は十和田はさっきもお話あったように、1個の空間のなかに作品を一緒に作って行って場所にするという話だから、中の展示が変わっていくわけじゃなくて、ずっとあのおばさんはいるし。ただ、そういう美術館は変わらなくていいんだろうか、という話になったときに僕は伊勢の出身なので、20年に1回ぐらいずついろいろ変わっていてもいいんじゃないかと（笑）。式年遷宮の世界ですけど。どういう意味で変わるか分からないですけど、変わっていくこともあっていいのかなと思いますけど。ただ出しようがないですけど、彼女の場合は。でも、そういう変わっていくものと古いものとが融合していくのが、まさに創造性だという話もありますけどね。ありがとうございました。はい、どうぞ。

安藤     その常設展示の話ですけども、実は角館の観光協会、（角館）駅前蔵というのがありまして、そこに（9月の角館の）お祭りのときに置き山というのを立て

て、7メートルくらいある龍を乗せて、それはもったいないので市長には黙って（笑）、駅前蔵に飾ったんですよ、お祭りの人形を。でもあまりにも皆さんから「いつまで飾っておくの？」という問い合わせがあったので、人形師と相談して、「じゃあ来年のお祭りまで飾りましょう」という話になって、今飾っているんですよ。鳴神上人という人形ですが、それでたぶんですけど、来年は、励くんは本職は「きがた」かもしれませんが、お祭りの人形師でもありますので、置き山に乗せた励くんの人形がひょっとすると来年のお祭りのあとから1年間常設展示されるかもしれません。というようなところで、結局その常設展示となると美術館でなくてもいいんですが、やっぱり公的空間でないとなかなか難しいですよ。一般の商店、民家ではなかなか常設展示は難しいので、これは門脇市長にお願いするんですけど、いろいろ制約はあるんですけど、公的空間に何らかの形で「ネオ・クラシック！カクノダテ」絡み、あるいはそれとは関係なくてもアートの常設展示をできるようなスペースがあればいいのかなと思っています。

北原      もちろんそうですけども、プライベートな空間にそういうものが置かれていて、それがパブリックな雰囲気に見えてくるという面白さもあると思うんです。つまり役所が作った空間ではなくて、「あそこの店のあの玄関に行ったら、あれがあるんだよね」というのもそれはそれですごく公共性を帯びている気がするし、両方必要ですよ、きっと。ありがとうございました。ほかに何かございますか？良く見たら予想通りのいい時間帯になってきましたので、最後にお一人ずつからコメントをいただいて、僕がまとめるという役割になっておりますので、では、市長さんからいきましょうか。

仙北市長      さっき前段のほうで、農業も創造産業だというお話いただいてとても有難かったんです。仙北市は今、6次産業を進めていこうということで、新たなものという捉え方だけではなくてもいいんだよ、昔からのものの再生でもいいんだよという話をしているんですが、農村にクリエイティブな風が入ることがとても大切だと思っていて、「ネオ・クラシック！カクノダテ」の場合

も町の蔵が会場だったりということがありますがけれども、決してそれだけでなくでもいいんじゃないかということで、農家の軒先だったり、縁側だったりというところに小さな何か、オブジェがあるというのも、とても清々しい風景になるよねという話も最近出ているんですよ。そういう展開をしていくこともまた広がりを持たせることになるし、農家の軒先をちょっと覗きに来るおねえちゃんがいて、そこにおじいちゃんが出て行ってお茶を勧めながら、たくあんとかを買ってもらうというパターンもできなくはない。そういうような人と人がつながる空間がどんどんどんどん広がっていくといいなと思っています。

安藤 このアートイベントをやるにあたって大変皆さんにご難儀をかけているんですけれども、やっぱりこれを継続するためには楽しくやらないといけないなということと、滅私奉公型で人のために尽くして自分のためには何もならないというようなやり方ではなくて、これをやることによって、どんな形でもいいですが、自分にとって何らかの果実があるというようなことでないと長続きはしないんじゃないかなと思います。だから我々としてはアートイベントを続けていくために、みんながWin-Win というか、メリットが感じられるイベントであり続けたいなと思っています。

藤 農業、最近ほんとにアート系のプロジェクトでも半農半芸というテーマでやっているようなところもあったり、僕も今十和田に勤めていて、なかなか帰れないんですが、家は福岡の糸島にありまして、海沿いで「イトシマゲイノウ」という「ゲイノウ」は芸術の「芸」と農業の「農」で、「糸島芸農」とい



うアートイベントが始まったんですけども、農業に従事しながら、何かもうちょっと文章を書いたり、クリエイティブな活動をやっていくとか、何か作業に従事しながら一方で演奏をやってみたりとか、生活の中にいかにクリエイティブな活動が入っていくかということを考えると同時に、そこですごく重要なのは、農業をやりながらクリエイティブなことをやるっていうのはクリエイティブな人たちとつながりができていくということなので、デザイナーとか建築家とかいろんなクリエイティビティを持った人とつながることによって、自分たちの作物をどう作っていくのか、どう売っていくのか、さっき食文化の例も出ていましたけれど、新しい形で新しい発想で流通を考えていくというところに、アートとかクリエイティブな活動というのが今までの

## 糸島芸農・アート収穫祭



んとに楽しく作っていくということをネットワークしていくところがあって初めて、十和田市現代美術館みたいなところも生きてきますし、アートセンターというところが生きてくる。それがない状態、つながっていないオフの状態です。いくらアートセンターができててもなかなかそこでは誰が何をやるの？という状態になってしまうので、いかに作る場所が増えていくかということも重要なのかなと思っています。今回のこのフォーラムでいくと、僕は青森の十和田から来ていますけど、それぞれのエリアで、面白い状況ができていて、それがつながっていくことと、個々が大きな力を持っていくことで、東北にパワーをつけていく。それぞれの町、一つの蔵、そこで暮らしている人がほんとに面白い活動を楽しく発信するということがつながっていった大きな力になっていくのかなと思いますし、頑張っていきたいと思います。

北原 では最後に僕のほうで、今日はまとめるつもりはなくて、皆さんのコメントとか、前半のお話のなかで心に残ったこと、あるいは書き留めておきたいことというかたちで、4,5点お話ししたいと思います。最初の言葉は門脇市長さんの最初のスピーチに出てきてメモしたんですよ。「一人一人の営みから生まれたものを認めて、育てていく」。つまり創造という話のときには造るという言葉が出てくるんですが、「育てる」ということをおっしゃって、僕がすごく好きな言葉で、「まち育て」といっているくらいですから。あとになって僕がお話したように、震災の被災地は育てようにも育てられなくなったところ、またゼロからじゃないかと言ったときに、いや、0.7か0.6くらいから始められるような点を見つけないかとみんな思っているんですけど、まず自分たちが自分たちの営みから生まれている自分たちの文化資源をどうやって認めていくのか。それはもしかしたら子供たちの目が必要かもしれないし、「風の人」が必要なかもしれない。

まず育てていくことが大事なんだとおっしゃったことが一つめでした。

2つめは、佐々木先生が金沢の事例とかをお話されて、古くからの伝統的な工芸をやっているところがそれだけではなくて、そこに先端のものを組み合わせようとする。現代アートというのは組み合わせたときに何が起き

るんだろうという面白さがあるんだと。それは十和田もそうだと思いますけど、そういう意味でいうと、例えば僕の住んでいる弘前というところは洋館もめちゃくちゃ多くて教会も多いんですよ。城下町ですよ、400年の（弘前城は2011年で築城400年）。ところが明治時代に独学で頑張った大工の棟梁が洋館建てたんですよ。それが今全部文化財になっているんです。素敵なんです。だから今の弘前の人たち、商工会議所の人とかは弘前の町のイメージを「洋館とフランス料理の似合う町」と言っているんですね。古い城下町なんですけど。それはたぶん出来た頃はたたかれたはずなんですよ。なんでこんなもん造るんだと。今やそれがほんとに素晴らしい街並みで。そういうことから言うと、新しいものが入ってくるという怖さもあるし、文化というのはそこから新しいものが出てくる楽しみみたいなものがあるんだなというのが、さっきの先端と伝統との融合という言葉で感じました。



旧・弘前市立図書館

3つめは「びっくりしたりびっくりさせられたりするんだ」という門脇さんのお話で、僕ら、大事な単語で「ソウハツ」という言葉がありまして、創造の「創」に発明の「発」と書いて、「創発」というんですけど、こう考えていることではない、みんなが想定しているところでないところに飛び出していくことを「創発現象」と言っていて、僕らはワークショップをやるときに「創発」を見たいからやるのであって、落としどころがきまったワークショップをやっても意味がない。出てきたときにワッと思うような創発の面白さみたいなのが、まさに創造のなかの一番の楽しみだなと。作り上げていくときに現場にいと、こっちに曲がっていったか！みたいなこととかがきっと当事者としても面白いのかなという気がしました。

4つめはさっき藤さんがおっしゃった「水の人」的な発想ですね。僕は「風」

と「土」、それで風土だなんて言っていたんですけど、水っていうのはやっぱり育てていくという話につながっていく。だから子供たちという話も出てくるし、あるいはさっきおっしゃったように地域にいる若い学生さんたちとの交流のなかで、次の世代を育てていくというような、そういった人たちの存在って、文化はやはり育んでいかなければいけない面があるので、時々変わらなきゃいけないし、時々外から刺激もほしいけど、ずっとそれを育てていく人がいなければいけないということを感じました。それにつながるかたちで、時間軸という言葉もおっしゃいました。この時間軸というのはその地域地域によって違うんだよという、東北、北東北と十把一絡げにされて「縄文」とか言われちゃうんですけど。赤坂さん、怒ると思いますけど。そうではなくて、みんなそれぞれに固有の時間があるということ、それと文化は直結しているんだという気がします。逆に古い建物なんかもそうです。僕ら古い建物を見て「いいね」なんて言うときに時計が止まったような見方をしていますけど、今我々が作っている建物も 100 年後には歴史的遺産だって話で、それに僕らは立ち会っているってということも考えて時間というものをもう少し意識すべきなのかなという気がしました。

最後にさっき、「滅私奉公」ではなくて、という話を安藤さんがされましたけど、楽しくなきゃダメなんだという話。僕は自分で違う言葉を使うんですけど、八戸の出身で、東大にいる哲学者で、「滅私奉公」の反対語を 4 文字熟語考えている人がいて、「カッシカイコウ（活私開公）」というんですよ。カッは活性化の「活」です。シはワタクシ「私」です。カイはヒラク「開」です。コウはもちろんオオヤケ「公」です。「滅私奉公」の反対ですね。元氣な私が開いていくと、公共性を帯びる、と。例えばどこかの店先とかでちょっと元氣で、「あ、うち、励くんの作ったものを置こうかしら」とやった瞬間にそうやって開いていくと、それは公（おおやけ）だと。そういう意味でのスペースの楽しみみたいなものがまだまだあるなと。それがまさに文化の発信じゃないかなと思いました。

見事に 5 時半ということでございまして（笑）、役割は全うしたかなと思ってありますが、とにかく長時間お話を聞いていただいてありがとうございます。最初にご挨拶いただきました門脇市長さん、ほんと忙しい時なんです

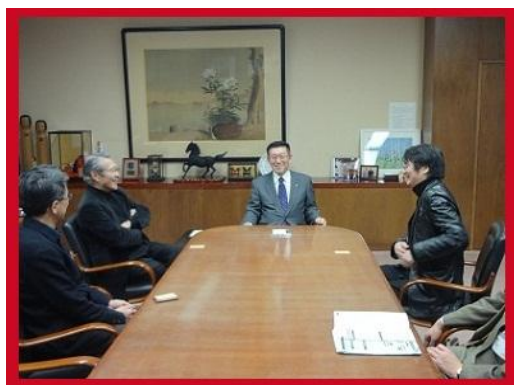
けど、こちらに来ていただいた安藤さん、そして十和田のほうから駆けつけていただきました藤さんに最後に感謝の拍手で終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

司会 パネリストの皆様、コーディネーターの北原先生、本当にありがとうございました。また会場の皆様も長い時間まことにありがとうございました。北東北のこれからの更なる連携について学ぶことの多いフォーラムだったと思います。再来年 2014 年には秋田県で、国民文化祭に開催されます。テーマは「発見×創造 もうひとつの秋田」です。県内全域で文化芸術によるまちづくりの様々な取り組みが準備されています。今日のフォーラムもその国文祭に向かう一つのはずみになったのではないかと思います。以上を持ちましてクリエイティブタウン・フォーラム in 北東北を終了させていただきます。

-----

◆平成 24 年 12 月 21 日(金)、国民文化祭・あきた 2014 の開会式・オープニングフェスティバルの総合プロデューサー・西木正明氏、音楽監督・天野正道氏、脚本演出担当・栗城宏氏(劇団わらび座)が佐竹知事を表敬訪問しました。

西木総合プロデューサーから「お客様目線にこだわって内容を検討している」との報告があり、知事からは、「泥臭さの中にもレベルの高さを感じられる『高い質の田舎』を表現して欲しい。華美ではなく、本当の意味での『郷土力』を出せればよい。」との話がありました。途中、知事が民謡を披露するなど、終始和やかなムードの中で歓談が行われました。



国民文化祭オープニング・スタッフと秋田県知事との歓談

# 創造都市・創造農村

仙北市の取り組み

是永幹夫



これなが・みきお 46年生まれ。文化芸術創造都市モデル事業仙北実行委員会事務局長、わらび座相談役。仙北市。

先月26日、仙北市が文化芸術創造都市部門で文化庁長官表彰を受けた。同市は2010年度から同庁が始めた文化芸術創造都市モデル事業で、3年連続で採択された国内唯一の都市になるなど、文化芸術によるまちづくりが高く評価された。同部門の表彰は07年度から始まり、11年度までの5年間で20都市が表彰されている。モデル事業採択都市はこれまで9都市ある。

私が事務局長を務めている文化芸術創造都市モデル事業仙北実行委員会は、会長を門脇光浩仙北市長、副会長を安藤大輔・角館町観光協会会長がそれぞれ務め、地元の行政や観光協会、大学、報道機関、市民団体、企業、劇団などで構成している。領域横断的な構成となっており、圏域のプラットフォームづくりをこの2年間進めてきた。

創造都市というまちづくりの手法はヨーロッパから導入された。文化芸術の持つ創造性を生かした産業振興や地域活性化の取り組みを行政と芸術家、文化団体、住民らが連携して進めるもので、日本では横浜市や神戸市、金沢市などの大都市や中核市がけん引してきた。

一方、仙北市や岩手県遠野市のような小規模な都市でも、歴史と文化、観光を生かした創造的な取り組みが、かつてから行われている。両都市とも人口3万人規模の都市だが、その文化と芸術、観光の発信力は大都市にはない個性あふれる輝きを放っている。



東日本大震災の「3・11」後のわが国のあり方や地域づくりにおいて、各地域や街が独自の文化資源を生かして活性化し、あらゆる規模の都市が対等に連携していくことの大切さが問われている。大都市依存型ではない、東北独自の風土と精神性を踏まえた再生がなければ日本の未来はない。

昨年10月に文化庁などの共催でたざわこ芸術村で開かれた第1回創造農村ワークショップには、北海道から九州までの10都市が参加し、熱心な交流が行

われた。今年は兵庫県篠山市で第2回が開かれる。それに連動する企画として、今年秋には「創造農村ワークショップin北東北」を、たざわこ芸術村で開催する。岩手県遠野市、青森県十和田市、仙北市の3市が創造的な取り組みの事例や、観光地としての共通課題などを議論する。連携と発信の力を高める場にした。

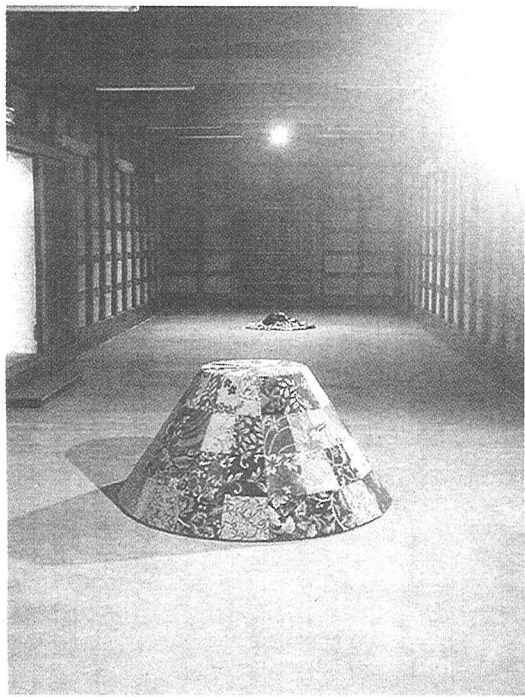
昨年実施した「モデル事業」の中で特筆されるのは、秋田公立美術工芸短大と提携して「蔵とアートをめぐるネオ・クラシック・カクノダテ」を仙北市で開催したことだ。同短大工芸美術学科准教授の芝山昌也さんと産業デザイン学科助教の阿部由布子さん、秋田市のギャラリー

・コラボボトリー代表の笹尾千草さん、同市角館町の彫刻家佐藤励さんにディレクターとしてチームを組んでいただき、角館の蔵という魅力を生かした「アートdeまちあるき」を開催し、大きな成果を得た。

武家屋敷で有名な角館は、蔵が101もある「蔵のまち」でもある。六本木の実業館ではできない角館ならではの「磁場」のなかで、出展作家たちの作品も息づいていた。今年秋に2回目を開催する。



モデル事業の一環「復興と絆ー伝統芸能と地域ー」シリーズは、被災地の民俗芸能保存会を招待し、民俗芸能が持つ力と、コミュニケーションに対して果たす役割をあらためて教わる機会になっている。昨年11月に大地震、大津波、原発事故被害の三重苦と闘っている福島県いわき市の伝統芸能「じゃんがら念仏踊り」、12月には岩手県北上市の「岩崎鬼剣舞」が演じられた。そして、本年度第1回は、5月6日に同県大槌町の「虎舞」の皆さんを招待し、お話と演舞を披露していただく。いず



「蔵とアートをめぐるネオ・クラシック・カクノダテ」で太田家にある蔵に展示された作品。後藤悦朗さん提供

れもたざわこ芸術村で開催しているが、東北の芸能に格別のご縁をいただき、長年お世話になっている劇団わらび座としての、被災地支援のかたちでもある。

このシリーズの一環として今年1月に「たざわこ芸術村」で開催した宗教者の山折哲雄さんと民俗学者の赤坂憲雄さんの特別対談「民族芸能は日本を救い、日本の未来をつくる力」は大きな反響を呼んだ。被災地をたびたび訪れているお二人ならではの深い内容だった。

来年1月に横浜市で「創造都市ネットワークショップ」の設立総会が開催される。またアジアのネットワークショップの準備も始まっている。本県では14年に国民文化祭が開かれる。創造都市をめぐる国内外の動きと連動すること

が、県内の創造的地域づくりに挑戦している自治体への応援にもなる。

国民文化祭は3・11の後、東北で初めて開かれるだけに、文化芸術による復興支援の使命も負っていると言えよう。「秋田の出番」を県民挙げて盛り上げていきたい。



# 協力事業

## 1. 東日本大震災復興支援

「音楽でつながろう」コンサート

## 2. フォーラム「瀬戸内海文化を子どもたちへ」

## 3. 「小玉暁村没後70年記念シンポジウム」

## 4. 「創造都市政策セミナー」

## 5. 「出羽からの祈りと再生」



～音楽でつながろう 2012～

第29回 国民文化祭・あきた2014応援事業

みんなの校歌

コンテスト

仙北市  
角館交流センター

仙北市角館町中菅沢77-30  
TEL 0187-54-1003

入場無料

2012年 12月9日(日)

- 12:00 フードブース「音つなメシ」オープン
- 13:00 開 場
- 13:30 第1部:みんなの校歌コンテスト
- 16:00 第2部:音楽でつながろうコンサート

主 催 音楽でつながろうプロジェクト  
後 援 仙北市 仙北市教育委員会  
問合せ 090-4311-5726(坂本)  
ontsuna@gmail.com



## ～音楽でつながろう 2012～ みんなの校歌コンテスト

おかげさまで大盛況のうちに終了いたしました。日曜日の本番当日、そして月曜日の角館中学校ライブと息つくヒマもなく走り続けた2日間でした。「校歌」にスポットをあてたイベントって、そういえば今までなかったかもしれません。出場いただいた方から、懐かしく幸せな気持ちになった、とっても楽しかったという声が聞こえてきました。今年も音楽でつながることができた実感でいっぱいです。

関わってくださった皆様、足を運んでくださった皆様、本当に本当にありがとうございました。この場を借りて、心から御礼を申し上げます。そしてまた近いうちに、音楽でつながりましょう。

音楽でつながろうプロジェクト 代表 坂本佐穂



スタッフ記念撮影

## ～音楽でつながろう 2012～みんなの校歌コンテスト

開催日：2012年12月9日(日)

会場：仙北市角館交流センター

主催：音楽でつながろうプロジェクト(代表・坂本佐穂)

### 【第1部】 みんなの校歌コンテスト

仙北市内の小・中・高等学校、またはすでに廃校となった学校の校歌を歌うコンテスト。子どものころに歌った記憶をたどって当時を思い出して懐かしんだり、歌われなくなってしまった校歌を後世に歌い継ぐために企画した。

出場はエントリーがあった10組のほか、特別参加の大曲養護学校と飛び入り2組の計13組が校歌を披露した。正調で見事な合唱のチームやアレンジを楽しむチームあり、語りを含めて学校への深い思いを語る人ありで、会場を沸かせた。

国民文化祭応援を視野に入れて、来年度は参加者や学校との協力体制をさらに強化し、継続したいと考えている。

### 【第2部】 音楽でつながろうコンサート

前座的に、地元でストリートダンスを習っている子どもたちのダンスを披露。ちびっこたちの激しくキレのあるダンスに観客も歓声をあげていた。

国民文化祭応援事業でもあったことから、同文化祭のテーマソングに関わる ha-j さん、藤田ゆうみん (Yumin Akita) さん、渡部絢也さんを迎えてコンサートを開催した。また、趣旨に賛同してくれた本城奈々さん、工藤慎太郎さんなども出演し、9名のアーティストによるコンサートを開催した。

コンサートの最後には、昨年のチャリティーコンサートでも好評を博した「あしたのうた」を全員で歌い、ステージの壁には新幹線に地域住民が沿線で手を振った「こまち 115・おかえりなさいプロジェクト」の映像を投影した。

### 【その他】

フードコート「音つなメシ」には8社が協力。仙北市の味を来場者に楽しんでもらうにぎわった。

会場内に上桧木内の紙風船の紙を設置し、来場者にメッセージや願い事を書いてもらった。2013年2月10日の紙風船上げ当日打ち上げられる予定。

角館高校生徒会と吹奏楽部のボランティアの協力が大きかった。ボランティア側、主催側とも、たくさん学ぶことができた。ボランティアの生徒が数年後には実行委員になっている可能性もあり、まちづくりを体感してもらうことができたと思う。

東洋文見聞の「一幻」は、千原しのぶの作で、シブシバル「米子カルーセル・ホテル」★の「モノ物語」が4月14日開幕した。来季3月中旬までのロングランで約300公演を予定している。ゴールデンウィーク最終日の5月6日までと計約8千人を動員し、滑り出しは好調だ。

西日本初地域文化庁の常設劇場として「県外に定着した」ものの、小・中・高の「県劇場」の運営を支える活のひとに、限内的な中高生を対象に「観劇料と交通費を補する」サポーター舞台芸術体験サポーターシステムがある。

同サポーターシステム支援会（日高三三会長）は、子どもの情操教育の場役立ててもらおうと2009年6月に設立。現在、法人174社、37団体、個人956人が会員となり、

幕末ガルの初回公演に合わせ、後援会設立50周年の記念シンポジウム「瀬戸内海文化を未来に担うもたち」が、開催された。後援会・坊っちゃん劇団・近畿大学瀬戸町で前原知事の加賀守行氏をコーディネーターに、小笠原一・文化庁長官、城崎・昭広・鳥取県知事、中村時広・愛媛県知事の3氏が登壇。同劇団の存在意義や、地域の文化を継承・発展させる「次世代教育」の重要性を訴えた。

的。ミュージカルは、今の70市町村それぞれの日本の歩むべき道、困難に独自の文化を持つ難を脱するために必要なものです。それぞれ文化政策、一人一人が何なすべきか重要なヒントを行政、県がサポート

大狸伝説の「証城寺の狸いばし」「分福茶釜」に五つの魅力を隠しています。つば自然その波種やかな紺筆の浮かぶ無数の墨々、自然の作り出す

城納 一昭氏



深み。瀬戸内海に  
に刻み込まれても  
の深み、水車の歴  
んだにこそある  
す。それを味わ

ーク大使もされてい  
が、島とが海とが瀬戸  
海は似ているのでは。  
近藤 ヨーロッパに  
く赴任していたので瀬  
戸内海と言えは、地中海  
と連想します。地中海は  
い歴史の中で東西の文化  
が交差し、知的・文化  
アイディアが生まれた。瀬  
戸内海も大阪、九州、大  
阪、岡山などの人々が  
易する中で、豊かな土  
性・文化を生み出した歴

故郷愛し誇り持とう

加戸名答顧問「霧末 薩摩で、そして伊予ガールは神戸から宇和島へ航路に見立てた舞台で、「坊っちゃん劇」

記念シンポジウム  
「瀬戸内海文化を未来に担う子どもたちへ」

中村知事 地域の魅力の柱は文化、伝統であり、それが地方アイデンティティーであり、個性。松山市の場合、こ  
だわったのが「坂の上の  
雲」でした。愛媛は、か  
私がこれまで関わ  
作品に「吾が輩は狸  
る」があります。日

て「誓いのコイ」では甲子の女性、今回の「霧未ガル」ではお女主人という南子を主人公にしています。地域の文化を愛するために、このようにミュージカルで取り上げようという考え

なぐ海道 世界

PR 中村氏

近藤 誠一 氏（文化庁長官）  
城納 一昭 氏（広島県副知事）  
中村 時広 氏（愛媛県知事）  
〈コーディネート〉  
加戸 守行 氏（子ども舞台芸術体験サポートシステム  
後援会・坊っちゃん劇場名誉顧問）

劇場で、子どもたちに文化に親しんでもらおうと、劇を食いしぼって活動しています。

近藤長旨 今の日本に一番必要なものは、東京ではなく地方が独自性を生かし、若い人たちが一緒に頑張って日本を引つ張

加戸氏 地

加戸 1999年  
まなみ海が開通し  
来、広島、愛媛間  
流会議と取り組  
なアマ、及び組  
ます。今後の両県  
表現、目の輝き  
来。その時の役者  
演された『鶴伝説  
は、3年前に広島  
は、劇場の作品に  
城納副知事 坊っ

域を結ぶ文化と

う生かす

A black and white illustration of a woman in a kimono, looking towards the viewer. In the background, a large ship is sailing on the sea under a full moon. The text 'イラスト 松本 零士' is visible in the upper right corner of the illustration.

日本初の産科女医への道究める—

開 幕

ミュージカル  
幕末ガール  
～ドクトル★おイネ物語～

坊っちゃん劇場

う素晴らしい場所を得た素晴らしい女性が日本や社会のために何が出来るかを、歴史上から学び、芸術からメッセージを得ることは大切で、経済的に劇場の運営は厳しいでしょうが、ずっと続けていってほしい。」

おみなさんは「歌作に準入る人」、「公的教育システムではなく、いわゆる私塾で学びました。これからの時代をどう生きるかを学ぶには、個人的に生に付き、人間性を磨く。点数を取っ掛かりで進学するための教育では十分です。時代が大きく変わる時、既の組織は役に立たなく、幕末に設立されて長州

加戸 シンボジウム  
テーマである瀬戸内  
日本最初の国立公園  
2年後には指定80周

豊かた  
城納氏 歴土

加戸 シンボジウム  
テーマである瀬戸内  
日本最初の国立公園  
2年後には指定80周

**芸術文化交流の  
文の舞台 心の温**

近いうち、島根県出身の小説家・戸内海の魅力を後世に伝えることではないかという思いが、明耀（めいひ）を地域として印象を抱いて

東日本大震災で東



「『舞ガール』とも、力強く、誇りを持って生きている女性に焦点を当て、演出している坊ちゃん劇に何かの共通した想いを感じています。心の大切さをもっと生かしていかねばならない時代であって、こうしたストーリーで演出されているのは素晴らしい。坊ちゃん劇場は、愛媛の宝、末長く育っていただきたいと願っています。」

**要路** 近藤氏

**かさが宝**

魅力であり、宝ではないと思うか。

中村 私は瀬戸内海に

陸路は自由に行き来しては船と橋がなければなりませんので、ますます島にしたい。私が松山出身でいた時、中島島合併に際し「松山と島」を計画しました。に行けば行くほど、島の人はのびのびあまじり気づいていないから。イベントの人々がかかる気になったところで、それを開展開し、島の文化を大きな自信が備わり愛媛にはたまたまある。この経験から、「大(だい)・賢(けん)・開(かい)を描く」す。広島にも「瀬戸海の道標想」がある。県の方性が、致

で、そのメカニクス。そのメカニクスが世界のアマチュアサイクリストを呼び、しなみ海道をアのマチュアサイクリストの聖地とした。地元の人の盛りだかりを受け、行政がサポートするというスタイルで実現したという。

城瀬 広島県は「瀬戸内海の理想」を策定しました。それは瀬戸内の魅力を「文化、リゾート化していく」と狙っています。瀬戸内海に面している各関係機関と協力し、日本のみなす「世界に瀬戸内海を売出す」というものですね。例えば、カキのおいしさをPRする「オイスターロード」。

広島 尾道、呉、三原の力キ小島、宍戸の力キ小島は、宍戸市の力キ小島で多い日は一日

取り組むに感謝

加戸 私たちは11の大震災を体験

来地域と地域と

の価値が、人と

結絆と同様に太

る見直ししました

ち瀬戸内の文化

来を担う子ども

どのように生かす

城瀬 時代を担

もちが活躍する

グローバルな世界

一方で、故郷を愛

に、心の糧として

を築いてほしいと

です。宮島の敵い

で歴史的人物の苦

の、原爆の

公園では戦争を繰

てならないと後世

美文化を生かした活劇、文化を背景とした人情物、政治的題材、社会問題、活劇、恋愛、冒険、戦争、歴史、科学、SF、ファンタジー、ミステリー、スポーツ、音楽、児童、その他、など、あらゆるジャンルにわたる作品が、この映画祭に出品される。また、この映画祭は、映画の芸術性、技術性、商業性、社会性、政治性、経済性、文化性、教育性、娯楽性、など、あらゆる側面から、映画の魅力を、観客に伝えることを目的としている。この映画祭は、映画の芸術性、技術性、商業性、社会性、政治性、経済性、文化性、教育性、娯楽性、など、あらゆる側面から、映画の魅力を、観客に伝えることを目的としている。

に生まれたイネは幼くして「自分は僧と同じではない」と悟る。「誰の世話にもならず生きてやる」と学問の道を目指し、長崎を出て四国伊予の卯之町（西予市）で蘭方（らんぽう）医を学んでいた父の弟子・二富敬作の元へ。出産で命を落とす女たちの苦

『幕末ガール』  
しみを前に「母子を助けたい！」  
と産科女医への道を歩み出す。  
大きく立ちほだかる幕末の時代  
の壁を突き破って、日本初の産科  
女医の道を究めていくイネの人生  
を、船旅の事件に立ち向かう老い  
たイネの人生と重ねて、パワフル  
に描く。



戸内海を訪れたドイツ人、世界に類まれなまなみ海道には世界一の技術と豊饒が共る。瀬戸内海の魅力と城納 私は広島県

のてつとも温かい人々の生活の営みが息づく、歴史の舞台があり、時には戦いの場であり、交流の文化である。地域に多々の遺産、伝統芸能が育ってきまし。この歴史営みを守っていくことも頼も代えられない瀬戸

のに。意本丰上ぎ



加戸 守行氏

つています。サイクリングロードもぜひやりたいプロジェクトです。

加戸 同僚の連携について近隣長官の感想は、近藤 両官の話を聞いていて、うれしかった点が二つありました。一つは、広島、愛媛を走る

盗ん  
親し  
いの  
主の  
を開  
る世  
戸内  
起

劇した子どもが大人に  
りミュージカルに親し  
よようになった。『坊っ  
やん劇場』も愛媛の子  
もたちに舞台芸術に触  
る重要な役割を果たし  
いてほしい。

坊っちゃん劇場 子ども舞台芸術体験サポートシステム



# 小玉暁村 没後70年 記念シンポジウム

## ◆基調報告

「小玉暁村の人生と業績  
—仙北歌謡団の活動を中心に—  
小田島清朗(民族芸術研究所所長)

## ◆発言

千葉美子(民謡歌手)  
根岸正幸(飾山囃子奏者)  
工藤一紘(秋田市民謡連盟役員)  
麻生正秋(民謡研究家)



千葉美子

## ◆討論

コーディネーター  
茶谷十六(民族芸術研究所理事)

## ◆芸能実演

飾山囃子・仙北民謡(千葉美子)



日時

2012年12月2日(日)

午後1時～4時30分 [12時30分 受付開始]

会場

温泉ゆぽぽ 本館「紫苑」

仙北市田沢湖／たざわこ芸術村

入場無料 定員200名  
※当日先着順

終了後、懇親会あり(会費3000円)

懇親会参加ご希望の方は、11月26日(月)まで  
右記事務局へお申込み下さい。



昭和七(一九三二)年、  
民謡と芸能の研究者だった小玉暁村が、  
仙北の一流の芸人歌い手を集めて結成した「仙北歌謡団」は、  
たちまち秋田を代表する芸能団体に。  
この活動により仙北民謡の数々が全国に名を馳せ、  
仙北は「民謡の宝庫」と称されました。  
その中心にあつた暁村が、考え、実践したことは――

秋田民謡育ての親、小玉暁村。  
その仕事がいま、問いかけるもの――

主催／仙北市伝統文化活性化委員会  
共催／仙北市・仙北市教育委員会  
後援／秋田県教育委員会・秋田魁新報社  
NHK秋田放送局・ABS秋田放送  
AKT秋田テレビ・AAB秋田朝日放送  
角館のお祭り保存会・ルネッサンス角館  
中川地域運営体

事務局／一般財団法人 民族芸術研究所

〒014-1192

仙北市田沢湖卒田字早稲田430 たざわこ芸術村

TEL・FAX 0187(44) 3903

E-mail: odashima@hana.or.jp





## こ だま ぎょう せん 小玉暁村について

民謡研究家・武田忠一郎は『東北民謡集 秋田県』（昭和32年・日本放送出版協会）の解説で、暁村についてこう記しています。

「後藤桃水は宮城県民謡の、成田雲竹は津軽民謡の育ての親ならば、小玉暁村氏は秋田民謡の育ての親として並べらるべき人である。秋田民謡の聖地は何といっても仙北で、仙北の民謡を掘り出して世に紹介し、今日あらしめた人は小玉氏であった。勿論、佐藤貞子さんのように秋田民謡をひろめた人もいるけれどもそれは舞台芸人としてであって、流石（さすが）に民謡の位置を高めたのは小玉氏の力である」

小玉暁村（本名・久蔵）は明治14（1881）年、仙北郡中川村（現仙北市角館町）生まれ。角館尋常高等小学校を卒業した後、独学で教員試験に合格。仙北郡内の教員を50歳まで務めます。その傍ら、俳句に取り組み、赴任先の各地で青年たちを集め、俳句の会をつくっていきます。同時に、民謡や芸能にも関心を持ち、「おぼこ節」や「角館の祭り山囃子」等の調査研究を進めていき、やがて郷土の芸能団体にも関わっていきます（ちなみに角館の祭り囃子を「飾山囃子」（おやまばやし）と名づけたのは暁村です）。

33年間にわたる教員生活を終えて間もなくの昭和7（1932）年春、暁村は中川歌踊団を結成。その年の秋、県が「秋田郷土芸術協会」を組織すると、いち早くそれに応え、郡内の芸人を集めた「仙北歌踊団（せんほくかようだん）」に改組。旺盛な活動を開始します。

仙北歌踊団で暁村が行なった主なことは

- 数々の埋もれた民謡の発掘と研究
- それらを普及（そのために黒沢三一という名歌手の指導育成、若い踊り手たちの養成）
- 野から生れた民謡が多くの人々の歌になるよう、元歌の心を大切にしながらの一定の創作（「長者の山」「生保内節」等々）

生命力ある高い水準の演奏は評判を呼び、仙北歌踊団は短期間のうちに秋田県を代表する芸能団体になり、日本でもトップクラスの団体として多彩な活動を展開していきます。

小玉暁村は昭和17（1942）年、60歳で亡くなりますが、この10年余が仙北の民謡・芸能の位置を不動のものにしました。暁村と黒沢三一のコンビが世に押し出した「生保内節」「ひでこ節」「長者の山」「秋田飴売り節」「姉こもさ」「ドンパン節」「タント節」等々は広く歌い継がれ、今日もとも知られる秋田民謡となっています。

\*著書に「郷土芸術往来」（『秋田郷土叢話』所収・昭和9年）『秋田郷土芸術』（同9年）があり。

## 秋田民謡育ての親

小玉曉村没後70年に寄せて

小田島清朗



おだしま・せいろう 50  
年生まれ。仙北市伝統文化  
活性化委員会事務局長。民  
族芸術研究所所長。仙北市。

今年是小玉曉村<sup>こぎよみよ</sup>の没後70年に  
当たる。曉村<sup>きよむら</sup>といっても今はほ  
んど忘れられているが、大正  
半ばから昭和初期、本県初の本  
格的な民謡・芸能研究者として  
活躍したばかりでなく、33年間  
の教職を終えた後は、自ら「仙  
北歌踊団」という芸能団を組織  
し、全国有数の活動を展開して  
仙北歌踊を発展させた、秋田の  
民謡・芸能の歴史上、特記すべ  
き人物である。

であった」（日本放送出版協会  
『東北民謡集 秋田県』解説よ  
り）

小玉曉村（本名・久蔵）は1  
881（明治14）年、仙北郡中  
川村（現仙北市角館町）に農家  
の長男として生まれた。角館尋  
常高等小学校を卒業した後、独  
学で教員試験に合格。以降、仙  
北郡内の教員を50歳まで務める  
（30代後半からは校長に）。

東北各地の民謡をくまなく踏  
査し、大著『東北民謡集』全6  
巻を著した民謡研究家・武田忠  
一郎は曉村について述べてい  
る。「後藤桃水は宮城県民謡の  
成田雲竹は津軽民謡の育ての  
親ならば、小玉曉村氏は秋田  
民謡の育ての親として並べら  
るべき人である。秋田民謡の聖  
地は何といっても仙北で、仙北  
の民謡を掘り出して世に紹介  
し、今日あらしめた人は小玉氏

教職の傍ら、曉村は赴任先の  
各地で青年たちを集め、俳句の  
会をつくっていく。五七五の定  
型ではなく自由律だった。主な  
作品は「土の吐く香のなつかし

く歎をふるひけり」「泉こん  
ん地底の音に口づくる」。

同時に民謡にも強い関心を持  
って研究を進め、特に「おぼこ  
節」ではその発祥について大  
正年間、秋田魁新報紙上で論争  
を起こしていく。県教育委員会  
編『秋田県の民謡』（1988  
年発行）では、「科学的学究肌  
の一面を持つ秋田民謡研究の  
草分け」と曉村を位置付けてい  
る。

昭和初期には地元中川村の田  
口織之助<sup>おりむけ</sup>一行の東京・日本青年  
館での飾山囃子<sup>かざりやまばやし</sup>上演を実現させ  
る上で大いに尽力（初の東京公  
演では喝采を浴び、一躍飾山囃  
子の名が知れ渡った）。また、  
それがきっかけで織之助一行に  
関わるようになり、公演にも参  
加。曲目を解説する校長先生の  
名調子が評判を呼んだ。

そして教職を終えた後の19  
32（昭和7）年秋、自ら仙北  
の一流の芸人を組織し、「仙北  
歌踊団」と銘打って郡内外で華  
々しい活動を展開していく。

42（同17）年曉村は60歳で没  
し、仙北歌踊団は10年で活動を  
終えるが、この期間で仙北の歌  
踊を大きく発展させ、不動のも  
のとしたのである。

た歌が多数あるために自然と有  
名になったと思っていた。だが、  
どうもそれだけではないよう  
だ。

仙北歌踊団の名歌手・黒沢三  
一の代表曲とされている「生保  
内節」は、もともと地元に伝  
わる複雑なリズム・旋律で曲調  
も地味だった。それを曉村が現  
行の歌に編曲したのである。「長  
者の山」も「ドンパン節」もし  
かり。曉村はオルガンを弾きな  
がら三一の歌の指導をしたとい  
う。すなわち三一が歌い世に広  
めた仙北民謡は、多かれ少なか  
れ曉村の手が入っているとみて  
間違いない。

だからこそ、あか抜けて美し  
く、誰もが口ずさみたくなる名  
曲となつて、現在も日本中で歌  
われているのである。仙北の中  
でも角館周辺の北浦と呼ばれる  
限られた地域の歌が10曲余り全  
国的に有名になっているが、そ  
んな例は日本中探してもどこに  
もないのである。

なぜ曉村は曲の改変に取り組  
んだのだろうか。

曉村は仙北の民謡研究の小論  
文を多数著し仙北民謡の特長な  
ど情熱を込めて記しているが、  
編曲については触れていない。  
解明の鍵は、31（同6）年春、  
曉村が寺田啄味の筆名で秋田魁  
新報に書いた「民謡私論」にあ  
ると思える。

小玉曉村没後70年記念シンポ  
ジウム（仙北市伝統文化活性化  
委員会主催）が12月2日午後1  
時〜4時半、同市のたさわこ芸  
術村・温泉ゆぽぼで開かれる。  
入場無料。



小玉曉村

といわれ、優れ

これまで、  
現在知られる秋  
田民謡の多くは  
仙北地方の民謡  
だが、それは仙  
北が民謡の宝庫  
といわれ、優れ



# 創造都市 政策セミナー

in  
鶴岡

●日時

9.21<sup>金</sup> / 9.22<sup>土</sup> 秋分の日  
14:00～17:30 (開場 13:30)      9:30～11:40 (開場 9:00)

●主会場 **マリカ市民ホール** (山形県鶴岡市末広町3-1)

●テーマ

## 「震災復興と文化芸術」

●9月21日[金]  
**シンポジウム** 定員150名(先着順)

報告1 「アーツエイド東北の実践から」

志賀野 桂一氏 [アーツエイド東北代表理事、東北文化学園大学教授]

報告2 「岩手県大槌町の取組みから(仮)」

佐々木 健氏 [大槌町生涯学習課長・図書館長]

報告3 「震災復興と食文化創造都市」

奥田 政行氏 [「食の都庄内」親善大使、アル・ケッチャーノ オーナーシェフ]

討論 モデレーター・是永 幹夫氏 [わらび座相談役]

●9月22日[土] 秋分の日  
**創造都市入門セミナー** 各20名(先着順)

①基礎理論講座 講師：後藤 和子氏 [埼玉大学教授]

②政策の評価指標 講師：佐々木 雅幸氏 [大阪市立大学教授]

主催 文化庁・NPO 法人都市文化創造機構  
共催 鶴岡市・鶴岡食文化創造都市推進協議会  
協力 大阪市立大学都市研究プラザ



**入場無料**

参加にはお申し込みが  
必要です  
裏面をご覧ください

●期日 **9.21金** / **9.22土** 秋分の日 ●主会場 **マリカ市民ホール**(山形県鶴岡市末広町3-1) ●時 間 9月21日[金] ●14:00～17:30(開場13:30) / 9月22日[土] ●9:30～11:40(開場9:00)

9月21日[金]

定員 150名(先着順)

シンポジウム

## 「震災復興と文化芸術」

14:00～14:15 **ご挨拶** 近藤 誠一氏[文化庁長官]  
榎本 政規氏[鶴岡市長]

14:15～14:45

**報告1「アーツエイド東北の実践から」**

志賀野 桂一氏[アーツエイド東北代表理事、東北文化学園大学教授]

14:45～15:15

**報告2「岩手県大槌町の取組みから(仮)」**

佐々木 健氏[大槌町生涯学習課長・図書館長]

15:15～15:45

**報告3「震災復興と食文化創造都市」**

奥田 政行氏[「食の都庄内」親善大使、アル・ケッチャーノ オーナーシェフ]

15:45～16:00 休 憩

16:00～17:15

**討 論** モデレーター・是永 幹夫氏[わらび座相談役]

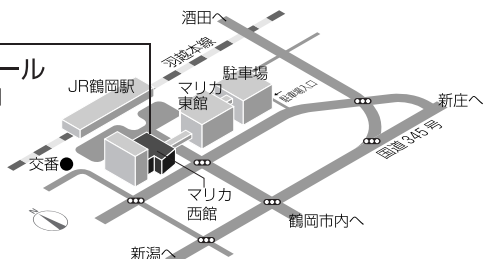
17:15～17:30 **まとめ**

### 創造都市政策セミナー懇親会

- 日 時 9月21日[金] 18:00～19:30
- 場 所 マリカ市民ホール 大会議室
- 懇親会費 当日、実費(2,000円程度)を申し受けます。

### 会場案内図

マリカ市民ホール  
[マリカ西館3階]



9月22日[土・秋分の日]

定員 各20名(先着順)

9:30～11:30

①または②のいずれかを選択

## 創造都市入門セミナー

①基礎理論講座 講師: 後藤 和子氏[埼玉大学教授]

②政策の評価指標 講師: 佐々木 雅幸氏[大阪市立大学教授]

11:30～11:40 **閉会あいさつ**

### 連携開催 こちらにもご参加ください

出羽からの祈りと再生 平成24年度 文化庁 文化芸術振興補助金事業

## われここいま、東北の魂と

主催●出羽庄内地域文化遺産による地域活性化実行委員会

日時●9月22日[土]～24日[月] 13:30～

会場●いでは文化記念館・酒田市公益研修センター

【学び】9月22日[土] 13:30～ いでは文化記念館

■基調講演「東北の文化から考える、祈りと再生」

山折 哲雄氏[宗教学者]

■パネルディスカッション コーディネーター: 是永 幹夫氏

9月23日[日] 9:00～ いでは文化記念館

■I. 出羽三山を中心とした文化財と精神文化

■II. 旧庄内藩校致道館と徂徠学

9月23日[日] 9:00～ 酒田市公益研修センター

■III. 北前船交易による酒田の湊町文化

【祈り】9月22日[土] 16:30～ 出羽三山神社・蜂子神社

■黒川能、高寺八講

9月23日[日] 10:45～ 酒田市公益研修センター

■黒森歌舞伎、藤岡延年

9月23日[日] 14:00～ 羽黒山五重塔

■創作番楽と月山交響曲 森 繁哉/岡野 弘幹

【巡る】文化財探訪コース

■出羽三山コース ■鶴岡城下町コース ■酒田湊町コース

詳細はウェブで <http://shonai-bunka.jp>

お申し込み方法 下記のフォームにて FAX かメールでお申込ください。

●受付期間 9月18日[火] まで

●申込・問合せ先 鶴岡市企画部 政策推進課(食文化創造都市推進担当)

FAX.0235-25-2990 TEL.0235-25-2111(内線527)

Eメール [seisakusuishin@city.tsuruoka.lg.jp](mailto:seisakusuishin@city.tsuruoka.lg.jp)

※Eメールでお申し込みの方は下記フォームの記載内容を入力の上送信して下さい。

### 申込フォーム

●ご氏名 [ふりがな]

●Eメール

@

●ご所属 ●名 称

●役 職

●ご連絡先 TEL

●分野 ☐行政・行政関連法人 ☐企業 ☐まちづくり団体 ☐文化・芸術(関連)団体

☐文化・芸術施設 ☐教育・研究機関 ☐学生 ☐メディア関係 ☐その他( )

セミナー参加者名簿(当日会場配布)にご氏名とご所属先を記載してもかまいませんか? 可 不可

●参加希望の  
項目に○印を  
つけて下さい。

21日 午後 ☐シンポジウム「震災復興と文化芸術」 21日 夕方 ☐懇親会

22日 午前 創造都市入門セミナー ☐①基礎理論講座 ☐②政策の評価指標 ①または②のいずれかを選択





出羽からの祈りと再生



# われここいま、東北の魂と



古来より自然の中に神を見だし  
祈りの対象としてきた東北人の精神性。

大いなる自然の中で私たちは生かされ  
豊かな恵みを祈り感謝しながら  
幾度となく厳しい試練をも乗り越えてきました。

東日本大震災を経た今、  
東北の魂が秘められた独自の文化や伝統芸能を  
改めて学び、身近に感じることで見えてくる  
東北再生、日本再生の未来——。

开



2012 9/22 (土) - 9/24 (月)

シンポジウム  
伝統芸能

入場無料 (要申込)

(歓迎レセプション・探訪ツアーは有料)

会場： **A** いでは文化記念館  
(山形県鶴岡市羽黒)

**B** 酒田市公益研修センター  
(山形県酒田市)

東北は古くから自然との共生を基軸に独自の文化を築いてきた。今回の未曾有の大震災を経て、改めて東北独自の文化、伝統芸能など、東北が本来持っているその意義や価値を探る。

9/22(土) 13:30- **A** いでは文化記念館

①

## ■基調講演

### 「東北の文化から考える、祈りと再生」(仮題)

講師：山折 哲雄

Yamaori Tetsuo

・宗教学者  
・国際日本文化研究センター名誉教授(元所長)



## ■パネルディスカッション

パネリスト

山折 哲雄

Yamaori Tetsuo

・宗教学者  
・国際日本文化研究センター名誉教授(元所長)



パネリスト

赤坂 憲雄

Akasaka Norio

・学習院大学教授  
・前東北文化研究センター所長



パネリスト

佐高 信

Sataka Makoto

・評論家



パネリスト

椎川 忍

Shiikawa Shinobu

・総務省自治財政局長  
・前総務省地域力創造審議官



パネリスト

千歳 栄

Chitose Sakae

・東北芸術工科大学  
東北文化研究センター運営委員長



コーディネーター

是永 幹夫

Korenaga Mikio

・(株)わらび座 相談役  
・大分市複合文化交流施設「ホルトホール大分」  
開設準備室・統括責任者



出羽は東北の一地方としての「出羽文化」、庄内藩主酒井家を通じての「江戸文化」、北前船交易による「上方文化」と、三つの文化の潮目の地である。有形・無形文化財を通して、その文化に触れる。

9/23(日) 9:00 - **A** いでは文化記念館

②

## I. 出羽三山を中心とした文化財と精神文化

出羽三山周辺には多くの有形・無形文化財があり、その背景には自然を尊び、共生してきた独自の精神文化がある。伝統芸能はじめ、地域文化の意義・真価を探る。

パネリスト

神田より子 民俗学者、敬和学園大学教授

岩鼻 通明 文化地理学者、山形大学教授

春山 進 元山形県立博物館長

コーディネーター

星野 文紘 出羽商工会観光力研究会長

## II. 旧庄内藩校致道館と徂徠学

旧藩校「致道館」では今も「庄内論語」の素読が行われている。徂徠学を教学とし「個性伸長」「自学自習」の特色を持つ旧藩校の意義・真価を探る。

パネリスト

松村 宏 慶応義塾大学 名誉教授

富樫 恒文 鶴岡市 文化財保護指導員

細井 功 致道館文化振興会議 会長

植松 芳平 生涯学習施設 里仁館 常任理事

コーディネーター

犬塚 幹士 致道博物館 理事

9/23(日) 9:00 - **B** 酒田市公益研修センター

③

## III. 北前船交易による酒田の湊町文化

湊町酒田には、「旧鍛屋」や「本問家日本邸」など湊町文化を伝える文化財が数多く残されている。北前船交易による上方文化の移入と併せ、その意義・真価を探る。

パネリスト

佐高 信 評論家

土岐田正勝 東北公益文科大学 非常勤講師

小山 恵子 NPO 法人酒田港女みなと会議 理事長、  
山形県建築士会 常務理事

コーディネーター

高橋 英彦 東北公益文科大学 名誉教授

# 「自然」や「伝統芸能」 生かし東北復興を



創造都市は、文化芸術の創造性を都市の活力や経済につなげていくという。セミナーは創造都市を目指す全国の都市ネットワークを構築しようとする2009年度から大阪市、横浜市、浜松市で開き、今回が4回目。

鶴岡市は「食文化」に関する取り組みで昨年度、文化庁長官表彰(文化芸術創造都市部門)を受けた経緯などから誘致。北海道から沖縄県まで全国15自治体の関係者約100人が参加した。

21日のシンポジウムでは、はじめに、淡水魚の保全などを通じて「郷土力」を育成している岩手県大槌町生涯学習課長の

佐々木健さん、被災したアーティストらを支援している一般社団法人アーツエイド東北代表理事で東北文化学園大教授の志賀野桂一さんら3人が報告。「文化は金にならない」とよく言われるが、そうか。出羽三山も文化を見に来るのでは」(佐々木さん)、「東北では生活と郷土芸能が一体化している。コミュニティが復興しないと祭りを継承できない。祭りの復興は東北の復興そのもの」(志賀野さん)など語った。

これらに対し、近藤誠一文化庁長官は「文化芸術が素晴らしい力を持っていること、人間の生きる力が地元の自然から湧き上がってくること、固定観念にとらわれず発想転換することが重要と感じた」と感想を述べた。

続くパネルディスカッションでは、佐々木さん、志賀野さん、出羽庄内地域デザインの小林好雄社長のパネリスト3人が、劇団わらび座(秋田県)の是永幹夫相談役の進行で意見交換。「自然崇拜など東北にしかない文化の価値があり、自ら発信することが大事」(小林さん)、「震災後、平和とは何かをよく考える。命が助かるだけでなく、助かった命を明日にどう生かすかが重要。今日より明日は良くなる」と保証されるのが平和ではないか。人間は悲しみ、苦しむ。それでもくじけないことが大事」(佐々木さん)といった話が出た。

シンポジウムに参加自治体などで会合を開き、来年1月にも関係都市のネットワーク組織を立ち上げると、本雅幸さんの2人が講話した。

シンポジウム  
パネル討論

## 鶴岡で創造都市政策セミナー 全国15自治体関係者集う

文化庁とNPO法人都市文化創造機構(事務所・大阪市)による「創造都市政策セミナーin鶴岡」が21、22の両日、鶴岡市のマリカ市民ホールで開かれた。「震災復興と文化芸術」をテーマにしたシンポジウムなどを通じ、自然や伝統芸能を生かした東北地方の復興などについて考えた。

鶴岡市は「食文化」に関する取り組みで昨年度、文化庁長官表彰(文化芸術創造都市部門)を受けた経緯などから誘致。北海道から沖縄県まで全国15自治体の関係者約100人が参加した。

21日のシンポジウムでは、はじめに、淡水魚の保全などを通じて「郷土力」を育成している岩手県大槌町生涯学習課長の

佐々木健さん、被災したアーティストらを支援している一般社団法人アーツエイド東北代表理事で東北文化学園大教授の志賀野桂一さんら3人が報告。「文化は金にならない」とよく言われるが、そうか。出羽三山も文化を見に来るのでは」(佐々木さん)、「東北では生活と郷土芸能が一体化している。コミュニティが復興しないと祭りを継承できない。祭りの復興は東北の復興そのもの」(志賀野さん)など語った。

これらに対し、近藤誠一文化庁長官は「文化芸術が素晴らしい力を持っていること、人間の生きる力が地元の自然から湧き上がってくること、固定観念にとらわれず発想転換することが重要と感じた」と感想を述べた。

## 羽黒山「出羽からの祈りと再生」参加者の声

22日午後1時半から鶴岡市羽黒町手向の「いでは文化記念館」で、シンポジウム「東北の文化から考える、祈りと再生」が開催されたので参加した。

基調講演は宗教学者山折哲雄氏。

縄文文化、稲作文化の基層の上に、近代主義という上部構造の三層構造があり、その近代主義が破綻して、脱近代化が模索されている。東北地方は、盆地的景観、美しい自然、山、川、海のなかから時代を拓く魂が生まれた。それは、宮沢賢治、石川啄木、斎藤茂吉、そして棟方志功などである。3.11 大震災以後は災間の期間である。上滑りの「絆」ではなく、生きる者と死者との「絆」がまだ確立されていない。

引き続いて、パネルディスカッションでは、基調講演の山折哲雄氏、佐高信氏(評論家)、椎川忍氏(前総務省審議官)、千歳栄氏(東北芸術工科大学)、コーディネーターは是永幹夫氏(わらび座相談役)が、山折氏の基調講演についてのコメント、3.11 震災後の東北復興、出羽庄内からの文化発信などについて 90分間の意見交換がおこなわれた。

それが終わって羽黒山神社にのぼり、午後4時半から蜂子神社で、薪が焚かれて、羽黒地区高寺集落の「高寺八講」の舞、櫛引地区の黒川能が披露された。それが終わると、午後6時半から、齊館で、基調講演の講師・パネリストを囲んでの夕食会、そして二次会にも参加して、齊館に宿泊した。夕食会では、羽黒山先達星野氏の指名で岡野弘幹氏のインディアンフルートの即興演奏がおこなわれるハプニングもあった。アメリカ・インディアンのフルート演奏は日本古来の伝統音楽のようで、まったく違和感がないすばらしい音色だった。

今朝は五時過ぎに起床、まだ静かで誰も来ていない羽黒山神社の境内を散歩した。合神殿の扉が開いたのが午前6時。そのとき、秋田から来たという一人の参拝者が早速参拝して、足早に石段の参道を麓へ下っていった。

出羽三山は明治維新後の廃仏毀釈で神社となったが、いまだに神仏習合が残っている全国でも希な場所である。

秋の峰入りが終わり、登山シーズンもそろそろ終わり、静寂を取り戻してきた。

# 関連事業

1. 特別展「川端龍子展」（3館合同）
2. 福島支援特別展「福島の作家展」
3. 中国甘肅省「蘭州歌舞劇院」仙北市公演
4. U S A 高校生国際修学旅行  
    －仙北市伝統文化・農村文化体験交流－
5. 元気してらがフェスティバル
6. その他





米倉 兌  
よね くら とおる  
＜1913－2000＞

## ■ 画歴

- 1913 福島市で誕生。小学校は京都、中学校は東京で就学
- 1932 仙台商業学校卒業。神戸洋画研究所に入門、二科会員  
浜田葆光に師事、併せて水彩画を日本水彩画会・一水  
会員別車博資に学ぶ
- 1934～'42 二科展連続入選
- 1940 文部省皇紀二千六百年奉祝展招待出品、神戸市で個展、  
神戸在住中は日本水彩画展全関西展にも出品
- 1945 終戦後、福島市に移住
- 1945～'67 福島市で油絵個展
- 1946 福島県美術協会会員
- 1947 福島市でマルス洋画倶楽部設立同人
- 1948 福島県新美術連盟創立会員
- 1948～'51 福島県総合美術展覧会（県展）審査員
- 1947～'72 福島県立高校美術教師
- 1967 福島市で初の水墨展「寒山拾得絵巻」
- 1968 福島県保原町（現・伊達市）長谷寺一切経蔵内油絵壁  
画釋迦に着手～'72年完成
- 1972 訪欧美術調査団に参加
- 1972～'92 三越日本橋本店・札幌・仙台・新潟・新宿・池  
袋・横浜・名古屋・大阪・松山・鹿児島各店で「草枕」  
「奥の細道」「山湯去来」「相馬野馬追」「陸奥山河」  
「羽越有情」「京第一輯」「南船北馬」「応仁の乱」  
「四季折々」などの墨彩展
- 1975～'91 福島テレビF T V学苑水墨画講座講師
- 1981・'82 訪中し取材
- 1982 福島県保原町（現・伊達市）で「米倉兌墨彩展」
- 1986 山形県尾花沢市 芭蕉・清風歴史資料館で「おくの細道  
米倉兌墨彩展」
- 1990 銀座和光で「ともに生きるなかまたち」墨彩展
- 2000 福島市において87歳で死去



春日若宮／四季折々



廣長 威彦  
ひろ なが たけ ひこ  
＜1935－＞

## ■ 画歴

- 1935 福島県郡山市生まれ。現在も居住
- 1954 東京・佐藤泰治画伯に会い、以後油彩画の影響を受ける
- 1954 日本大学東北工業高校（現・日大東北高校）卒業
- 1954～'74 郡山市内を20年間スケッチする
- 1958～'72 全国の洋風建築を写生する
- 1960 合掌造り写生を機に全国の民家写生行脚
- 1972 版画「三春シリーズ」制作発表
- 1982 角館スケッチと版画制作／公民館にて展示
- 1983 東北の民家百展／宮城・仙台県民ギャラリー
- 1984～'88 「雪国の民家」「民家往来」「民家余情」版画展  
／横浜三越
- 1986 ふるさとの民家百展／東京・銀座・三菱電機銀座スカ  
イリング
- 1987 集落と町並み百展／福島・郡山市民文化センター
- 1994 民家との出会い35年展／福島・中台
- 1995 白川郷・越中五箇山合掌民家スケッチ展／岐阜・白川  
郷ふるさと体験館
- 1995 日本の町並みと集落再見展／東京・新宿・東京ガスシ  
ョールーム
- 1996 郡山・消えた町並みと風景展／郡山・富や蔵
- 1999 合掌民家への想い展／岐阜・白川郷民家園
- 2000 やすらぎの家並みを描く展／横浜・岩崎ミュージアム
- 2000 日本・名残りの家並み展／仙北・平福記念美術館
- 2001 日本・農村集落の原風景展／福島・本宮・白沢ふれあ  
い文化ホール
- 2002 智頭宿と周辺街道の家並み展／鳥取ごうぎんギャラリ  
ー
- 2003 岩野市兵衛＋廣長威彦・版画・民家風土記展／福井・  
越前・卯立の工芸館
- 2003 民家風土記展／福島・郡山市民ふれあいプラザ
- 2007 郡山近在・日本一の農村風土景を描く展／郡山・県農  
業総合センター
- 2011 「原点回帰1960－2011」油彩画展／郡山市民ふれあ  
いプラザ

＜無所属＞



大宇陀（1）／奈良

＜大英博物館所蔵＞



戦いのあと——相馬野馬追 米倉 兌

墨彩 ■ ともに生きるいのちたち

# 福島人 米倉 兌・廣長威彦 展



版画 ■ 待春／会津西街道大内宿 廣長威彦

■ 風土の家並みを描いて——50年

主 催 仙北市 仙北市教育委員会

協 力 ルネッサンス・角館

後 援 秋田魁新報社 朝日新聞秋田総局 毎日新聞秋田支局 読売新聞秋田支局  
産経新聞社秋田支局 日本経済新聞社秋田支局 河北新報社 福島民報社  
福島民友新聞社 いわき民報社 ABS秋田放送 AKT秋田テレビ  
AAB秋田朝日放送 エフエム秋田 福島テレビ 福島中央テレビ 福島放送  
テレビユー福島

【入館料】一般（高校生以上）300円（中学生以下無料）※20名以上は団体割引有

2012 6月30日(土)－9月10日(月)

開館時間 午前9時－午後5時（入館は午後4時30分まで）

仙北市立 角館町平福 記念美術館

秋田県仙北市角館町表町上丁4-4 TEL 0187-54-3888

トーク・絆 「画家が語る作品の周辺」

廣長威彦氏・米倉みなと氏（司会進行：ルネッサンス・角館）  
6月30日（土）午後1時30分～ 会場：角館町平福記念美術館カルチャールーム





## ごあいさつ

平成23年3月11日に発生した東日本大震災。宮城県、福島県、岩手県を中心にたくさんの方達が被災されました。その日から1年以上の月日が経過しましたが、現在もなお復興に向けて日本全体が戦い続けています。

このような状況の中で、仙北市として少しでも東北が元気になるようなお手伝いが出来ればと考えました。平福記念美術館では、これまで地元秋田の作家を中心にした展覧会を多く開催してきましたが、平成12年に福島県出身の画家・廣長威彦先生（1935～）の展覧会を開催したこともあり、今回、廣長先生のご協力をいただき、先生と親交のあった故米倉兌先生（1913～

## 幸せなうきくさ

## 米倉みなと

父・米倉兌は官吏だった祖父とともに各地を転々としながら育ったようで、学校も京都、東京、仙台と北上。でも幼い頃の写真は生後45日目と仙台商業の卒業アルバムくらい、少年時代を知るすべがありません。賞といえば皆勤賞だけだったらしいことのみ、色あせた賞状が教えてくれます。

絵描きの道を選び、結婚もし、こどもも生まれた神戸から、ふるさと福島へ父が戻ったのは戦後間もない頃。福島でも画壇のメンバーに加わり東京の公募展に出品したりもしていましたが、群れから離れるようにいずれからも遠ざかってしまいました。

もし戦争などなく、神戸で画家まっしぐらの道であつたら、それも幸せな人生だったでしょう。でも誰も逃れえなかった時代の回り舞台。父は高校教師というもうひとつの道も選びました。横道、脇道、遠い道、歩みは遅れ、時に疲れ、けれど小さな道草にも多くの恵みを受け、これもまた幸せな人生であったと思います。

親子ほど年の違う「廣長くん」を知り、多くの出会いへと誘っていただけたのも恵みのひとつ。群れず媚びず阿らず、胸にあふれるものを描く生きかたにも、父は共鳴していたのでしょう。

父が定年を待たずに退職し「退職金の額が大違い」と母を嘆かせたのは1972年。その春、知人の結婚式で上京した両親と上野、浅草、そして日本橋三越アネックスへ。「こんな画廊で個展できたらなあ！」と言った時、父の人生の回り舞台がまた回転したのか、その年から三越本店・各店などでの墨彩展が約20年続きました。

しかし、母が病み、取材に出ることが叶わず、個展は継続できないまま、先に旅立った妻を追うように2000年、87歳で死去。



灯／草枕

戒名は〈龍雲院夏山萍水居士〉  
「兌という字は戒名にしにくい、他にご本人にふさわしい字は？」ご住職がそう仰って近い一同「それなら」と選んだ字が萍。「へい」「びょう」と読みますが“うきくさ”とも読みます。

晩年の父が好んで署名や落款に用いておりました。

## 仙北市長 門 脇 光 浩

2000)の作品をご紹介させていただく機会に巡り合えました。  
廣長先生は1960年から全国の風土の町並みと集落を50年来現地取材し、記録として残すため、油彩、水彩、版画で作品を制作発表しています。また米倉先生は墨彩で奥の細道や相馬野馬追、洛中洛外シリーズ、更に南船北馬の中国シリーズなどを全国で発表しておられます。

廣長先生と米倉先生との関わりは、同じ画家として、20年来の親交を重ね、米倉先生も幾度か角館を訪れ取材されています。

福島ご出身の両作家の展覧会を開催することで、福島を始めとして東北の方達の心がほんの少しでも暖くなるお手伝いが出来ればと強く願っています。

## 一期一会の大先輩

## 廣長威彦

1972年は、私が絵で一本立ちを決めた年。この年上京の折、なぜか三越本店に入った。エレベーターに乗った時、催事案内に目が止まった。その中に「＜草枕＞米倉兌墨彩展」とある。米倉先生は、確か福島在住の洋画家と記憶していた。

初めて拝見する情緒豊かな作風に心惹かれた。とり分け年増の色気ある描写に魅了した。

翌年、福島の百貨店で「草枕」展が行われていることを知って、ご挨拶に行き、三越展を偶然に拝見した話をする、初対面にも拘らず、すぐにうち解けることができた。

その後は三越展で多彩なタイトルで発表される膨大な作品を拝見し、それぞれに独自の雰囲気が漂う作品には圧倒された。

時には厳しく歴史の背景を描き、また人情味豊かなローカルなテーマには、何処か懐しい風情を描き分け、先生の人間性を覚えた。

私の一人旅取材50年の中で、二人旅は米倉先生と秋田県下りきの数回あるのみだった。

22才の年齢差がある大先輩と、27年の親交を持てたことを思い起すと、目的は異なるのに、何か共通点があったからに他ならない。

先生は孤高の画家として「わが道」を歩き、私も無所属で、自己の目的を追い求め、自由で制約を受けない生き方を継続してきた。これが強いて考えられることかも知れない。

お会いする機会に、絵の話題は全くない。発表される作品から伝わる、絵の何たるかを無言で教えられたことになる。

会津ご出身の斎藤清先生とともに、福島が生んだ二大画家と巡り会う機会を得た幸せを私の心の財産として、一期一会の出会いに感謝し、改めて大先輩方の偉業を敬愛して止まない。  
― 米倉先生晩年のある日、アトリエに呼ばれた。和筆筒の引き出しから出された和紙には、「寒山拾得」の大作の墨描きがほぼ出来上った状態で、10数作品あったように思う。

未完のままの他界は、無念の極みであつたに相違なく惜しまれる。合掌。



会津の村／蔵(7)／福島(版画)



BAN YAN HAWAII (A)

1964

## 《特別賛助展示》

福島県会津出身の国際的画家

斎藤清画伯

## ■ 収蔵版画5点初公開



<1907-1997>

1951年(昭26)にサンパウロ・ビエンナーレで日本人初の受賞。以後現代版画を斬新な造形感覚で表現。国内外で評価を受ける。代表作会津の冬シリーズは版画と墨絵で制作。慈愛シリーズは佛像を木目を生かした独自の技法が生かされている。

1995年(平7)文化功労者に選定。



憩い(B)

1981



篝火をおとして／鶉飼



島原／京第一輯

白川郷雪景(3)／岐阜(版画)



近江在原／滋賀(水彩)



## 米倉兌 墨彩



庄内の娘／羽越有情

父と子／南船北馬



## 廣長威彦

油彩・版画・水彩



高山暮色／岐阜(版画)





日中国交正常化40周年記念事業

北京オリンピック開幕式をプロデュースしたチエン・ウェイヤア演出

悲恋を描いた中国の歴史的傑作として舞台の最高賞を受賞

舞劇

大漠の純愛

大漠の純愛

シルクロードの純愛

[日本語字幕あり]

秋田県・甘粛省友好提携30周年記念事業 / 秋田市・蘭州市友好都市提携30周年記念事業 / わらび座創立60周年記念事業

たざわこ芸術村・わらび劇場

2012年9月6日(木) 午後の部 13:30開演 夜の部 18:30開演

※招待公演につき入場無料(事前の申込が必要です) ※午後の部は仙北市内中学校の貸切公演です

お問い合わせ: わらび劇場 TEL 0187-44-3915

出演◆蘭州歌舞劇院 主催◆わらび座 共催◆秋田県、仙北市



平成24年度文化庁優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業





モウガオ  
ユエヤア  
芸術を模索して砂漠を旅する青年画家〈莫高〉は、行き倒れそうになったところを偶然通りかかった  
大将軍の娘〈月牙〉に救われる。二人は敦煌で再会したちまち恋に落ちるが、大将軍は身分違いの恋を許さず、  
貴族や富豪から婚を迎えようとする。恋に身を焼く月牙は屋敷を抜け出して莫高のいる洞窟へ行く。  
大将軍は軍を率いて洞窟を取り囲み、莫高をかばって月牙は命を落とす。  
亡骸には清らかな泉が湧き、莫高は悲しみのなか飛天の大壁画を完成させる。



プロデューサー …… チェン・ウェイヤア 陳維亜

著名な演出家。中国東方歌舞団芸術総監督、副団長。中国舞踊家協会副主席。中国宣伝部“四個一批”(中国宣伝部が選抜する思想界、マスメディア、出版界、文化芸術界の優秀な人材)、中国“十大芸術英才”の一人。“アジア文化協会”学者賞に『国際舞踊百科全書』が入選した。

2008年北京オリンピック開幕式で副総監督を務め、閉幕式では執行総監督を務めた。

2010年広州アジア大会の開幕式、閉幕式ともに総監督を務めた。

芸術監督 …… スウ・シャオリン 蘇孝林(甘肅省文聯会副会長、蘭州大劇院院長)

音楽 …… ジャン・チエンイー 張千一(総政オペラ団芸術総監督)

舞台美術 …… ガオ・グワンジエン 高広建(中国国家大劇院舞台美術総監督)

照明デザイン …… シャ・シャオラン 沙曉嵐(中国東方歌舞団舞台美術、照明デザイナー)

衣装デザイン …… ハン・チュンチー 韓春啓(北京舞踊学院教授)

文物指導・題字 …… ドゥアン・ウェンジェ 段文傑(敦煌研究院初代院長)

文物指導 …… ファン・ジンシー 樊錦詩(敦煌研究院現院長)



秋田県・甘肅省友好提携30周年記念事業／秋田市・蘭州市友好都市提携30周年記念事業／わらび座創立60周年記念事業



平成24年度文化庁優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業

## たざわこ芸術村・わらび劇場

2012年9月6日(木) 午後の部 13:30開演 夜の部 18:30開演

※招待公演につき入場無料(事前の申込が必要です) ※午後の部は仙北市内中学校の貸切公演です

お問い合わせ：わらび劇場 TEL 0187-44-3915

### わらび座と蘭州歌舞劇院

秋田県と甘肅省、秋田市と蘭州市との友好提携から今年で30周年を迎えました。8月には記念事業としてわらび座ミュージカル「アトム」が、蘭州市の「金城大劇院」をはじめ甘肅省内2都市で上演されました。

また同様に蘭州歌舞劇院の舞劇「大夢敦煌」を秋田市に続いて仙北市でも上演致します。それぞれの地域を代表する劇団の舞台芸術を通して、日中両国の交流促進に繋がっていただければ幸いです。





## 「舞劇 大夢敦煌〜シルクロードの純愛」のストーリー



「大夢敦煌」は蘭州歌舞劇院が2年の歳月を経て、敦煌をテーマに創作した作品です。この作品は敦煌の蔵経窟が発見された2000年（偶然にも敦煌学が100周年を迎えた年でもある）の春に北京で初めて上演し、2004年には中国国家舞台芸術精品プログラムのランキングトップに位置づけられました。「大夢敦煌」はこれまでに中国国内の30余りの都市とオーストラリア、フランス、スペイン、ポルトガルなどの海外でも上演しており、日本公演でちょうど1,000ステージ目を迎えました。ステージ上に鮮やかに再現された世界遺産《莫高窟(ぼっこうくつ)》を背景に、清貧な青年画家〈莫高(モウガオ)〉と大將軍の娘〈月牙(ユエヤア)〉の、許されぬ恋の行方を描いた物語は、まるで中国版ロミオとジュリエットです。

### (序章)

物語の舞台は20世紀初頭の敦煌(とんこう)・莫高窟(ぼっこうくつ)洞窟の番をする道士が大量の古文書を発見した。中の一巻をひもとくと、そこにはシルクロードを舞台にしたある愛の伝説が描かれていた。





### (第1幕)

芸術の高みを求めて憧れの地・敦煌を目指す青年画家「莫高（モウガオ）」は、広大な砂漠のただ中で行き倒れ、幻の飛天を見る。そこを勇ましく凱旋してきた軍隊の中に一人の見目麗しい若武者がいた。実は大將軍の愛娘「月牙（ユエヤア）」で、幼い頃から父に武芸を仕込まれた腕達者だ。月牙は自分の三日月型の水筒を莫高に投げ与えて命の危機を救い、かわりに莫高が大切に抱える絵巻物を持ち去る。

### (第2幕)

敦煌は東西文化の交叉するシルクロードの大都市。活気に満ちた街中で莫高は月牙と再会し、二人の間には恋の予感が芽生える。ある夜、洞窟の中で創造の靈感に打たれる莫高のもとに月牙は乳母を従えて忍んでくる。巻物と水筒はそれぞれ持ち主の元に戻り、愛情の炎が燃えさかる。



### (第3幕)

月牙の父は身分違いの恋を認めず、王侯貴族や大商人の中から娘婿を選ぼうとする。求婚者の集まった舞踏会の夜、月牙は莫高の姿を追って、屋敷を抜け出してしまう。

### (第4幕)

大將軍は軍隊を率いて洞窟を包囲する。月牙は敢然と立ち向かい、自らの命と引き換えに再び莫高を救う。月牙の亡骸にはこんこんと尽きることのない泉が湧いた。莫高は泉の水で絵筆をぬらし、憑かれたように飛天の大壁画を描くのであった。シルクロードは鳴沙山（めいさざん）のふところに伝わる「莫高窟」と「月牙泉」の悲恋のものがたりである。月牙の命の泉から力を得た筆で、莫高が憑かれたように描くクライマックスは圧巻の一言です。

## 友好30周年記念し中国・蘭州市の劇団

## 秋田、仙北市で舞劇上演

本県と中国・甘肅省、秋田市と同省蘭州市の友好提携30周年を記念し、蘭州市の劇団・蘭州歌舞劇院による舞劇「大夢敦煌」シルクロードの純愛」が9月上旬、秋田市と仙北市で上演される。日中国交正常化40周年記念事業として、8月下旬に東京公演も行われる。東京公演を主催する甘肅省、蘭州市の両人民政府関係者や制作スタッフが8日、都内で制作発表会見を開き、「友好と文化の使者として日本の方への友情を表現したい」と語った。

## スタッフら都内で会見

大夢敦煌は2000年に北京で初上演され、これまで中国各地や欧州などで千回近く公演を行った。東西文化が交わるシルクロードの大都市・敦煌を舞台に、青年画家と將軍の娘の悲恋を描いた「中国版ロミオとジュリエット」。

開幕式で副総監督を担当した演出家・陳維亜氏が総合プロデューサーを務めた。会見で陳氏は「(ステージは)流動する莫高窟というイメージ。美しさにきつと涙を流してもらえと思う」とPRした。

秋田市公演(同市主催)は9月2、4日の昼夜計4回。会場は市文化会館で、昼は小中学生、夜は公募でそれぞ

れ約千人を無料招待する予定。問い合わせは市企画調整課 ☎018・866・203

2

仙北市公演(わらび座主催)は同6日にわらび劇場で2回実施。このうち1回は市内の中学生約700人を無料招待する予定。問い合わせはわらび座広報伝営業室 ☎0187・44・3855



制作発表記者会見に臨む陳氏(左から2人目)ら。東京・虎ノ門の東京中国文化センター

東京公演は8月29、31日、渋谷のBunkamuraオーチャードホールで行われる。また、本県のわらび座も8月、蘭州市でミュージカル「アトム」を上演する。

(斉藤賢太郎)

資料提供 平成24年7月3日

観光振興課国際観光班（長嶋・小笠原）2268

美の国秋田ネット掲載 有

## ピープル・トゥ・ピープル学生親善大使の秋田県訪問について

アメリカの第34代大統領アイゼンハワーの提唱により発足した財団「PEOPLE TO PEOPLE INTERNATIONAL」が運営する、米国の中高生を対象とした短期滞在型プログラム「PEOPLE TO PEOPLE AMBASSADOR（学生親善大使） PROGRAMS」が秋田県を訪問します。

プログラムの目的は、学生が外国を旅行し異国の文化と生活風習の違いを体験したり、スポーツなどを通じて交流することにより、健全な精神と平和な社会に対する精神を育成すること、交流により国際理解を深めることとされています。

県内の行程では仙北市が主な滞在先となっており、ホームスティや学校訪問など、さまざまな形で国際交流を深めることにより、アメリカからの誘客を図りたいと考えています。

1 訪問人員 70名（6名の財団スタッフ含む）

2. 訪問時期

県内行程 平成24年7月7日(土)～11日(火)

（全体行程 平成24年7月1日(日)～14日(土)）

3. 秋田県内での主な行程

7月7日（土） 16:00 たざわこ芸術村で「仙北市歓迎の集い・オリエンテーション」

8日（日） ホームスティ先にて終日交流（夏野菜収穫体験など）

9日（月） 10:00 学校訪問

Aグループ 神代小学校、中川小学校

Bグループ 角館小学校、白岩小学校、西明寺小学校

12:30 昼食（田沢湖ビールレストラン）

13:15 武家屋敷散策と安藤醸造見学

15:00 田沢湖散策

10日（火） 10:30 知事表敬訪問（県正庁）

11:30 国際教養大学訪問

15:00 たざわこ芸術村で踊り・太鼓体験

16:30 お別れ交流会

11日（水） 7:30 岩手県へ出発

※時間については変更することがあります。



ピープル・トゥー・ピープル アンバサダープログラムス  
感謝状

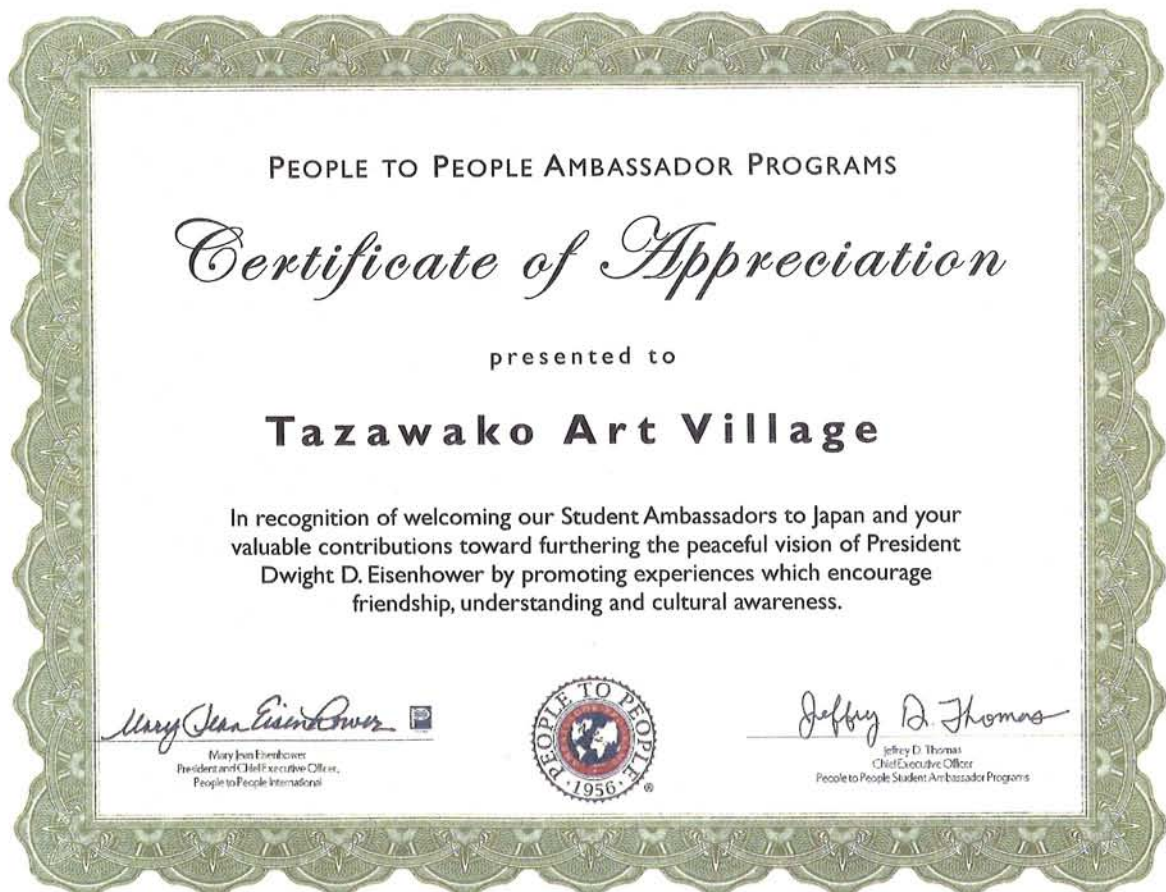
学生交流大使プログラムの受入において、皆様の多大なる貢献に深く感謝いたします。

皆様の活動は、「教育や交流を通して文化・友情関係・相互理解への意識を促すことで次世代への平和を願う」といったアイゼンハワー元大統領の平和的ビジョンを実現させてくださいました。

皆様の献身的なご尽力に、ピープル・トゥー・ピープル アンバサダープログラムスは心より感謝申し上げます。

メアリー・アイゼンハワー  
ピープル・トゥー・ピープル インターナショナル  
会長・CEO

ジェフリー・トーマス  
ピープル・トゥー・ピープル アンバサダープログラムス  
CEO







和太鼓講習会



たざわこ芸術村で劇団わらび座メンバーによる笛の歓迎演奏

◆2012年7月7日から11日までの5日間、USAのピープル・トゥー・ピープル「学生文化大使プログラム」事業で、アメリカの中学生・高校生たち80名が、秋田の「たざわこ芸術村」(わらび座経営・運営)で地元のホームステイも含めて国際交流。多くの地元の皆様とともに、日本の農村地域での文化交流を楽しみました。全員の子どもたちから「エキサイティングな東京・秋葉原よりもはるかに良かった」の感想が出され、2年目以降も継続事業として実施されます。

# 元気してらが フェスティバル

**入場  
無料!**

**予約不要**

直接会場へ  
お越しください。



## 年に一度のお楽しみステージ!

歌って、踊って、太鼓にダンスに盛りだくさん!

ご近所のアノ人が出演するかも!? きてたんせ! 元気フェス!!



東今泉八幡太鼓ジュニア

イイものいっぱい!

### 『地産地消の店』

(劇場ロビー 11:00~) オープン!!

おやき、ゆべし、米粉ケーキ、切り干し大根、  
バターもち、コーヒー、比内地鶏燻製、弁当、  
和紙小物などなど、地元の美味しいもの  
イイものが大集合!



今年もやります!  
桜秀心舞

岩手県立一戸高等学校 華一ダンス

- いなほ会 ●
- 笑舞会 ●
- 愛仙にじ ●
- 丸子寿会 ●
- なでしこ大仙 ●
- 東今泉八幡太鼓 ●
- ネオビート協和 ●
- 角館手おどり会 ●
- 大仙ダンスの会 ●
- エハ・リーフ・フラ ●
- 豊川大正琴同好会 ●
- 花館新舞踊サークル ●
- たかはらてるおと ●
- ほほえみシスターズ ●
- 年金受給者協会ダンス部 ●
- 東今泉八幡太鼓ジュニア ●
- 美郷の郷美会(さとみかい) ●
- 西仙北レクダンスサークル ●
- サンワーク六郷・合唱クラブ ●
- 秋田県立大曲養護学校中学部 ●
- 桜秀心舞(おうしゅうこころまい) ●

出演団体  
(順不同)

2013年 **2月24日** (日) 13:00▶15:30  
(12:00開場)

**たざわこ芸術村 わらび劇場**

●お問合せは●

元気してらがフェスティバル開催事務局(NPO法人アート夢ネットあきた内)

TEL:0187-44-3970 FAX:0187-44-3318



当日は駐車場が大変  
混雑します。  
お車でのご来場は、  
なるべく乗り合わせて  
お越しください。

主催/NPO法人アート夢ネットあきた 協力/わらび座 後援/仙北市、大仙市、美郷町



2012 日本ブルーベリー協会・第17回全国産地シンポジウム

# ブルーベリーin秋田with東北

～消費者と生産者の絆で東北農業の復興を!!～



期 日 2012年6月29日(金)～30日(土)

会 場 たざわこ芸術村・わらび劇場 (定員:700名)

日 程	内 容	会 場	参 加 費
1 日目	13:00 ↓ 18:00 (休憩) 18:45 ↓ 20:30	シンポジウム 開会式・記念公演・基調講演・各県報告	会 員:5,000円 (同行1名は会員料金) 一 般:7,000円 東北各県:2,000円 (東北支援特別会費)
		情報交換交流会	6,000円
2 日目	8:00 ↓ 11:30 ↓ 12:10	産 地 見 学	3,000円 (シンポジウム参加の方にご案内)
		閉 会 式	

主 催 日本ブルーベリー協会・2012ブルーベリー in秋田with東北★実行委員会

協 賛 JA秋田おばこ農業協同組合

後 援 農林水産省 秋田県 大仙市 仙北市 美郷町  
園芸学会 日本農作業学会 (社)全国農業改良普及支援協会 (社)全国学校栄養士協議会  
全国農業協同組合連合会秋田県本部 (株)日本農業新聞 全国農業新聞 河北新報社  
秋田魁新報社 読売新聞秋田支局 毎日新聞秋田支局 ABS秋田放送 AKT秋田テレビ  
AAB秋田朝日放送 エフエム秋田 (順不同)

お問合せ  
お申込み

秋田現地実行委員会

〒014-1113 秋田県仙北市田沢湖卒田字早稲田430  
TEL/0187-44-3970 FAX/0187-44-3318 メール/kikaku@warabi.or.jp

## 平成24年度 文化庁「文化芸術創造都市モデル事業」

### 仙北実行委員会 事業報告書

平成25年3月

発行 「文化芸術創造都市モデル事業」仙北実行委員会

〒014-1192 秋田県仙北市田沢湖卒田字早稲田 430

「たざわこ芸術村」内

電話 090-3363-5529（是永）

e-mail [korenaga@warabi.or.jp](mailto:korenaga@warabi.or.jp)

☆本報告書は、文化庁の委託事業として、「文化芸術創造都市モデル事業」仙北実行委員会が実施した平成24年度事業の成果を取りまとめたものです。従って、本報告書の複製、転載、引用等には文化庁の承諾手続きが必要です。